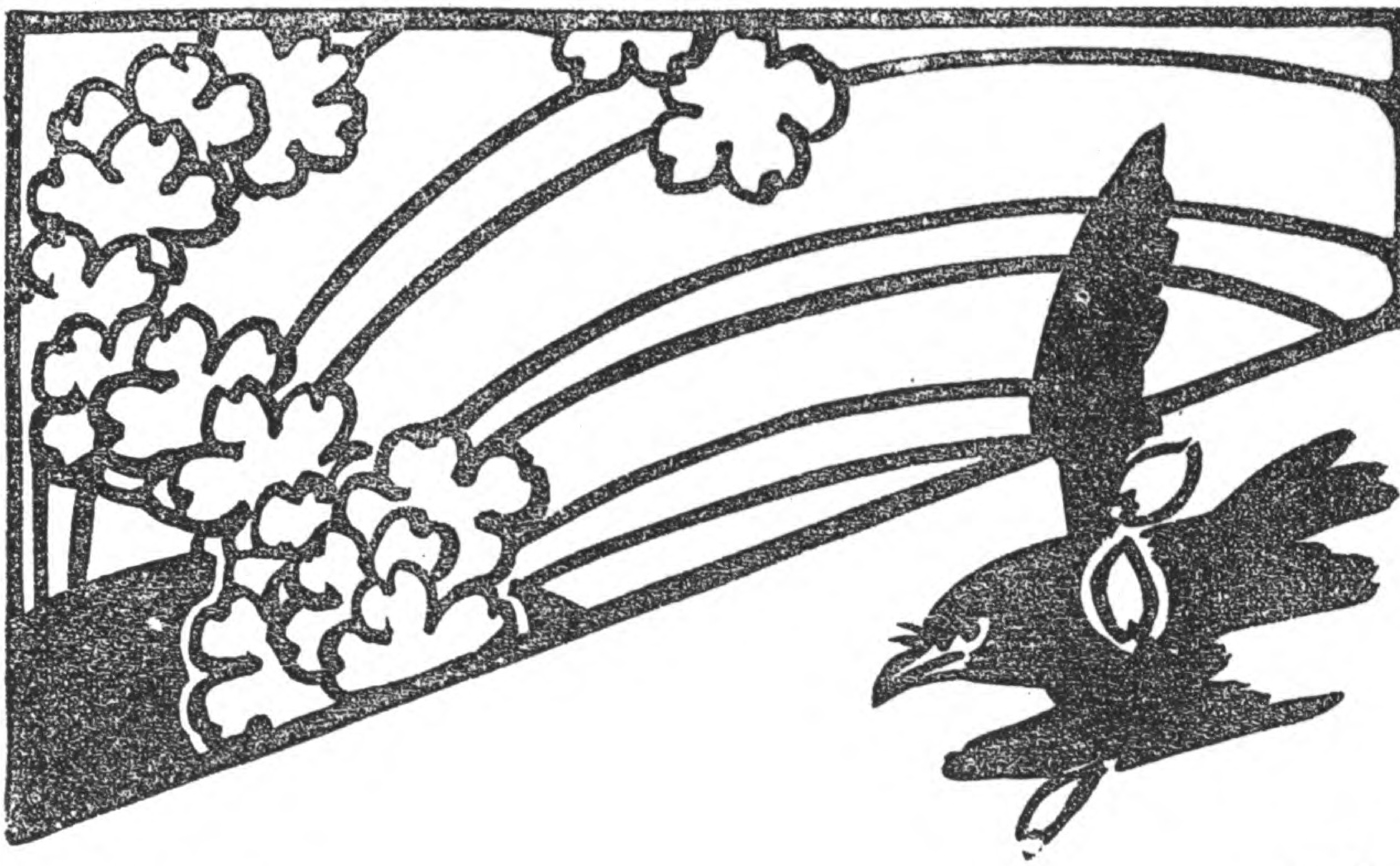
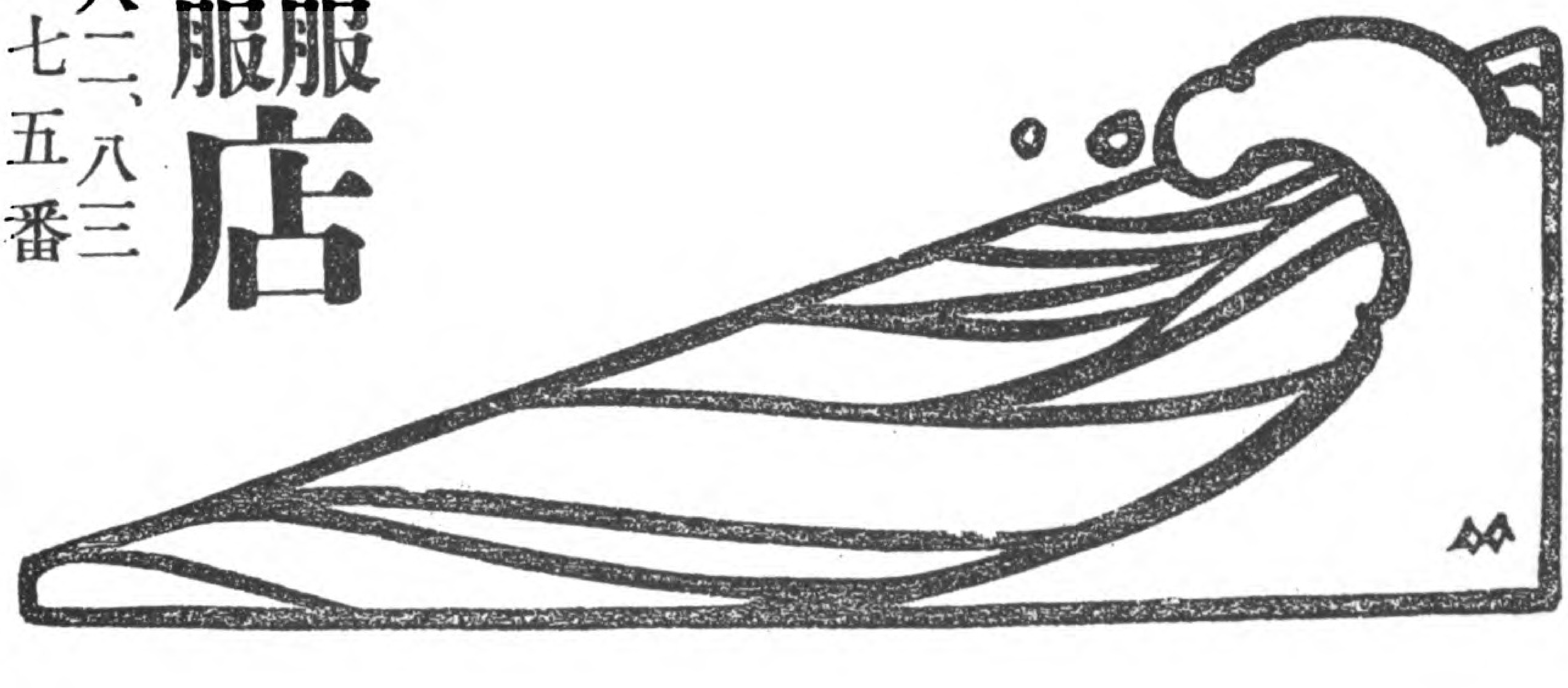
明治卅八年四月一日發行（毎月壹回）
明治卅七年十二月十九日第三種郵便物認可




東京女子文壇社發兌







注意――此目次を熟讀順次内容閲覧を乞ふ

# 第壹巻 女子文壇 第四號

## 目次



▲本誌の自慢――號を重ぬるに從ひ内容善美、價格亦無類の低廉は獨特の自慢也

本號には名譽賛成員の芳名は休掲す

百聞は一見に如かず《本誌前號略目》

女子文壇

## 第三號要目

發行忽品切 《增刷出來》

▲水彩畫

○春の郊外(石版九遍刷)……三宅克己

▲寫眞口繪

○故中島歌子女史舍中十五六年前の面影

(裏面刷込○谷中の朝霜　弘田ゆき子　三宅龍子)

○歐洲風俗(佛國最近流行の婦人帽裝)

○梅と櫻(山中古洞先生大野靜方先生筆)

○名家肖像{久保文學士、中内文學士、津田梅子女史、三輪田眞佐子女史、矢島揖子女史

○女性と文學……(社說)

▲名家文壇

○俗謠茶話……文學士　志田素琴

○月　香(承前)……文學士　久保天隨

○國文評釋(竹取物語三)……文學士　中内蝶二

○もとのしづく……三宅花圃

▲家庭

○「はな」と婦人……前田曙山

○理想の家庭……池田朝村

○鳩翁道話を讀みて思出のまゝ……矢田鶴之助

○婦人と宗教……内村鑑三

○日本婦人の衣服……長井博士夫人

▲女流小影

○三宅花圃女史　○津田梅子女史

○三輪田眞佐子女史　○矢島揖子女史

其他才媛淑女の手に成る▲美文、消息文、雜文、小說、圖畫、新體詩、はがき文、短歌、俳句皆懸賞詞文豐富

○本號より▲津田河井女史「英文」新設

▶第壹號　毎號懸賞詞文滿載　賣切◀

女子文壇

## 第貳號要目

大好評 《五版》

▲水彩畫

○早稻田の雪(石版九遍刷)……三宅克己

▲寫眞口繪

○皇太子妃殿下○皇長孫廸宮殿下○皇次孫淳宮殿下

○棚橋絢子女史　○奧村五百子女史　○下田歌子女史

○跡見花蹊女史　○鳩山春子女史　○三宅花圃女史

○第二聲(社說)

▲名家文壇

○女子の文藝……文學博士　萩野由之

○國文評釋(竹取物語二)……文學士　中内蝶二

○月　香……文學士　久保天隨

○湘南の春……竹貫直人

▲家庭

○婦人の正義……松井柏軒

○儒教的倫理の一節……岸上質軒

○和樂なる家庭……慶應義塾教授　菅　綠陰

▲女流小影

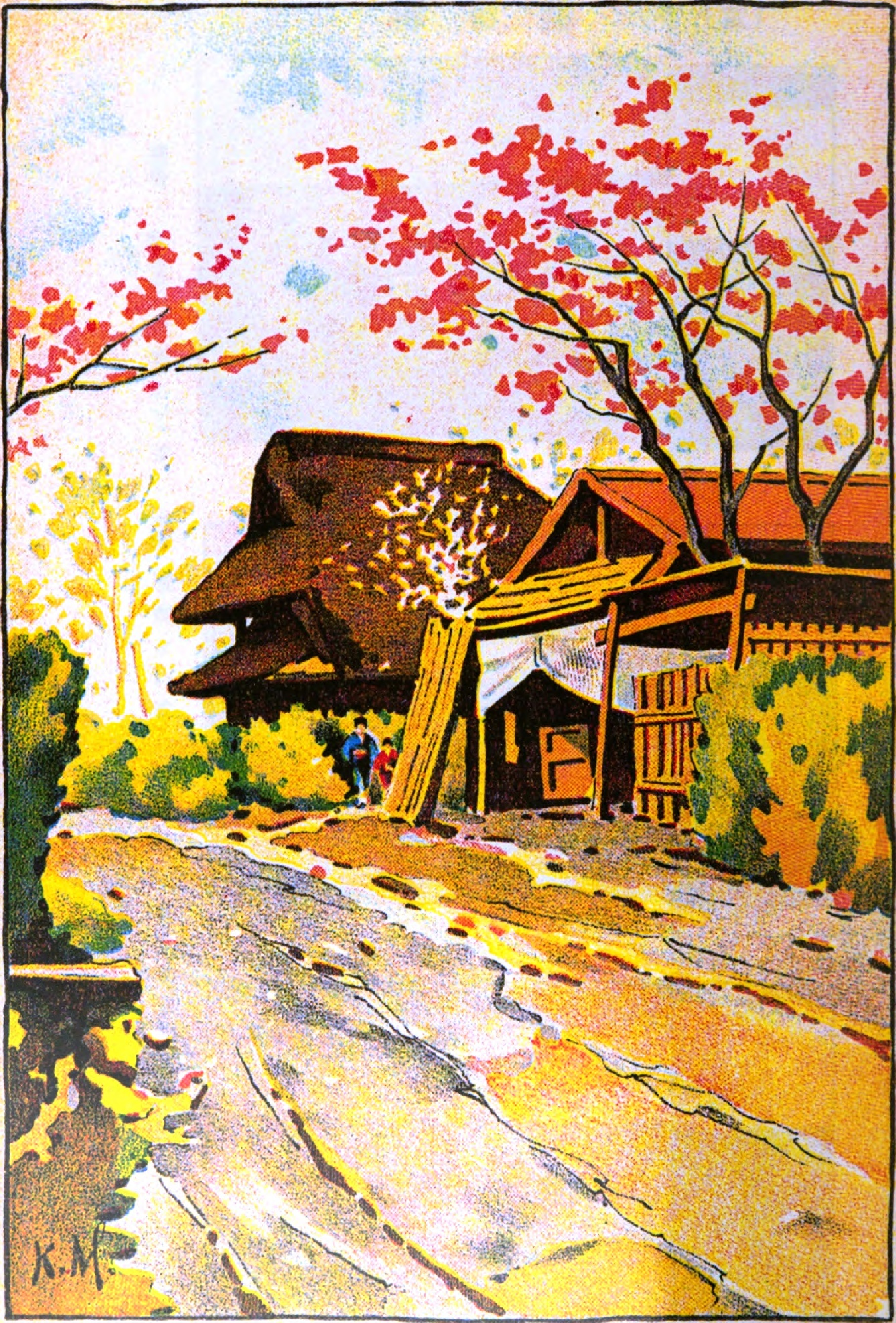
○棚橋絢子　○跡見花蹊　○奧村五百子　○下田歌子

○鳩山夫人　○安井哲子

其他才媛淑女の手に成る▲美文▲消息文▲雜文▲小說▲新體詩▲はがき文▲短歌▲俳句の懸賞詞文豐富なり

㊟第五版殘本僅少賣切れ仝樣なり增刷せず

# 大久保村の春




三宅克己先生画

東京三間印刷

ビ

# （雪）（花）鶯宿梅

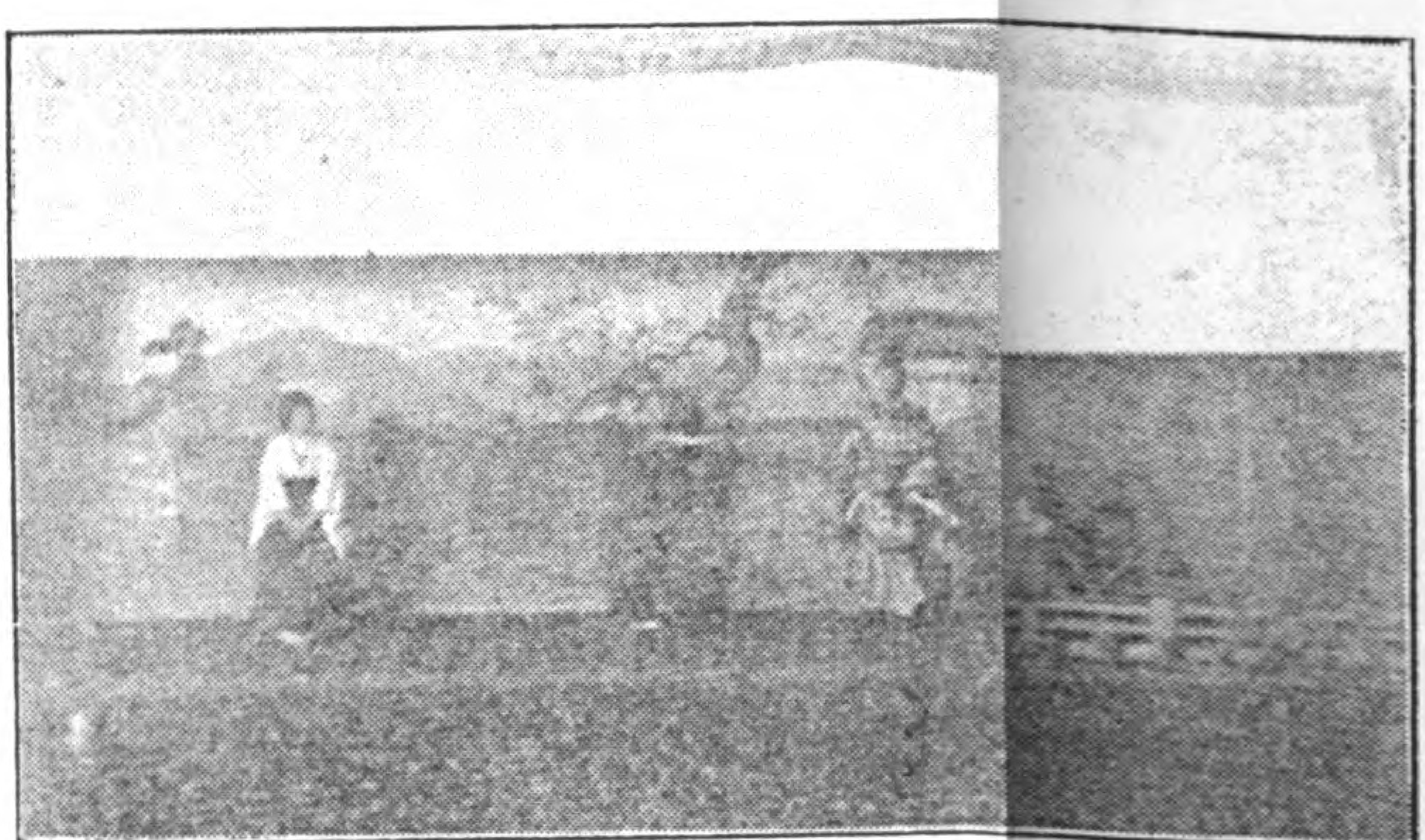
演者

紀内侍　伊藤かよ子

女童　服部せい子

藏人惟正　大倉みや子







影（同館特別寄贈）

# 米國交際社會貴婦人



大統領ルーズベルト氏夫人



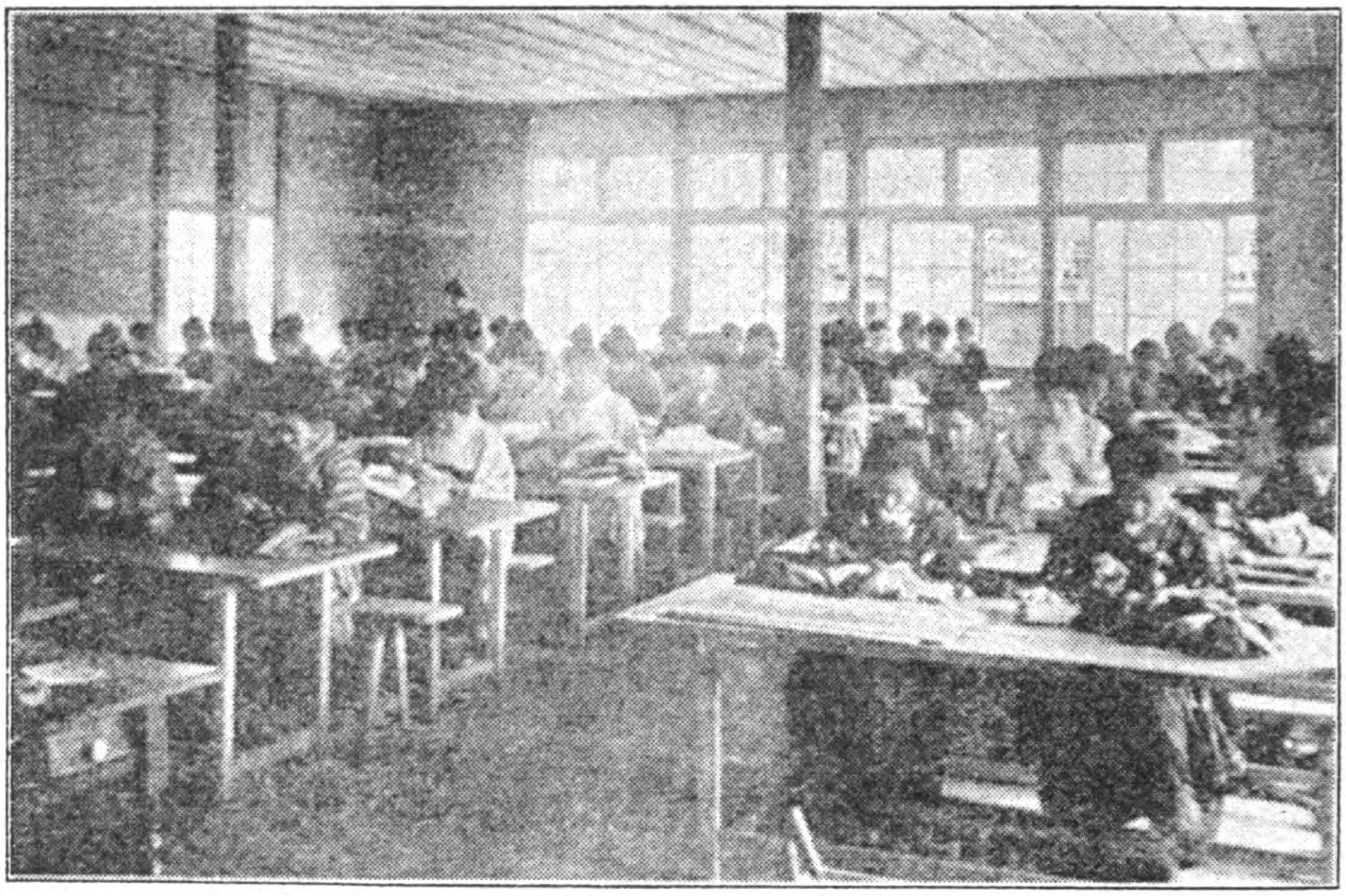
海軍秘書官モールトン氏夫人



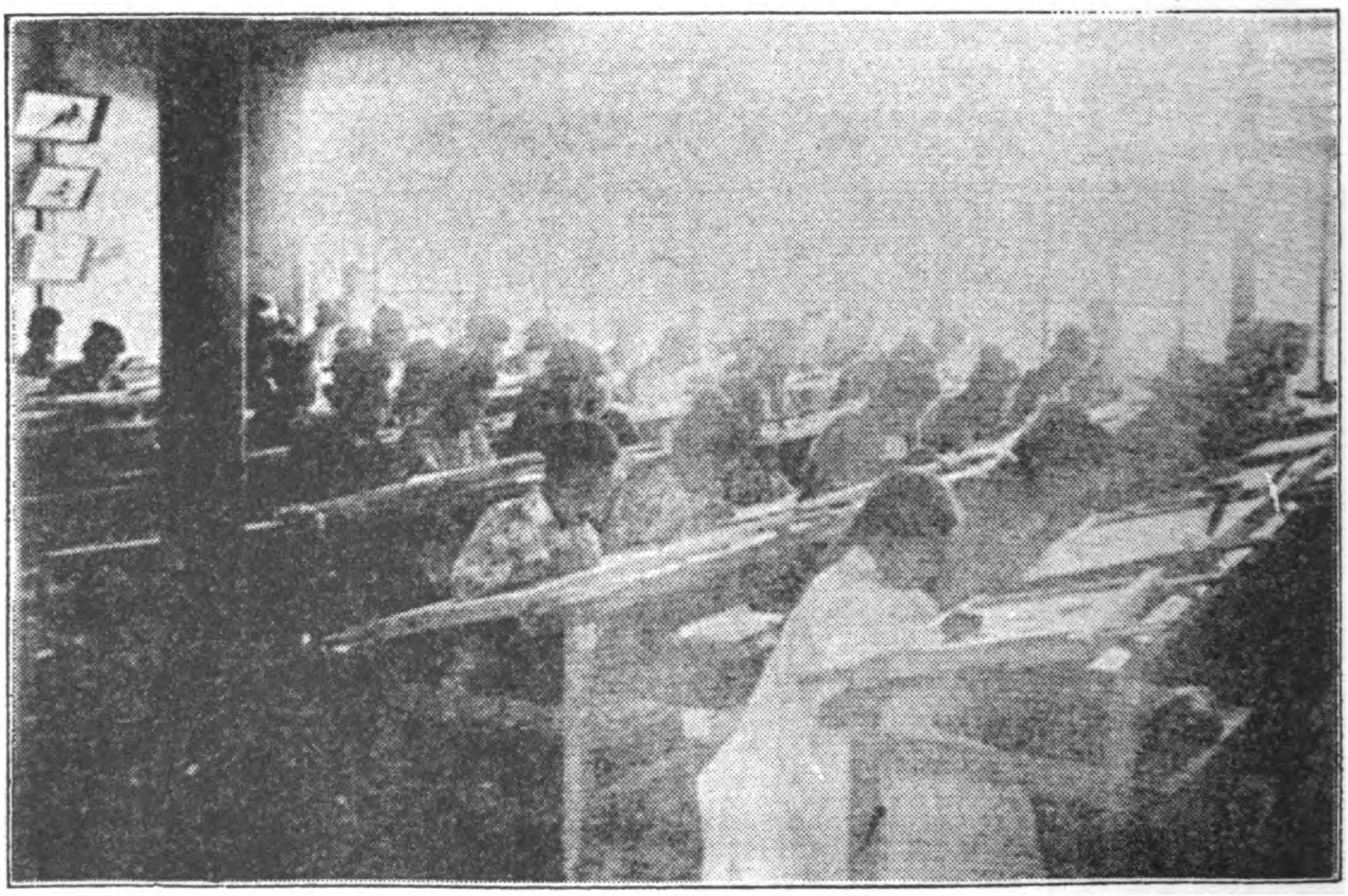
元老院議員ノックス氏夫人

# 女子美術學校教室

（本鄉區弓町二丁目所在）



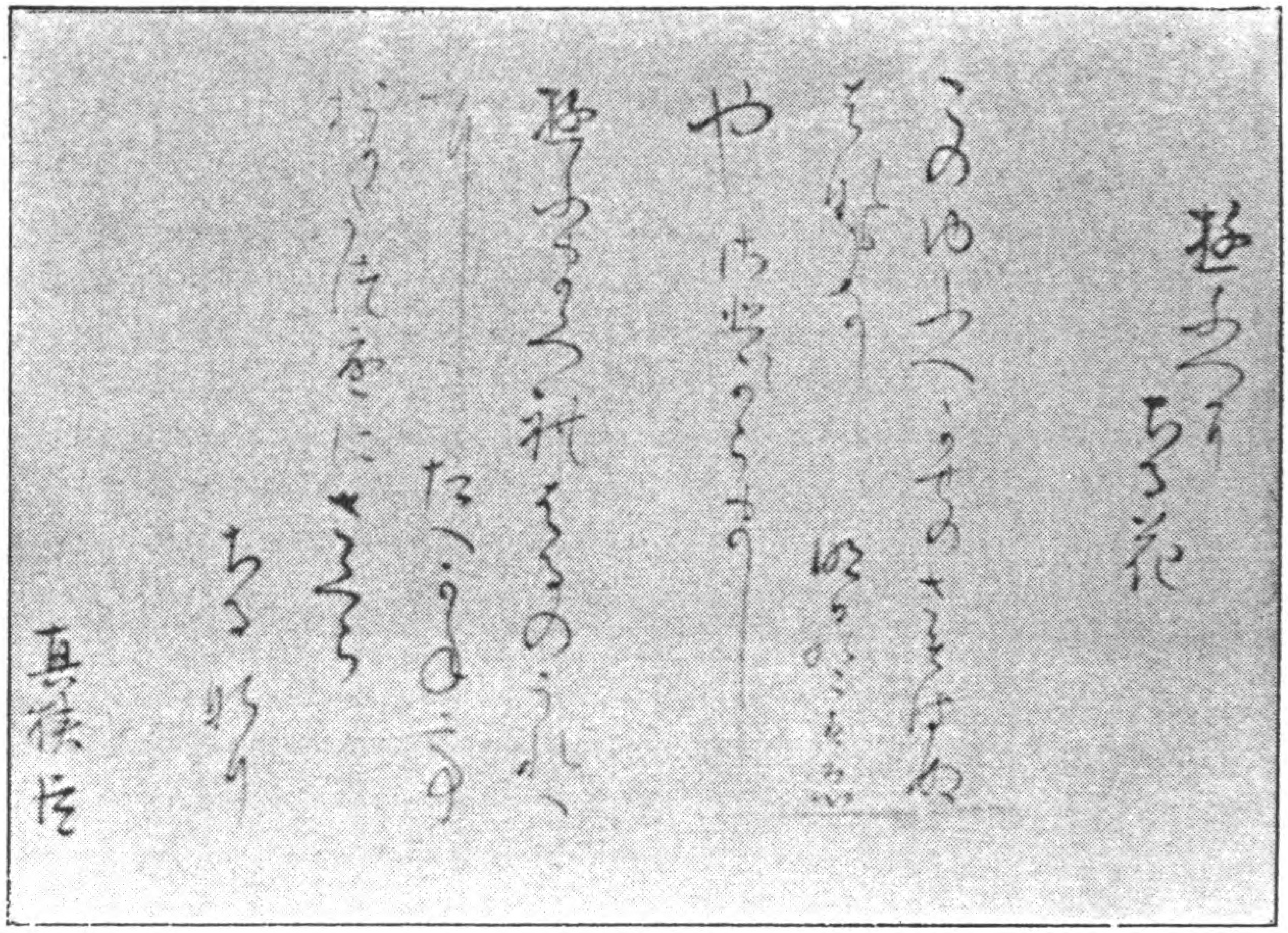
裁縫科教室



刺繡科教室

（同校寄贈）

阪正臣君筆蹟



故老鼠堂永機翁筆蹟



物思ひ



（鰭崎英朋君畫）

花見



（池田輝方君畫）

廢園の幻



（鏑木清方君畫）

☞清新の筆を以て親切に明瞭に實際に立入つて記せる☜

# 女子一生涯の生理的教訓

無名氏編 ▼再版出來▲ 菊判洋裝總クロース美本 紙數二百拾有餘頁

# 女子養生訓

全一册 定價金七拾錢 郵稅不要

軟弱い身を以て人種保續といふ大役を引受けて居る女子に取つて最も必要な智識は、大部分學校の教科書以外のものでありますが、さて誰しも言ふを憚り聽くを避ける此種の智識は、當然の教師たるべき母親や姑までが、多くは口を箝んで教へ導かれば、無經驗な娘達や若い妻君達の多數は殆ど盲探りに見えぬ道を辿るといふ有樣でありますからして、どうしても無理不自然があつて、其結果は峻嚴しき自然の懲罰を免れないのは、實に氣の毒の次第と言はればなりませぬ、といふ證據には、御覽なさい、今日一人前の分別ある女子て、少しも身體に狂ひの無い者が幾人に一人ありませうか、學理の目から見て本當に性の合つて居る圓滿の夫婦がどれ程ありませうか、至る所蒼白い顔と皺寄せた眉根で道行く人を不快に感ぜしめ、藥屋を喜ばせ、離縁の統計で世界を驚しつゝあります、これ果して誰の愆でせうか、社會の不道德や社會組織の不完全はさることながら、そもそも母たるもの姑たるものの不注意不親切、それよりも自分自身の無智無責任が第一の原因でなければなりませぬ。

左に目次を列記すべし



發兌元 東京市日本橋區本町三丁目十七番地 電話本局三百二番(特)本局千六百十七番 金港堂書籍株式會社

◎女子必携◎

◎北島研三氏譯(再版) **處女衛生** 全一册 價貳拾錢

◎弘田醫學博士閲 木村小兒科醫著(再版) **普通育兒法** 全一册 價七拾錢

◎齋藤弔花氏編 **新化粧法** 全一册 價三拾錢

◎佐田文學士著 **婚姻文學** 全一册 價廿五錢

◎本社編 **遊學案內東京の女學校** 全一册 價三拾錢

◎池邊藤園氏 增田村雨氏 合著(再版) **美姫遺蹟** 全一册 價貳圓

◎弘田三重縣師範學校長案 **女子新論** 全一册 七拾五錢

◎下田文學士著(再版) **女子教育** 全一册 價貳圓

▼圖書目錄 郵券四錢封入申込ば進呈

文學士 大町桂月先生序
長谷川天溪君校閲
立野天風君編

# 立志訓

（好評）

全一冊袖珍
新形美裝
正價廿錢
郵税二錢

## 新版

大町先生の序に曰く「われ德育上、學校の倫理談のみにては不可なるを知り、學生の爲に、學生訓、處世訓、青年訓などの書を、ひきつゞき、世に公にしけるが、淺學菲才なる身の言ふ所、もとよりォーソリチーとなすに足らず、閑あらば、古今東西の先哲の至言を集めて、一部國民の經典とするに足るべきものをつくらむと思ひしが、今立野君の此書を見るに、余の作らむと思ふものをつくられたり。余は日本國民の爲に一部簡便なる經典を得たることを祝せざるを得ず」以て本書の價値を知り賜へ。

## 諸新聞評判記一班

▲萬朝報
本書は勸學、立志、修養、時間、讀書、立志龜鑑、酒色の七編に別ち、和漢古今に亘り偉人傑士の訓言訓誡を編集したる者なり、駄文を習るとは遊び、余篇皆先哲の格言を聽くとなれば益する所少からざるべし（朝北）

▲日本
本書は先哲の至言を集めたるものなり勸學訓、立志訓、修養訓、時間訓、讀書訓、立志龜鑑、酒色訓の七編に分ち悉く金玉を收む當世青年のみとは云はず一般の常に必誦すべきものなり

▲電報新聞
此書章を勸學訓、立志訓、修養訓、時間訓、讀書訓、立志龜鑑、酒色訓の七に別ち古聖先哲の訓諭中、今の青年に最も適切せるものを擇みたり、編輯の方法亦宜きを得たり、くだらぬ閑文字の冊子と同一視すべきにあらず

▲中央新聞
本書は勸學訓、立志訓、修養訓、時間訓讀書訓、立志龜鑑、酒色訓の七篇に分ち古今の名士の訓戒を集めたり斯くの如き本は幾何出來ても無益てなし

▲讀賣新聞
此書章を分つて勸學訓、立志訓、修養訓、時間訓、讀書訓、酒色訓とし別に立志龜鑑といふ一篇あり、古今と東西との英雄豪傑學者文人並びに聖賢の言行を集録せる良書なり

▲毎日新聞
著者當世に觀るあり此に東西幾多先哲の訓言誡語を集めしもの詩歌あり論文あり逸事あり實歷談あり一讀快絕氣を養ひ志を勵ますに足る

▲越佐新聞
遉は立野天風氏が古今東西の先哲の至言を集めて冊子となしたるものにして國民の經典と爲すに足る

發兌元 東京小石川區指ヶ谷町一三三番地 文光堂

大賣捌 東京堂 上田屋 北隆館 東海堂 良明堂 其他秀才文壇賣捌所各書店にあり

# 女子文壇

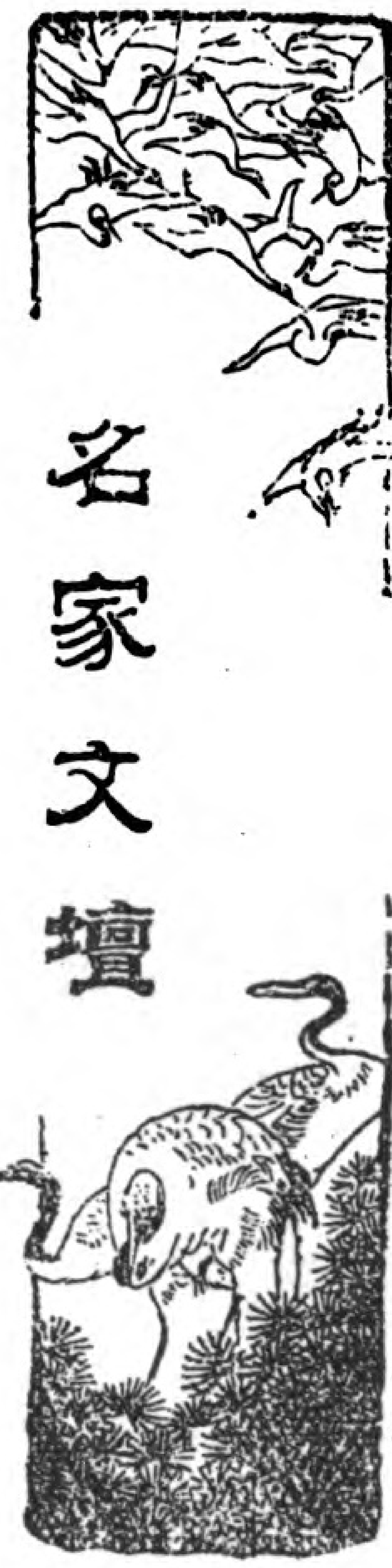
第壹巻第四號

四月一日發兌



## 學校以外の修養

近來女子教育の聲は非常に盛んになつて、到る處女學校の設立を耳にするが、是等女學校に於て教育を受けられる諸孃に向つて、吾人は學校以外の修養も亦必要である事を一言しやうと思ふ。成程學校教育は完全に相違ない、けれども餘り整ひ過ぎて、學校で教はつた事ばかりを一意遵奉して居て、他を顧みなかつたならば所謂融通のきかぬ人間となり、活動する場合にも活動が出來なくなる恐れがある。家庭の事も然うであるが文藝の事も然うである、何處の學校でも豫め教ゆる學課なり用書なりが一定してある上、時間や規則にも制限があるから然う自由にはならぬ。譬へば土佐日記は何處でも教へるが竹取物語は教科書に用ゐない、和歌の課目はあつても未だ新躰詩の課目はない。けれども苟くも文藝にたづさはらうと思ふ程の女子は、土佐を知つて土佐以上の趣味ある竹取を知らぬと云ふやうてもならず、和歌の作法は知つて居るが新躰詩は未だ讀んだ事はないと云ふやうでは時勢に遠ざるかも遲いかなで、是は何うしても學校以外に、讀むべき書籍を讀み、養ふべき力も養はればならぬかと思ふ。吾人不敏と雖、既に女子文壇の爲に立つ、此點に於て缺けたる處を補ひ、趣味の養成に多少の貢獻を爲すべき事を宣言する。




# 作文につきて

文學士　武島又次郎

文章といふのは何かかざりのある普通の言語と違つた書きかたをしたものゝやうに心得て、したがつて尋常の人はこの作りかたを知らなくてもよいやうに思うてをる人もあるやうですが、これは大なるあやまりです、

文章といふのは人の思想を言語や文字にあらはしたものをいふのです。何やかや、人に通ずるために自分の思うたことを言葉に出して示すのが文章であるのです、すべて人間と動物とちがふことは思ふとを言語にあらはすことが出來るか出來ないかといふことに主として存じてをるのであらうと思ひます。人間も動物も悲しいとかうれしいとか心に思ふことはあるのです。たゞ人間はこれを言語にあらはす働をもつてをり、動物はこれをもつてをらない區別があるのです。さすれば文章を作るといふことは實に人間の人間たる特點ともいふべきことであつて、人間たる以上は必ずこのはたらきにつきて一通り知識をもつてをらなければならぬと思ひます。

然らばいかにして文章を作ることが出來るか。これはなかなか大い問題であつて、ちよつとこゝにのべることは、とてもできませぬ。しかしその心がけとすべき多くの規則のなかで最、大體にわたつた、また必要なことをいふと次の三つであらうと思ひます。則まづ第一には

## 讀書

といふとです。水源がなければ川もながれぬと同じことで、思想の源がなければさう〳〵人はおもしろい考をうかべだすことは出來ませぬ。しかるに考がなけれ

ば文章は出來ぬわけですから、文章を作らうと思ふものはまづ思想の資本を作るといふことが肝心になつてきます。で、この思想の資本を得るの得策は讀書といふことにあるのです。

讀書といひても書物はかぎりのないものでありますから洵に漠然とした問題です。しかしながら、無論自分の得むとする思想になるべく關係のふかい書物をよむことにあるのですから、その範圍は大分ちゞまつてくると思ひます。

それで文章のうちでもことに人々が多くかくのが手紙で次に山川草木のありさまなどをしるした記躰文、またいろいろの出來事をしるした敍事文、つゞいて旅の話をする紀行文、それにつゞいてはおのれの主張をあらはす議論文などでありませう。これらの種類につきてそれ〳〵參考とするため讀むべき書物の二三をあげると、手紙文にては

一葉女史著　通俗書簡文

などがよろしいでせう。記躰文にては

徳富蘆花著　自然と人生

などが手本になりませう。敍事文にては

伴嵩蹊著　近世畸人傳
榊原芳野著　明治孝節錄
新井白石著　藩翰譜
柳澤淇園著　雲萍雜誌

などがよろしいでせう。紀行文にては

香川景樹著　中空日記
大町桂月著　一蓑一笠

などがよく、議論文では、

室鳩巢著　駿臺雜話
福澤諭吉著　福翁百話
三輪田眞佐子著　女子の本分

などが手本とするによろしいでせう。これらの參考書は絕對的によいといふのではありませぬ。これよりすぐれたものが澤山ありますけれども、得やすいといふことゝ女子にかなうたといふことゝ通俗といふことゝの三方面から見て適當と思つたものをあげたのです。

次に文章を作るに忘るべからざることは

## 悟入

といふことです。悟入といふのは人の文章を讀んで、こゝがよい、こゝがこの規則を用ゐたのだ、なるほどうまいと呑みこむことです。

いくら天下の名文を讀んでも、たゞ讀んだきりで、何が何やらわからずやて讀みをはつたのでは何の役にもたちませぬ。なるほどゝ悟つて始めてそれが自分の文章にはたらいてくるのです。ですから、讀書も肝心であるのですけれど讀書だけでは、利益がない。讀書と同時に悟入しなければならぬといふことを忘れてはなりませぬ。なほ悟入といふことにつきてはもちつと詳しくのべやうと思ひます(未完)

# 歌の糸口（完璧の續き）

大和田建樹

## 二、その思想

歌の根本となるものは「こゝろ」即ち思想なり。かの節用集の類に出でたる。

海なきは山城大和伊賀河内
筑紫に筑後丹波美作

などの歌は。地理を教ふる目的にて。詞の數こそ三十一字なれ。自然の美を歌ふ目的ならねば。眞の歌とはいふべからず。

ある少年が歌一つよみて見ぬかといはれ。いかによむべき物ぞと問ひしに。思ふまゝを先づ吟じて見よといはれ。

正月に子供よろこぶなんぞいな
餅も食ひたし凧も上げたし

と得意げに打ち誦んじたる話あり。凧も上げたしはよけれど。餅も食ひたしは。自然は自然なるべけれど。心の美を歌ひたりともいひ難し。

さらば如何なる思想を吟じ出だすべきかといふに。美を歌ふこそ眞の歌とはいふべきなれ。たとへば春雨の題にて。

水のおもに綾おりみだる春雨や

山の緑をなべて染むらん（伊勢）

つく〴〵と春のながめの淋しきは
忍ぶに傳ふ軒の玉みづ（行慶）

雨ふれば小田の大丈夫暇あれや
苗代みづを空にまかせて（勝命）

くもり日の目にこそ見えね春雨の
ふるは朝げの風の露けさ（長流）

磯づたひ貝踏む海人の袖ぬれて
歸るを見れば春雨ぞ降る（游清）

いつしかと待ちし木の芽も春雨に
つむべくなりぬ宇治の山里（良臣）

など、よめるを見よ。水に綾織り。山に緑を染め。玉水を軒の忍ぶに傳はせ。苗代水をゆたかならしめ。降るとも知られずに降り。茶の若芽を出ださせなど。見ても聞きても考へても。美なる事の限りを歌へるにあらずや。泥に衣を染め。下駄の鼻緒を切りて道にまろぶなどの。美ならぬ思想はあらはさぬにあらずや。

また秋草などの歌にて。

鳴きわたる雁の涙や落ちつらん
物おもふ宿の萩の上の露（よみ人しらず）

鶉なく眞野の入江の濱風に
尾花なみよる秋の夕暮（俊賴）

箱根山ふもとの野邊の女郎花
たが蒔く粟の色に咲くらん（宗高親王）

おのつから秋の野守となりにけり
千草の花を庭におほして（千蔭）

あげまきが牛おひ入るゝ里川の
清水になびく秋萩の花（文雄）

などゝよめるを見よ。或は露を雁の涙と想像し。或は風に靡く尾花を波かと思ひ。或は花の黄なるを粟のやうに見。或は庭に秋草多く作りて自身を野守に擬し。或は牛追ふあげまき（童）の姿と共に萩の水にうつるを思ひやらするなど。美なる事の限りを歌へるにあらずや。花に不潔なる虫の巣のつきたる。野邊に蛇の這ひ居る。水に塵埃の浮び居るなどの。美ならぬ思想はあらはさぬにあらずや。

さても此美といふ事は。たゞ見て聞きて考へて美しいと簡單にいふことのみが。美にはあらず。今これを分てば三つとなる。

第一には美しくよめ。是は。花の色の赤き白き黄なる紫なる。月の影や日の光の水のきらめきたる。乙女が面わの櫻色したる。雪の降りたる上に山茶花の散りたる。春の海原に鷗の飛びかふ。琴の音の風のまに〳〵聞えくる。鶯のこゑの窓近く響くなど。目をも耳をも喜ばしむる。いはゆる美しいと讀者を感ぜしむるやうによむべきをいふなり。

第二には品よくよめ。是は。美しいが上に。上品ならでは歌になりがたきを戒しむるなり。柿の實を見れば取りて食はん事を願ひ。春雨にあへば裾をぬらさん事を恐れ。月見して更かさんよりも寢る方がましなりと思ふなどは。下品卑俗の思想にして。雨にぬれても花のもとに宿り。菓物の色の美しきをめでゝ花にもまさると思ひ。狩人も弓矢を捨てゝあはれなる雉の聲に聞き取れんこそ。上品優美なる思想にはあれ。古人の川柳に。月見の書をかきて。寐て居る人と見て居る人とを書きそへ。片方には。「此月を寐ずに見て居る馬鹿もあり」としるし。又片方には。「此月を見ずに寐て居るあり」としるし。又片方には。「此月を見ずに寐て居る馬鹿もあり」としるしたるを見し事あり。我好む處によりて他人を馬鹿と罵り合ふ人情。いかにも穿ち得て面白しといふべし。されど。歌の思想として尊ぶは。天然の美を愛するにあれば。見ずに寐て居る無風流よりも。寐ずに見て居る雅客にあるなり。

第三には大きくよめ。大きくとは人間以上の物あるが如き感じを與ふるやうにとの意なり。人間以上とは。神とか天とか造化とか佛とかいふ心持になるをいへるにて。たとへば。

君が代は千代に一たび居る塵の
　白雲かゝる山となるまで（嘉言）

久方の天つ乙女が夏衣
　雲井にさらす引布の瀧（有家）

百年を六たび重ねし六波羅の
　夢おどろかす鐘の聲かな（直好）

の類。凄き。恐ろしき。尊き。神さびたる。壯大なる壯嚴なる。廣大無邊なるなどいふ感じの起る思想を指すなり。同じ美しきものにても。乙女の翫ぶ錦書は猶人工なれば美に限りあり。百合撫子の花束は天工なれば。大きくといふ感じを起すべきなり。

# 國文評釋

文學士　中内蝶二

## 竹取物語《四》

○龍の首の珠の條（續）

いかゞしけむ、はやき風吹きて、世界くらがりて、船を吹きてもありく。いづれの方とも知らず。船を海中にまかりいでぬべく吹きまはして、浪は船にうちかけつゝまき入れ、神はおちかゝるやうに、ひらめきかゝるに、大納言はまどひて、まだかゝるわびしき目は見ず。いかならむとするぞ、とのたまふ。

《釋義》いかゞしけむ云々　如何なるわけにや、疾風俄に吹き起りて、四邊一面に晦冥となり、船を吹きまはしてゆくとなり。吹きもてありくとあるは、風が船を吹きまはしてゆくといふ義○いづれの方とも知らず　風の船を吹き廻してゆく方向は、何れの方か知れずとなり○船を海中に云々　陸地を離れて、次第に海洋の中へ出づるやうに、船を吹き廻はすとなり。まかりいづとは、參上すると、退出するとの二樣に用ひられ、こゝには、何れの義に取るも、その意味は解せらるべきも、全體の文勢より察する時は、後の方の義に用ひたるものゝ如し○波は船に云々　波は船にうちかゝりて、渦の中に卷き入れとの義○神はおちかゝるやうに云々　雷聲轟々として、今にも頭の上に、落ちかゝるかのやうにひらめきかゝるとなり。神とは、鳴神、即ち雷の義にて、ひらめくとは、きら〱と光ることなり○まどひて　心くらみて、あわてまよひてなどの義○まだかゝる云々　以下いかならむとするぞまでは大納言の言葉にて、未だこのやうな苦しい目には逢

ひたることなし、風には吹き廻され、波には打ちかゝられ、雷の落ちかゝらむとするに、この上如何なる憂き目に逢ふことぞと仰せられたりとなり。

かぢ取こたへて申す、こゝらの船に乗りて、まかりありくに、まだかくわびしき目を見ず。御船海の底にいらずば、神落ちかゝりぬべし。もしさいはいに、神のたすけあらば、南海にふかれおはしぬべし。うたてあるぬしのみもとにつかうまつりて、すゞろなる死をすべかめるとて、楫取なく。

〔釋義〕かぢ取こたへて申す　　申すは、まをすやう、または、まをさくなどあるべき所なり○こゝら船に乗りて云々　　この年頃久しき間船に乗りて、海上を乗り廻れどゝいふ意にて、こゝらは、多く、あまたなどの義なり○まだかく云々　　前節に説きたる如し○御船海の底に云々　　波はうちかゝりて船を呑まむとし、雷は鳴りはためきて、今にも落ちさうなる有様なれは、御船は海の底に捲きこまるゝか、さなくば、雷頭の上に落ちかゝるべしとなり○もしさいはひに云々　　若し幸にして、神の冥助によりて、波と雷との難儀を免れなば、船は風のために南海の方に吹かれて行きたまふらむとの意にて、こゝにある神は、鳴神にあらずして、諸神の義なり○うたてある云々　　異様なる君に仕へ奉りてといふ意○すゞろなる死を云々　　思ひもかけぬ死に目に逢ふことかと云ひて、楫取泣くとの意なり。

大納言、これをきゝてのたまはく、船に乗りては、楫取のまうすことこそ、高き山ともたのめ。などかく、たのもしげなくまうすぞと、あをへどつきてのたまふ。

〔釋義〕船に乗りては云々　　以下まうすぞまでは、大納言の言葉にて、如何なる勇夫も、水の上にては如何ともしがたし、船に乗りてある間は、たゞ楫取の云ふことを、高き山のやうに、心丈夫に頼みとしてゐるにとなり○などかく云々　　何故このやうなる頼みとならぬ心細きことを云ふぞとなり○あをへどを云々　　青き嘔吐物を吐きて仰せられたりとなり。つくとは、吐くの義にて、船に弱き人の船暈を

催したるときは、よく嘔吐物を吐くものなり。檝取こたへて申す、神ならねば、何わざをかつかうまつらむ、風ふき波はげしけれども。かみさへ、いたゞきに落ちかゝるやうなるは、龍を殺さむともとめ給ひさふらへば、かくあなり。はやても龍のふかするなり。はや神にいのりたまへと、いへば、

〔釋義〕檝取こたへて申す　これもまた、こたへて申すやう、こたへて申さくなどあるべき所なり○神ならねば云々　風吹き浪はげしけれども、我等は神ならねば、かゝる難に逢ひては、如何ともしがたしとなり。神ならねばより、波はげしけれども迄は倒置法を用ひたるものにて、風吹き浪はげしけれどもは、普通ならば、神ならねばの上に置くべき順序なり○神さへいたゞきに云々　風吹き浪はげしきのみならず、雷さへ頭の上に落ちかゝるやうなるは龍を殺さむともと遊ばさるゝが故に、龍の怒りに觸れて、かやうにあるなりとの意にて、かくあなりは如此有也の義なり○はやても云々　暴風もまた、龍が怒りて吹かするなりとの意にて、暴風のことをはやて、はやち、またはやしなどゝ云ふなり○はや神に云々　はやとは、はやくといふに同じ。

よきことなりとて、檝取の御神きこしめせ。をぢなく、心をさなく、龍を殺さむと思ひけり。今より後は、毛一筋をだにうごかしたてまつらじと、よごとをはなちて、たちゐなく／＼よばひ給ふこと、千度ばかりまうしたまふけにやあらむ、やう／＼神なりやみぬ。すこしあかりて、風はなほはやくふく。

〔釋義〕よきことなりとて　これは大納言の言葉にて、檝取が、神に祈りたまへといひしゆゑ、それはよきことなりと仰せられてとなり○檝取の御神云々　以下うごかし奉らじまでは、大納言が祈りの言葉にて、檝取の御神とは、船靈の神の義、きこしめせとは、聞き給への義なり○をぢなく云々　我心暗愚にしての意にて、をぢなくは、つたなく、にぶくなどの義、をさなくは、心至らぬ、をろかなるなどの義なり○毛一筋をだに云々　障りも申すま

じといふ意なり〇よごと　祝ひの詞、即ち神に祈る言葉をいふなり〇はなちて　大聲あげて喚ぶこと〇たち居なく〳〵　起ちたり居たり、泣く〳〵との意〇よばひ　呼ぶこと〇けにやありけむ故にやありけむとの意〇やう〳〵神なりやみぬ雷鳴やう〳〵止みたりとなり〇すこしあかりて云々　晦冥なりし世界、すこしあかるく晴れて、風はまだ其まゝに、はやく吹くとなり。

檝取のいはく、これは龍のしわざにこそありけれ。この吹く風は、よき方の風なり。あしき方の風にはあらず。よきかたにおもむきて吹くなり、といへども、大納言は、これをきゝ入れたまはず。

〔釋義〕これは龍のしわざにこそ云々　かく雷鳴もやみ、世界もあかるくなりたるは、龍を殺さむとの過を悔ひて、神を祈りたるがためなりと。意のこの吹く風は云々　この吹く風は、南海の方へ吹き送らむとしたりし初めの風とはちがひて、我等のためには、よき方の風なり、惡しき風にはあらず。よき方へ向けて吹くなりと、檝取より申し上げたれど、大納言は、猶ほ疑ひて、聞き入れたまはずとなり。

三四日ふきて、吹きかへしよせたり。濱を見れば、播磨の明石の濱なりけり。

〔釋義〕三四日ふきて云々　三日四日と風吹きつゞきて、南海の方へ出でし船を、北の方へ吹きかへして、磯近くよせたりとなり〇濱を見れば云々　檝取ども船の着きたる濱を見れば、播磨國明石の濱にてありたり。

（未完）

# もとのしづく（接前）

三宅花圃

## 三　月の雲

此頃も八島の外と思ひ置たる米艦浦賀によせて、通商をもとめしより、安きになれたる幕府の有司はたゞ足を空に思ひまどひ、一時を繕ふ針の衣の、やぶれん末も思ひわかね、所置曖昧なる上に、時の將軍家定は癇癖つよくして多病なれば、嗣子を得んことかたしとして、養君を求むるに輿望は英君の聞えある一橋刑部卿に歸したり、されど國を忘れ身を思ふ輩は、たゞおさなくおはして、何事も左右のまゝに成たまはむ方しか

ろべけれと、かつは家定の意をむかへて、紀伊家慶福をおし立んと、かねて一徹果斷の聞えもあり、家柄にも先例ありといふ、井伊掃部頭を大老に任じ、この盤根錯節たゞ一刀兩斷の處置を乞はゞやと委ねければ、掃部頭もとよりおろかならず心を盡し外交の事を處置せんとすといへども、勅裁を俟ずして條約に調印し、なほ此重大の事件を宿次奉書して奏問せしめしなど、當時の勢の是非なき事はありけれども、うち聞所は專横放恣、上を蔑にして一人散れるけしきなるを、時の帝孝明帝は聽容におはしませば、いとゞ御心はるけ給はず、かくて御裳濯川の末も濁りあきつすの翅もかれぬと、外國のあなどりをうけ、內國のそしりをさいん事かたし、よし身におはぬ責もくるしければ、とく下りてんなど、ほのめかしたまふを、靑蓮院宮三條實萬などはげまし聞えて、いかてさは、心よはきことをかのたまふ、幕府いかにせんずるとも、大藩のたのむべきが多きを思ひよらせたまはずや、水戸のかれて忠節なるはしろしめす所なるべきを、これに勅書たまはりて、すべらぎの御稜威かゞやく時をまたせたまふべしと、水戸藩の京都留守居鵜飼吉右衛門の子幸吉をして勅書を水戸前中納言齋照に賜はるべきに計らひたり。

この時淸水成就院の僧忍向といへるは、勤王の志あつく、近衛公としたしう行かよひ、これ等のことごとにも下に思をくだけば、人目はやすき出家の身の、もゆる心をさりともみせず、有志の家などに出入して、朝廷の御稜威かゞやく時を得ふかしと、待わたる程に、水戸をはじめ他藩の人々にも、勅書をたまはりけりと聞えて、勤王の有志はいよ／＼時を得、幕府と關係淺からぬ九條關白を辭職せしめ、討幕のはしをも開くべき時にあたり、早事もれて、京都町奉行の手に梅田源次郞の捕へられしをはじめとして、折しも上京したる幕府の老中間部詮房直に餘黨の逮捕を行ひ、鵜飼父子、賴三樹三郞、近衛家の老女村岡、及公家各家の家人數十人の中に世捨人なる忍向も、かずまへられしぞ是非もなき、これぞ安政の大獄と心あるなき一つの袖をしぼりては今なほかたりつたへける。

されど忍向は、世捨人の、なほ偵察にもれやすく藝藩の某等ともなひて博多へひそかに落ちきたり、俳諧の宗匠斗丈菴が五反麻なる庵にともなひ、しばし世をしのばせたり、此藩士にして名にたかき平野二郞も忍向きたりぬときゝて、こゝに尋ね來り又望東尼が山莊の人目まれなるを便宜としてこゝにむかへ請じて時事を談ずる中、福岡の志有、鷹取養巴、早川養毅、藤四郞茂親などこゝの山住に折々打集ふまとゐの時、此頃忍向月照と名を改めたりけるが、一座をかへり見つゝ京都のさまをかつかたり、かつなげきいひけるやう、一度たのみありとおもひしは、曉のともし火のしはしの光にて、今又あるかの狀に消おされたれば、君王いますといへども、なきがごとく、朝に參する月卿雲客も、雨夜の星のまれなるに、東亮垣のしこ草といやはびこりて、聞もなれぬ夷狄に、警衛を報ずる心細さ、たゞつい重れたる卵の上におましを置に等しとや見む、いてや近衛公ののたまへるまゝに、一日も早う九州大藩を聯合し、勤王の師をすゝめ、朝儀の頹廢をつくろひ、常に宸襟を安うし奉らばやと怨ずれども、いかにせん、時到られば五穀熟せず、事の早きに手をつけんか、たとはゞ若苗の實のらぬ程に利鎌にかくるも同じうして、勞多く功少なし、幕府の嫌疑、藩士の心々今さてすべき術もなし、と聲震はして歎きけり、人々一つなげきにくれながらも、時機到來の曉をまたばやとしばしはかくるゝ月の雲、薩摩の方に落さむと、猶行末はしらぬひのつくしにつくす情をも、今又こゝにふりすてし關路きびしき野間の原、隨路に行くは危ふしと、又水股に引かへし、あく根をさして渚舟のかご島におくりけり。

望東尼はもとより女の身の、さかしら立ちて一つ蓆にあげつらひものいひかはすとはなけれども、身を靈水にまかしつべき身にして、とくに厭れる世をなげき、御國の爲には身をものにしたる誠心を淺からず憐とみて、墨染の袖をともにしぼりながら

旅衣よさむをいとへ國の爲
　くさの枕の露をはらへと

とぞよみ出ける。さらでも露けき秋の空に草木のさやぎも、心おかるゝ月照はさつまにつきてよりいさゝか心安かりけむ

浦やすく今日はさつまにつきにけり
　こゝろつくしの人をたよりて

かくよみ、たよりとしつる高存院の僧日高は身の後難を恐れて卑怯にも藩にそれを斷へしにより又々こゝに身を容れかれて、藩士西郷等のすゝめにまかせ、日向の國にいたらむと、浪風あらき夕まぐれ、一つ心をのせてこぐ一葉の上に西郷、平野、月照は、思ひくまなくものかたる、折しも望の月は天の中にさしのぼりて、金龍おどる浪の上の、渺茫と目にさえぎる物もなきを、三人うち興じて舟ばたをたゝき、詩歌などうち吟ずるは思なき身と人やみむ、平野は、ふとけきしき心とらるる程に月照は空をあふぎつゝ

くもりなき心の月ともろともに
　沖の浪間にやがて入ぬる

とうちぎんじて西郷と相抱き、水底深く落入りけり、望の夜漸更そめて遂に光もあらはれず、西にと入し月かげを、望東尼はのちに聞しりて、いたくかなしみのびあへず、いよ〳〵闇にくるゝ世を歎きにしづみたりしとぞ。

（つゞく）

* * *

# 春色

木村小舟

水源が盡きたのかと思ふ程に、細つて居た筧の水も、今日は音立つる迄に太くなつた、常には水底の砂の數も明かに讀まれた門前の流も、水量を増すと同時に、稍濁つて來て、木曾谷の雪は融けて今我里に流れて來たのである、オヽ春は早や此春は花を咲かせ、蝶を舞はしむるのである。

何時まで雪が殘る事やら、あの山から正面に吹き下す風だもの、寒いのも無理はないと、幾度か呟いた膽吹の頂も、今日は何時にない洗つて流した樣に、白いものとては藥にしたくてもない、オヽ之でこう今日からの風は暖かいぞ、明日は布子を脱いで、袷にならずばなるまい。

かくして我里の春は酣となるので、之も皆昨夜の雨の賜だ、併し今に此同じ雨が、花を散らして仕舞つたら、どんなに心細からう、思へば同じ雨ながら、恩怨

の別ありて、凡夫の愚痴かも知れないが、春を招いて花を咲かせる雨を惡く思ふ者は、恐らく無いだらう。橋とは名のみ、二枚の板を土手の左右に掛け渡したに過ぎぬ、夫れも其筈て、名は川とこそ呼べ、大股に飛ばゞ水に足を濡らす心配はない、之ぞ我門前の細流に架した、名もなき板橋て、橋の袂の糸柳、千條の枝は雪にも折られず、春は先づ其枝頭に來て、言ひ得ぬ笑を湛えて呉れるのてある。

其初じめ何處の野邊から飛んで來たやら、去年の一春を、我家の茅葺の屋根に咲き誇つた纖弱な薺の種子は雨溜と一緒に軒の土に埋まつたのが、運よく今年は此處て芽を萠し、門掃く箒の先にも掛らず、路行く人の草履をも免れて、小石混りの土に噛み付きながら、今は早や無限の花序に、其一輪を開けば、小さき蟲の何處を目的に訪ふて來たやら、頻りに花にさゝめいて居る姿にも、平和の春の色は現はれて居る。

# 拿翁の徐世賓に與ふる書牘

默堂生

## 小引

拿翁は、天成の武將にして、天成の英雄なり。其事蹟を觀れば驚天動地、轟々烈々、百歳の下、人をして其英姿颯爽の狀を想見せしむるに足るものあり。然れども、退きて其家庭に於ける拿翁の言行如何と察すれば、天眞爛漫、恰も嬰兒の如きものあり。徐世賓は必ずしも淑徳の婦人とは謂ふ可からず、而も拿翁の之に對する愛情の濃かなる、眞情の深き、人をして別人に非ざるなき乎を疑はしむるもの無きに非ず。拿翁の戰場に於て千軍萬馬を指揮するの傍ら、其徐世賓に與へたる書牘を讀めば、拿翁が一面に於て情の人たり、愛の人たるを見る。茲に其書牘を摘譯して世に問ふと云ふ。

甲辰十一月　默堂生識す

## 其一

西暦千八百五年十二月五日即ち共和暦十四年三月十四日、拿翁、オーステリッツより書を在ミユニックの徐世賓に贈る。

予は休戰を約し候に付露兵は退却致候。オーステリッツの戰爭は、予が從來爲せし總ての戰爭中の最とも偉大なるものに有之候。即ち軍旗四十五旒大砲百五十門、露國衞兵の軍旗。廿名の將校。三萬人の捕虜、敵の死者二千人。光景甚だ慘憺を極め候。露帝アレキサンダア第一世は絶望の餘、本國に向て退

却致候。予は普王と野營に於て相見て、會談二時間。予は速に媾和を承諾致候。天候未だ順ならず候。今や大陸の天地、平和の成るを見る。此上は速に世界の平和ならんことを切望致候。但、英人は予に屈從することを肯せず候。予は限り無き悦を以て卿を迎へんと欲す。眼病流行、二日間に至る。予は今日迄其病に罹りしこと無之候。我友よ、予は壯健なり。但だ、卿を抱かんことを切望して已まず候。

其二

千八百五年十二月七日、即ち共和暦十四年三月十六日、拿翁、オーステリッツより書を在ミユニックの徐世貧に贈る。

予は休戰を約し候に付、八日以内には和議成立すべしと存候。予は卿がミユニックに到着せしことを報知せられんことを願ふ。露軍は退却致候。主將ビユクスホーデンは殺され、大敗績の餘、二萬以上の死者と三萬の捕虜とを出し、殆と四分の三に減ぜられ候。而して我軍は三千人の負傷者と七八千人の死者とあるのみに候。予の兩眼は病み候得共、是れ流行病にして意に介するに足らず候。我友よ。予は卿と相見んことを望むや切なり。予は此夕維納に宿すべく候。

其三

千八百五年十二月十日、即ち共和暦三月十九日、拿翁、ブリユンより書を在ミユニックの徐世貧に贈る。

貴簡に接せざること、長月日に亘り候。是れ蓋し塵、雨、血を以て蔽はれたるバード、スチユトガール、及ミユニックの森林に生活しつゝある兵卒を忘れたるに由るに非ざる無き乎と猜思致候。予は間も無く維納に向つて出發すべく候。平和を締結せんが爲に奔走する者尠なからず。露軍は痛く擊破せられて本國に向て退却するに至り候。予は卿の側に在らんことを切望致候。予の眼病は全く快癒致候間。幸に御安慰被成下度候。

文字簡潔にして、一の穴辭無く、而も眞情流露、筆墨の外に溢る。是れ實に小品文の絕妙なるもの。亦以て拿翁がたゞ社會の英雄のみに非ざるを知るに足る。嗚呼拿翁も亦趣味多き人なる哉。




# ▲婦人と衛生

醫學博士　中濱東一郎

▲女子の結婚　結婚問題は一日や半日で語り盡せる者でない、世間の人は早婚とか晚婚とか謂て居るが、何を標準として謂て居るのか解らない、勿論法律では何年より何年とか規定してあるが、衛生上からは年齡を以て、早婚とか晚婚とか謂ふことは出來ぬ、終局思想の發達體質の如何に依らなければならぬ、又人種に依つて相違して居ることをも考へねばならぬ、例へば印度人の様に、十二三歳が結婚期になつて居る所もあるからだ、併し少年者が結婚しても一生健全で、又其生兒も健全であるものがあるが、其は例外の事であつて、决して之を以て一般に論ずることは出來ないのである

最近東京女學生風俗（其一）



▲早婚晚婚　早婚晚婚の害は、兩者共概して母體を柔弱にする、生兒も亦虛弱である、而してまた之が子孫に及ぼすことになる、引いては人種の上に影響する樣になる、結婚に就て最も忌むべきことは血族結婚である、肺病とか癩病とかは系統病であると考へて居たが、之は血統を引くことはないと謂ふことで、醫界の一問題となつて、今日猶研究せられ

つゝあるのである

▲血族結婚　血族と結婚すると、其病毒とか其癖と謂ふものが遺傳することになる、其が漸次子孫に及ぼして白痴になるとか聾になるとか謂ふことになる、或人は惡い事が遺傳すれば必ず善い事も遺傳する、然うすれば差引構はなくつてもよいと言はれたが、子孫に惡影響を及ぼし人種に惡性質を遺すと謂ふことは、無論止めた方がよからう、歐洲文明の源泉であると謂はれた、羅馬の古代に溯つて見ても能く解かる、古代の遺物として現代に遺つて居る建築物などは、實に現時見ることの出來ない程立派のものである、其が非常に衰へたと謂ふものは、終局羅馬が他種族の血液を交へなかつた結果である、後にゲルニアン人種が襲來して、再び混血する樣になつてから、又た隆盛を見る樣になつたではないか

▲獨身生活　學術に貢獻するとか、生存競爭が激しくなつて來た爲めに、止むなく獨身生活をする樣になつて來るが、之は甚だ好くないことである、勿論生活に困難の者が結婚する、然うすれば子が生れる、さうなると益す生計の困難を來し、充分食物の滋養を取ることが出來なくなる、軈がて身體に營養不良を來す、子孫は虛弱になると謂ふ理屈だ、併し子孫の上に惡い影響を及ぼさない樣に、奮發して安全の生活法を立てて、獨身生活は爲ない方がよい、夫れに獨身生活をする者は、身體上精神上に惡結果を與へることになつて來る、其上人間が減つてゆくのであるから、獨身生活は、衞生上から論ずる時は無論止むべきものである

▲女子と衞生　女子は衞生の一般に亘る心得を持つて貰らはなければならぬ、衣食住の事は凡て女子に一任したいと思ふ、又女子は溫和で同情に富んで居るから、看護と謂ふことは女子の必ず修むべきものであらう、だが未だ一般の女子に望んでも無駄である、只清潔と謂ふことは心得て貰らひたいものである、流行病なども、消毒するよりも、先づ清潔の方が倍つて居る、平常簡潔にすれば流行病の傳播する恐れがなくなると謂ふものだ

▲女子と體操　之は大に遣つた方が好いと思ふ、併し體操を遣たからとて人種を改良することは出來ない、女子の體格を長大にすると謂ふ譯には行かぬ、元來小さい人種であるから詮方がない、只女子の身體を健全にするのである、衞生と謂ふても矢張經濟上の問題に歸着するのであるから、小さくとも能く働く所の女子

にしたいと思ふ

▲女子と衣服　女子の衣服は從來のものではいけない、どうしても改良しなければならぬと思ふ、改良と謂つても、衛生に適し經濟になる裝飾としても好い點から改良しなければならぬ、當時の有樣では長い者には捲れろで、交際の上から早晩洋服を着る樣になるだらうと思ふ、洋服と謂つても害が無いものではないが、男子は既に多く洋服を用ゐて居る、だから自然の傾向で左樣なるだらう、世界各國の衣服の中で、最も衛生にも適し優美であるのは朝鮮の服であると思ふ、某博士も既に此說を立てゝ居らるゝのだ。（長澤やよ子記す）

最近東京女學生風俗（其二）



## ▲家庭の音樂趣味

小紘生

▲音樂の流行　日露戰爭後著しく我國に流行を來したるものは繪ハガキと音樂である、繪ハガキは美術と云ふよりも寧ろ娯樂として用ゐらるゝ方が多いやうであるが音樂に至りては聊か趣が違ふ、音樂界の活動が今日の如く盛んになつたのは一ツは戰爭の爲め慈善音樂會が所々に開催された結果もあるので、又一方に於ては樂劇論なども起り、旁た音樂界の盛觀を來した。各種の女學校に於ても音樂倶樂部やうなものは生徒の間にも組織せられ、偶ま公開して演奏を聞かせるやうにもなつた。又公會の音樂としては上野なる

東京音樂學校の春秋の演奏會、同校の學友會の臨時の演奏會、又宮內省派に屬する明治音樂會の折々の演奏會、音樂學校の演奏會は斯道のオーソリチーと目せられて居るだけ每も非常の盛會である。明治音樂會も次で斯道の先進團躰である、それから新しく出來たものには國民音樂會と云ふ一團躰がある、音樂堂と名乘るものも新築された、教育會內の和強樂堂の如きそれである、又日比谷公園にも公衆の爲の音樂堂が建築されつヽある、日本樂では長唄研精會、螢雪會の如き亦一個の有力なる會合で多くの熱心なる聽衆を有して居る、以上は最近音樂界の大勢で、內容の事は素人の我等に多く言ふを許さぬから、今暫く略す。

▲家庭の音樂とは何ぞ 以上の如く公會席上に於て音樂を聽かうと思へば、現今の名手に接して親しく其微妙なる樂聲を聽く道に於て不自由はない、只現今の音樂會は未だ貴族式に流れて平民的でないと云ふ事が欠點であらうと思はれる、然しそれは別問題であつて吾人の謂ふ家庭の音樂とは何ぞ。之れ家庭の改良に志ヽを有するもの丶忽諸に附すべからざる問題で、凡そ音樂趣味の無い家庭ほど淋しいものは無い。一躰日本の家庭組織は感情を强ゐて押へやうとするやうに出來て居て感情の融和を計り、慰藉を得るの方法が足りない、却つて其爲に感情の衝突、矛盾、誤解、破裂等を來して終には小說的悲劇を構成するやうな場合となる。音樂は和氣洋々として一家の感情を和らげ、不平、不滿を少からしむる點に於て多大の功果がある。兒女を敎育するにも音樂の力を藉りたならば、千百言の理窟に勝る感化を與へ得る時があらう、音樂的趣味、詩歌的趣味と云ふ事は今後の家庭に必ず無かるべからざるもので、如何なるものが家庭音樂として今後の日本の家庭に推重されるであらう、一言には斷じ難いが、聊か所見を陳じて見やう。

▲從來の日本樂 西洋樂が行はれるやうになつたのは極めて新しい事で我國の家庭音樂と云へば言ふまでもなく日本樂であるが、是も家庭音樂と云ふやうな意味もなく、只多年の習慣上、家庭に音樂趣味は自ら交つて來たのであるけれども、家庭音樂として感化を及ぼす點に何等の注意も拂つて來ないから、亂雜野卑、然らずんば無味單調のものとなつて了つた。

▲箏と三絃 日本樂と云つても箏と三絃とは其首位を占むるもので、管絃合せ用ゆる場合は少く、多くは箏と三絃であつた。處が此箏と謂ひ三絃と謂ひ古い歷史

を有して居るだけ、妙な變化をして來たもので、三絃の如きも音樂としての地位は失はれて了ひ、全然俗樂野卑のものとして見らるゝに至つた。此れは樂器其もの〻發達も間違つて來たらうが、第一此れに添う歌詞が野卑淫奔、みだりがましく到底夫人令孃の耳にすべからざるものとなつたからで、三絃其もの〻罪ではない、近來稍三絃樂を重要視さるゝに至つたのは賀すべき現象であるが、今日の儘では是を家庭音樂として用ゆるに甚だ不都合な點が多い。第一、三絃と云へば習慣的に賤めて了ふから若しお邸宅とも云はれる家から三絃の音が洩れたならば、不思議な現象として其家庭も乾度卑賤なもの〻如く想像されるので、此習慣を一朝一夕に改めやうとするは、なか〳〵困難で、

最近東京女學生風俗（其三）



先づ根本的に三絃の地位を高めねばならぬ。狹斜文學として江戸時代に發達して來た三絃の歌は、到底東京式の家庭に容れられないのである。三絃樂は江戸時代の遺物て東京時代の三絃樂ではない、東京時代の三絃樂たらしめるには第一に歌を改良し、第二に手を改良し、第三に樂師其ものを改良せんければならぬ。斯くすれば三絃樂も我國の家庭音樂として發達すべき餘裕を持つて居るらしい、頭から三絃樂を排する極端の頑固論者と、ハイカラ論者には吾人與し能はぬのである。次に箏であるが是はもと堂上の弄び物であつたから上品でもあり高尚でもあるので、中等以上の家庭には好んで、彈奏せられるが只單調で、歌が陳腐で三絃の如く多趣多様の樂器では

ない、將來進歩するには大改革を要するので、何うも今は疑問の間にある。其他笛と云ひ皷と云ひ太皷と云ひ、それ〳〵特色があるのだから家庭音樂として發展させて行けば宜からう。只西洋樂は、野外的で森林的て軍隊的で、今の日本のやうでは第一、邸宅の建方から改良せぬと西洋樂は一般の家庭樂として用ゐられまい。手風琴やヴアイオリンや近頃は山の手邊の邸町を歩くと、夕月ほのかに梅か香の薫ずる邊り、優しい唱歌の聲と共に響き來るのである、只極めて幼稚なものて、殆んで西洋樂は未だ日本人の手にのらないと云つても差支ゑはない、僅に唱歌ぐらゐを合せるのに止まるので、大人の樂器として西洋樂は發達の域に到らない、是も追々進むには違ひなからう。要するに我國現在の家庭に於ける音樂趣味は至つて乏しく、平凡、陳腐、疎野、荒癈の境地にあるものだ、大いに是を改良すると共に、一方は詩歌的趣味、乃ち國民歌謠なるものが大いに起らねばならぬ、音樂に伴つた問題ではあるが、自ら又別種の論題であるから、他日折を俟つて聊か國民歌謠の事も述べて見たいと思ふ。



## 新刊紹介

▲まさご 第一號 京橋區新肴町十四、眞砂會發行

眞砂會と稱する文學士の小團躰ありて各自其近作を公にする機關なり、袖珍形、全紙六號活字、凝つた雜誌なり

▲こゝの花 九卷三號 日本橋區石町一ノ一 竹柏會出版部發行

鳥居龍藏俚の歌童謠、學海居士の新々浦島、歐外、柴舟、有明、信綱、等諸名流の創作、其他詩歌評論等竹柏園一派の光彩を放てるものなり

▲にひしほ 一卷三號 麻布箪町百五十一 にひしほ社發行

毎號廣津柳浪氏執筆、青氣氣鋭の人の小說を主とし、詩及び美文を收む、一號毎に進步の痕見ゆ、寫眞版も美くし。

▲文藝 第二號 麻布本村町二百四 大倧社發行

鮫島大浪著「藝者と詩人」を以て埋む、贅澤極まる雜誌なり

▲國詩 第一號 下谷谷四二〇 國詩社發行

新躰詩專攻を目的として新に起れるものなり

▲修學世界 五卷四號 日本橋本町三丁目 博文館發行

▲秀才文壇 五卷五、六號 小石川區指ヶ谷町 文光堂發行

▲精神 二號 麹町一番町 精神學會發行

▲「ハガキ」文學 二卷三號 小石川久堅町 日本葉書會發行

▲家庭文學 第三號 大阪大寶寺町 家庭文學社發行

▲家庭 五卷三號 巣鴨二二五五 家庭社發行

▲女子之友 第百六十五號 文友社發行

▲紅薔薇 二號 磐城三春町 薔薇會發行

▲信育年雜誌 六號 信濃松本 信育年雜誌社發行

▲萬問答誌 五號 茨城縣 萬問答誌社發行

此外數十種寄贈ありしも紙面の都合やら種々の事故にて次號に紹介することとせり



# 女流小影



## ▲大山元帥夫人（肖像入）

日本滿洲軍の總指令官として、遼陽に沙河に、近くは又た奉天に露軍を包圍打破し、さしも歐州第一の强兵と、自らも誇り他も亦容せし者の鬼面を全く引剝いで、全世界に赫々の武名を轟かした、陸軍大將侯爵大山巖氏の夫人捨松の君は、人も知る奧州の一雄藩、舊會津藩の家老の末格山川家の女である、夫人の母君は非常の賢夫人て、會津城沒落後頗る窮地に陷られたるが克く艱難と戰つて其兒女を鞠育し、皆立派な人に仕立られた、即ち夫人を始め、夫人の令兄故陸軍中將山川浩氏、及び現帝國大學總長山川健次郞氏等、一門榮譽を以て其母君の墓上を照して居る、夫人は十歲前後の時、津田梅子等と共に、岩倉大使に隨つて米國に留學し、明治十五年歸朝して後間もなく、今の大山家へ嫁がれたのであるが、其才學の勝れたるは言ふ迄もなく「ミッス大山」の名は、日本に於ける夫よりも、曩の留學地なる米國に於ては、夫君の名聲と共に益す高いのである、夫人は米國育ちだけに、日本文の出版物で讀まるゝのは新聞位で、他は皆西洋の物ばかりなそうな、夫人が家に在る時は、熱心に數人の兒女の世話をなし、又た自ら下卑下僕の先に立つて指揮役を取らるゝのである、彼の大將にして此人あり、大山家の光は彌よ輝くであらう、



## ▲鍋島侯爵夫人（肖像入）

鍋島侯爵と云へば知る人ぞ知るであるが、舊佐賀藩主鍋島直大氏のことである、夫人名は榮子年は今四十四五であらうか、故正二位廣幡胤保の女で、京都に生れて四歲の折より大内に出入された、侯爵家は所謂お大名であるが、夫人は流石先年夫君の伊太利駐劄全權公使として赴任された時、共に隨ふて其交際場裡に立働かれたことゝて、其應接振りの如才なさ、而も擧止優美にして、少しも自分の高きを誇る樣の風なく、上下の隔てをせずに、春海の如き態度を以て、人と相語らるゝ所は、誠に貴婦人交際社會の立物と言はればならぬ、夫人が公共の事業に盡力さるゝことは、實に目覺ましい程で、殊に日露戰爭が起つてから、篤志看護婦會を諸婦人と共に起して、負傷兵の爲めに繃帶の作製やら、或は佐世保、吳等各地へ出張して、傷病兵の慰問に熱心せられ、今猶非常の精力を以て、軍國婦人としての完き任務を盡されつゝある、夫人は和洋の音樂に堪能で、別けて我國の俗曲の妙なるに甚だ趣味を持つて居らるゝ樣である、和歌も亦夫人が嗜み中の一つであつて、書風は千蔭流を學んでなか〳〵美事なものである、又た活花は池の坊で、茶の湯は宗遍より學ばれたとか、斯樣に多方面に趣味を持つて居らるゝに加へて、天性の美德を備へて居らるゝのであるから、貴婦人中の名花として、上下に尊重さるゝのは、必ずしも、偶然でないのである。




塩井雨江先生選

地

## ○鏡面に向ひて

都筑郡新田村新羽上臺 小野雪枝子

うつそみの世のくだちゆくまゝに、大方の人の心、誠の根ざしやう〳〵失せて、僞の言の葉のみ空をもおほふばかり廣ごりぬ。されば、物として誠の影を見んこと、いと難くなりぬるを、朝夕少女が手に親み馴るゝ鏡よ、移りゆく世のさまには習はで、昔も今も變りなく、物來ればさながら其の影をうつして露たがへず、物去れば、やがて其影きえて、僞りの影をとゞめざるは、いかにくしく妙ならずや。朝の閨には玉藻なすかよりかくよりなびかひし寢亂髪を正さしめ夕べの床にはかげ細き柳の眉の月をゑがゝしむ。かく奇しく妙なる鏡も、なほ形なき影はえ寫さゞれば、各がゑゝ胸に包める人の心のよしあしは、見るによしなし。されば、少女が閨の鏡の前に、小町水の絶えざるも、やがて小町がうつろひやすき花の色にのみ習はんとなるべく、キレイ水よキメチンキよといへるも、徒に其かほばせを美しくつくろはんとのみ思ひ煩へるなるべし。そも〳〵、年若き少女の小町たらんことを欲し、衣通姫の面影にあえんと願へる、實に理りなれどそも身のほどに從ひつゝ、よきほどにこそつくろふべけれ。ひたすら紅白粉の力にのみすがりて僞り飾りたらむは、中々に心をとりせらるゝわざにて、鏡のおもはんことも、やさしかりぬべし。とまれかくまれ心の美しからんこそ眞の美人なるべけれど、心は影の寫らねばつゆかへりみることもなく、ひたすら姿ばかりに心をつくすは、唯うかれ男が目に媚びんとする賤しきつたなき思ひよりおこるものにて、うき河竹の遊女とかはるふしもあらざるべし。あはれ少女が行末には、情あたゝかき妻となり、慈愛ふかき母となり、夫を助け子をはぐゝみ立つる婦となるべきなど、いみじく大なる務あるをも知らで、只徒に眉をゑがき、髮をけづりて、かたちのみつくろひたらんよ、よし其影は寫らずとも心の程いかに恥かしからずや。かくて、徒に頭

の霜を、むかへるかげに見て驚くとも、まそかゞみはた何の甲斐かあらん。年まだ若き綠の髮、つやゝかなるおもわと共に、見えぬ心の誠の影をうつしとどめば後の悔のいかで來りうつる事あるべき。

（兩評）筆のしとやかにまとまりたる中に、詞の花のやさしく美はしきあり。花あり實もある文と申すべきか。地とす。

人

## ○三宅尙齋の妻を論ず

越後國燕町　長谷川田都

一夜つれ〴〵なるまゝ、婦女鏡を繙く。たま〳〵三宅尙齋の妻に及ぶ。あゝ、昔も今も、高きも卑しきも、舅姑の頑にして、己が意の如くならざるを憎み、老いて時世に疎きを侮り、姑嫁別居論を唱へ、姥捨山の月を見せしめんとする女子の多きに、さりとは又たなつかしき行なるかな。飛鳥川の淵瀨定めなき世をさとり、昨日の榮華を夢みつゝ、身は人の雇となりて、千々の辛苦を忍び、以て姑の奉養怠らず、剩へ、鐵窓の下に沈吟する夫の身を思ひ、他日晴天白日の身となり給ひて、一家相見ゆるのあかつき、せめては日頃の苦しみの、千々が一をも安めまつらん料にもと、兼て與へられし二十ペンの金を、鏡底に秘め置き、爲には、己が身と二人の子等は、冬綿の衣を身につけず、夏は蚊張を室に垂れざりしとか。其姑に對しての義夫を思ふの誠なる、實に得難き行とやいはん。ことに身は賤しき下等社會のなりはひにまで手づさはりしとか。或はいはん、尙齋の妻ともいはるゝ身にして、今すこし高尙の策もあらざりしか、餘り面目を重せざるに似たりと。否々、女子獨立の道開けざりし時代に於てはか弱き女子の手一つにて、いかで一家の生計を保つべき。彼の妻、若し名望は輕ずべからずとて、是等の業につとめざりせば、いかで姑の奉養も心のまゝならん。泥中の蓮葉の淸き心を失はざれば、身にはつゞれをまとふとも、などか光や失せなん。又、其妻二十ペンの金



を返す時、尙齋大に怒りて、いたく罵りたりと。かゝりにも阿部公の世子の傅たりし身には、餘り輕々しき擧動なれど、母を思ふの心切なるのあまり、是非を辨するの暇なかりしは更に至孝とやいはん。此夫にして此妻ありしといふべきか。されど、只我心に解せざるは冬綿の衣を身につけず、夏蚊帳を室に垂れずとの事なり。かくて、若し不幸にして寒冒のをかす所となるかはた血液の不充分なる爲め、自ら病を招く事あらんには、一家は忽ち飢餓の悲慘に陷るべし。之れに反して子等もし病に罹りて、薄弱の身となるか、或は病死するが如き事ありとせんか、祖先に對しては不孝となり夫に對しては不貞の罪免れざるべし。我今彼の女の悲地に陷りたりと假定せば、夫より與へられし二十ペンの金、徒にせんよりは、それを以て益ある事に利用しなば、母への孝養はいはずもかな、一家は安きといふまでには至らざるも、身を害する事もなかるべし、かくて能ふかぎり身をつゝまやかに、日夜勤めなば二十ペンのみならず、或は夫れ以上の貯へを得べき事もあらんのみならず、一家打揃ひ健全なる身を以て、夫を迎へなば、尙齋の喜びやいかならん。我學淺く、ことに年若き身にして、かゝる事評せんは、いと心とがむる心地すれど、思ふ事いはぬは、腹ふくるゝ業なりと兼好法師のいはれし事もあれば、只心に感じたる事をかいつけたるのみ。

（雨評）筆の整ひたるを以て人とす。

秀逸

## ○妾が友

三州碧濱之濱　松翠女史

山鳥の尾のなが〳〵しき冬の夜も、いつしかふけぬれば、賤の男の藁打つ音も聞えず、あたりいと靜になりぬ。いでや今こそ書よむ時なれと、學びの窓に退きてひとりともしびの下に、ふみなどくりひろげ、餘念なかりしが、やう〳〵にうみければ、書物を收め、机の上に頰づゑつきつゝ、つら〳〵思ふに、己れ不幸にして兄弟姉妹なく、又父上の病の床に就かれしより、凡そいつ月にて、あへなくも入相の鐘のひゞきと共に散りにけり。あはれ、我が身も、遂に父なし子となりぬ。常々よその兒の父なきを見る時は、徐ろにあはれをもよほしき。然るに、其のふたおやそろひて、しあはせ者よと云はれしも、今は同じき父なし兒なり、まゝにならぬ浮世かな。己れ父のみまかりしより、何となう心も浮き立たずなれり。然し、四五十日たちし後、心

を定めぬ。みまかりし人は、再び歸る時なし。あはれ是れより後は、良き友を撰びて、したしくつきあひをせんと。

さて、たれにせん彼にせんと、思ひ〳〵て、遂に良き友を撰びにける。其の友は學識誠實、いやしくも善き事は、皆そなはり、其の上、妾に道を説き、理を教へて、常に妾を正しき道に導き、人の人たる事柄を知らしめ、又、己れ學びの道に倦むあらば、少年易老の言の葉を以て、妾を戒め、己れの課業に怠るあらば、一日難再晨の言を以て、己れを諫む。嗚呼、何たる良友よ。己れ、父に分れ、兄弟姉妹なくとも、此の友と如何なるうき事も共にして、學びの道をはげみ、他日かんばしき香を放ち、父の靈前に供へなば、草葉の蔭にて、如何に喜び給ふらん。妾が良き友とは、たれを指して云ふらん、誰にも有らず、即ち書物になんある。（をわり）

（雨評）最後に、わが友は書なりと言ひたるところ、一寸、おもしろけれど、文章はなほ工夫すべきかど〳〵多し。

## ○讀書のたのしみ

近江彦根　勝山柳子

濁れる塵の世にありて、しばしなりとも心を天外のあなたに馳せ、理想のつばさ自在なる眞理の光りうるはしき、いとも貴き天地に遊び得る、讀書のたのしみあるこそ、うれしけれ。

春はかをれる花の影、夏は緑の木の下に、秋はさびしき燈のもと、冬は雪つむ窓の前、まづ友とする書の數々、ひもとく心の樂には、富も位も名譽も、あへて易ふべき力あらじな。

われ、大海の小笹小舟にもなぞらへん、ちいさき身をもて、無邊の宇宙を、胸中にこめ、あらゆる萬有を身につなぎ、翼なくして千里の他郷にとび、あゆむなくして萬里の絶景佳境にあそび、はた、幾千年の過去をも、我が眼の前にひきよせて、見ぬ世の古人とかたり得らるゝなど、皆これ讀書の賜にあらずや。

あはれ、吾、俗界の臭にそみ、暗潮の濁に浮きしづみ汚れ〳〵し身なりとも、一度去りて、書中の人とならば、月を蔽ひしむら雲の、吹きくる風に散る如く、鄙吝の心すゝがれて、清けくたかくうるはしき世外の人とうちかはり、吾身眞理と同化して、自然の母のふところに、つきせぬ生命さとるなれ。

あゝ、世にたのしみの數あれど、いとも清くいともたのしく、人の心の糧として、偉大の力あるものは、讀書をおきて、他にまたあらんや。（終）

（雨評）言ふところもきこえたり。且つ詞に多少の才は見ゆれども、なほ筆は工夫を待つべきもの多し。

## ○あゝ天然

加賀庵子

嘉永六年夏の頃とかや、浦賀灣頭の砲聲一發、はじめて我長夜の眠りをさましゝよりは、萬の道日に月に進み進みて、今や昨日理論は、今日の事實となり、今日の事實は、明日の勢力となる文明の世とはなりぬ。さるを、德てふ道のひとり、之に伴ふ事の遲きは、げに口惜しき事ならずや。されば宗教界はこゝに呼ばゝれども、教育界はこゝに叫べども、世の濁流は强くしてなかなかに袖を連ねて之に陷る僧侶教育者さへあるこそ、いとあさましき限りなれ。あゝ、かゝる世の樣にも倣はで、獨公明正大なる天然のけはひこそ、げに尊きものゝ極みなれ。

生存競爭の巷に榮えんとして惱める人も、一度出でゝ麗しき天然に交らば、花の白雲たなびく時、青葉のかげの涼しき時、あるは、虫の音かすかなる夕、清き雪のあしたなど、四季いづれの時を問はず、誰か其快きに日頃の塵を離れざる。あるは、浮世の波に楫を失ひて、失望落膽の淵に沈める人も、淸き花の香に醉ふやさしき蝴蝶の姿をしたひて、黃金の色濃き春の野に、さては、もゝ草匂ふ秋の野にさまよひ出でんには、などか浮世の夢もさめざらん。げに吾等が友とし鏡として耻ぢざるものは、唯この一をおきて、又有りやなしやを知らじ。はげしき世の務に伴ひ得で、厭世の念止め難かりし人の子も、一日浪打ちかへす岸邊にあこがれ、洋々としてはてしなき青海原の景に膓を洗ひ、こし方行末の遠きに、思ひを馳せて、歸らぬ今日を歎きすゞろに心を振ひ起しゝためしもなからずやは。あゝうるはしきかな、天然のけはひ。昔叡山に杖を曳きし二人の武夫も、幽邃なる彼の山の景に、一聲だも叫びたらんには、苦き猿島の涙もなく、瀨戶內海のあだ浪も立たざりけんを。

あはれ、世の多くの人々よ、浮世の營利にのみ心を傾けて、あたら一生を苦き巷にのみさまよひ終らんとするか。など眼を天然の方に向けて、涼しき樂を味はざる、濁れる心を淸めざる。

（雨評）これも言ふところはきこえたれど、なほ筆は一層の工夫を待つべきもの多し。

## ○星と水

上毛　樋口かれ子

西空になびける一刷毛の雲は、紫黑の色ふかく、夜のうす衣は、こがれの汐路はるけき稻田の彼方よりひろごり來て、森よりのぼりし夕げの烟は、やがておばしまを蔽ふ夕もやのそれとなりつ、百舌鳥の叫び、鳥の啼く音は、いつとはなしに絕え失せて、小川のさゞめきのみぞ、夜の歌しづかにかなで行くなる。

くすしき閃光、夕暗の空にひらめくと見るまに、星一つ瞬きいでゝ、今宵の靜けさを樂しむらむ、底ふかき笑をたゝふ。たへなる想に、したしう見つむれば、無限の笑をもらしつゝ、星は一つ〳〵と匂ひまして、はてはうす暗の空は星の光にあけて、蟲の音あはれにすだく草の根も、たづねうべし。稻田を渡る風涼しう、穗末に萬頃の碧を漲して、淸らけき小川の流れは、かず〳〵の星にさゞめく。

白鳩の眼、兎の眸にも似たらん星の姿、その笑みこそ、乳房にすがる幼

見が、嘗の色をたゝへて、母の面を見守る眼ざしにも似たらんかし。北斗の笑みは、海ゆく人のしろべとなり、牽牛織女の笑みは、又のあふせに樂しむ聖き望を收め、あした夕の星のまたゝきは、心弱き下界の人にいひしらぬ啓示をたるゝなり。常世に匂ふみ空の星、やよひに匂ふさくら花、かれをみ空の花とかたひ、これを浮世の星と云ふ。かれは萬年の春に榮え、これは嵐にちりうせて、人の世の短きを示す、萬人の愛に笑みて、萬人の情慕にちる、浮世の星こそ幸ふかけれ。み空の花は、人の子にしたしまんには、あまりに遐かり。アカデミーの心靈は、千秋み空の花に憧き、不可解に悶ゆるヒロゾハーの恨は、消え易き浮世の星にあり。

星をうつし、月を沈め、はた空ゆく雲、天かける鳥、はては、天地の萬象、宇宙の森羅をいだき收めて、悠々かなて行く水のしらべこそ、磯の香たかく、紫煙たゞよふ三保の松原に、しばし羽衣をやすらひて、岸うつ浪に琴の音を通はしけん、天女のしらべのそれにも似たれ、うたふその曲は、造化の妙、宇宙の美に、無限の詩趣を秘めるヂヒテルが、星清き夜半、神にさゝぐる叫びにも比すべし。あはれ流に沈める星の影、それをいだきて誇ふ水の姿、そは世のあらん限りとはに匂ひて、無限にうたふなり、そこに聖き戀のさゞめきありと知ろしめさずや。



## ○第二艦隊

徳島　西崎花世

あゝ、第二艦隊。此の日露戰記中には、或は雄壯、或は壯快殆ど春花の芳を爭ふが如く刻し行けども、此の第二艦隊の神勇なるに、並ぶべきはあらず。これより後にもあるべしとは思はれぬなり。我れは實に、此の名、第二艦隊てふ名を思はざる時なし。然して、今これを筆にするを、無上の愉快とするものなり。あゝ第二艦隊。第二艦隊は實に無能の如くして、實に其の戰功無双なりき。午睡艦隊とのそしり迄うけて、將士の眼は猫の目の如かりき。浦鹽艦隊津輕海峽を通過すときゝては、クヅッと波濤をにらみつゝ、濃霧を罵り、追へばかくれ、さぐれば居らぬとありては、おふるゝ涙を東天にそゝぎつ、事理しらぬ内地人の嘲笑受けては、たゞめいして時をまつ。其の心中は、あゝあはれいかなりけん。水漬く屍と誓ひてし心は、涙だにおとさぬに、口惜しき名受けて胸さする、さばかり寒き艦上の夢路は、おゝ、又如何ばかり……。然れど、されば、天正し。飽く迄我れをたばかり走らせし彼れ敵も、時やつきけん、又わが忍耐の精神天をやつきし。蔚にマストを合して、彈丸散らしぬ。此の時や、あゝ、此の時や、日頃の恨みに怒龍の如く、其の一艦を擊沈し、他の二艦を走らせしが、又立つ事能はざらしめき。然して、其時なれ、あゝ上村中將は命じて、浪間にたゞよふ敵兵を、殘す所なく救ひ上げたり。この事やいかに。無能と罵りし者、顏色あるか。そも、戰場に出てゝ戰ふ武士は、其場こそ敵なれ、はた味方なれ。三寸去つて向はば、何ぞ仇敵たらん。共にともに君の爲め國の爲めにとつくせしのみ。これ世の論なり。然して、未だよく其の實をあげたろものあるなし。然して、此第二艦隊の擧、今や、世の龜鑑として、遺憾なく我が武士道の花をにほはせしは、誰か雀躍せぬものあらん。然るに尚戰功を數へていふ者あり。愚ならずや、いて數へてん。世はこれ愛とは、已にきく所ならん。私情はさまぬ、天使に似たる戰場の救濟、しかも數月かさなる恨のかれをすくひたる、其愛の泉はいかばかりならん。愛をさらに思ひて是れをとけよ。戰功比すべからず、知るや、さらばたゝへれ、第二艦隊の行動を。……あゝあはれ第二艦隊、世界に類なきこの擧動は、萬世までもつたはらん。いみじきかなや、第二艦隊。

## ◯梅の花を見て

三重縣　丹羽たい

花てふ花は、いとも數多し。されど、そが中にも、わが理想としも思はるるは、梅の花になむ。この花は、人目も草も枯れはてゝ、霜白く吹く風もさえ〲なる冬の程より、とくつぼみ初めて、さすがに荒き吹雪にたへ、肌を斬るが如き寒風をも凌ぎて、やがて寒氣のゆるむや、ひとりかぐはしく、咲き匂ひいづる、其のゆかしさ、なか〱に、かの松の、うつろふ秋にも、色かへぬにもまさるべし。池のほとりの老木の梅の、稜骨たる姿を、かざらぬまゝに、水にうつして、馥郁たる花を、水影に宿したる樣、水の心もゆるみて、汀の氷も、いまや解けぬらんと思はれて、いとすが〱し。あるは、徒然なるまゝに、庭に下りたちて、すゞろありきする折りしもあれ、かぐはしき匂ひの、いづこともなく送られ來るに、そをたどりて行けば、夕べ降りし雪の下より、二つ三つ花のほの見えたるなど、いはむ方なし。あはれ、一枝手折らばやとたちよれば花か雪か雪か花かと、あやまたるゝなど、めでたしともめでたし。あるは、谷の戸いでし鶯の匂ふ梅が枝を、彼方此方ととびうつる、羽風に送らるる花の香は、いみじうゆかしく、ちりの世のものとしも、おもほえず。形やさしきが上にも、氣高くて、恰も雲の上人にもくらぶべく、これなか〱に、なまめかしき櫻のおよばぬところにぞある。されば、昔より百花の魁として、はた四君子の一にも加へられて、深くめでらるるも、理りにこそ。なべて難きを忍び、苦しきを凌ぎてこそ、おのづから嬉しう樂しき時にも逢ふべけれ。さるを、寒き日は、埋火のほとりに、親しく坐しつゝ、うき世の荒風を、よそに聞きながし、苦しさをば聊も知らず顔なるこそ、誠にうたてき心ならずや。あはれ、世の人よ、霜白く吹風すさまじき折りも、能く忍び、凛烈肌を斬るが如き寒風も、木末うづむる白雪をも、能く凌ぎて、咲き出てたる此の梅に、ならはでは、いかでか樂しく、うれしき時の來たらるべき。アヽ、世に花てふ花は多かれど、あらゆる德をつゝめる、この梅花こそ、をみなの道のかがみなれや。

## ◯新年の辭

播磨國　山本すがの

明治は茲に三十八年となり、西暦は茲に千九百五年となり、而して、妾は實に十八年となりぬ。この新年劈頭に於て、抑へんすれど抑ふべからざる感あり。いささか、禿筆を執つて、其の感を述べんか。

客年二月以來、我が國は、幾十萬の貔貅を、遠き滿洲に送り、或は黄海に遣し、平和の破壞者たる、人道の攪亂者たる、邪惡極まる露國を打懲さんために戰ひてあり。敵を弱しとあなどるよりは、強しと見ば大なる誤なからんか。彼れ露國や、嘗て歐洲第一の陸軍國と謳はれしものなりこの頑強なる露國を屈服せしめんには、非常の覺悟と非常の手段なかるべからず。若し一朝我國の不覺を取りて、劍を倒すことあらんか、我が國土はあれど、舊來の日本國は在らざるに至らん。故に、我が國は譬へ幾多の犧牲を增すことありとも、戰はざるべからず。否、國土の黑焦となるまでをも、戰ふの決心なからざるべからず。今回の戰や、實に開闢以來未曾有の大役なり。國民たる者、男女貴賤の別なく、出來得る限り各其の業務に奮勵し、政府を輔け、出征軍人の後援となり、自衛のため平和のため、人道のために、如何にもして最後の勝利を期せざるべからず。惟うて茲に至れば、徒に雜煮を食ひ、羽子をつくのみにて止むべけんや。諺に日はずや、一日の計は早朝にあり、一年の計は元旦にあり、一生の計は少年にありと。然らば、本年來る所の三百六十五日、果して如何に利用すべきか。沈思一番を要するは、即ち此の問題なり。妾は新年劈頭に於て、一年の計を立つと同時に、一生の計をも立てざるべからず。顧みて、妾の經歷を追想するに、轉た感慨悲死の外なきなり。智識德行の啓發、學業技術の進步の跡は、寥々として認むるに苦しむ。嗚呼、くち惜しい哉。これ、畢竟、堅忍の精神、不拔の勇氣なく、全く薄志弱行の致しし所なり。然し、過去の失敗は、如何に歎くとも、更に其効なけん。然らばこの沈淵の妾を救濟する者あらざるか。あり、あり。本年來る所の三百六十五日、これなり、嗚呼、新年は妾をして遂に蘇生せしめたり。妾は茲に年を新にすると共に、舊來の精神を掃除し、奮發一番、かよわき腕ながら、漂ふ小舟に艪を執りて、豫て志望せる目的の彼岸に達せずんば止まじ。如何なる困難に出遭ふことあるも、之れを排し之れを切り拔く勇氣なかるべからず。強風怒濤、元より覺悟なり。意志を鍛へ、精神を練るも、本年なり。學業を進め、人格を高むるも、本年なり。過去の失敗を挽回せんも、本年なり。それ本年を愛惜せよ。

## ○神の聲

彦根　宇多花子

『誰れか、賢女を見出すものあらんか、其の價は、眞珠よりも尊し』と。之れ、キリストが、猶太の野に立ちて、歌ひし聲なり。今や、我國は賢女多し、智に、德に、行に、學に、皆神の意にかなへり。賢士は賢女より生る。之れ、文の法則なり。滿洲の野に、遼東の原に、黄海の波上に日本海の洋上は、正義の爲に、人道の爲に、戰せる我が忠勇無双、大義名分を明にせる義烈賢士は、皆之れ賢女の生みしものなり。此の賢士ありて、我國は露國を討ち、猛鷲を亡ぼし能ふ。されば、我國は、眞珠の國か、黄金の民か、然り、げに世界中に卓絶したるはわが國民なり。一歩超過せるはわが婦人なり。

聞け、聞け、盟友姉妹よ、世界の人よ、今しも正しき神は、東洋の野に立ちて、歌ひたまへり、

『誰か、日本の婦人を見ざるものあらんや、
其の價は、實に金剛石よりも尊し。』

## ○月よ

神戸市　神山園子

月と花とは昔より、誰が樂まぬ人やある誰が悦ばぬ人やある。さはさりながら、「月花も、心につれて、憂き事の種となれるも、多からむ。」とは小室某の謠ひし花月の歌なりけり。眞に然り。霞みて暮れし春の夜の朧月には、花も一しほの香を增し、夕立の雨の一むら過ぎて、木立いとしめりがちなるに、山の端出づる涼しげなる夏の月には、晝の熱さも忘るが如き心地するぞおかし。ましてや、雲井に高く冴えたる秋の夜の清き月影には、心のくもりも晴るゝ心地ぞすなる。やう〳〵木枯の風身にしみて、霜いと白う、三日の月ほのかに枯柳にかゝりたるなど、なか〳〵に興ゐるものなり。さは云へ、全じ月ながら、見る人の心々によりて、けぢめなからめやは。胸に憂を抱きて、之れを見ば、何のたのしかるべき事やある。心に悦びをもて、之れを見は、いやよろこびの多かるべき。松風清き嵯峨野の月は、その古へ照らしゝ橡の思ひ忍ばれて悲しく、冬の吉野の月影は、今もなほ雪を名殘にわかれてし、靜御前の慕はしくあはれまして、いと涙のもよほさるゝなり。恩賜の御衣さゝげて、むかし忍び玉ひし菅公も、精忠無二の心ながら、時運や拙なく、汚名を負ひて配所にながめられし筑紫の月は、人をして感慨にふけらしむ。又、いざよひの月、いと清く冴えたるに、いづくともなく一朶の浮雲あらはれ來たりて、さしもの光りもいと暗くなる。實に月に叢雲とは之れをぞ云ふなるべし。雲も程なく過ぎ行きて、再び冴やけく照り出てたるは、さきにも彌增しうるはしき心地ぞする。

月よ、あゝ月よ、眞如の月よ、美しき光もて四時の天地を彩る月よ、汝こそは心はなけれども、其節々につれて、趣をかへ、或は人に喜びをあたへ、或はかなしみをあたふるものなれよ、あゝ月よ。

## ○風

福島縣　杉原たかやす

風てふものは、なかなかに、愛嬌にとむものぞかし。殘の雪にうち交り今を盛りと匂ふ早梅の花を、綴るが如く、舞ひ囀る鶯の長閑なる聲と、よき花の香とを、何處とはなく送り來る、春の夕の風こそ、いとをかしけれ、

鐵をもとかすてふ、夏の日も、ふかく繁れる叢を吹きなびかし、水なき野邊に波ちらして、吹き來る風ぞ、いと心地よき。

ところどころに生ひ繁るちがやの下に、なく虫の聲きく每に、何となくあはれを覺ゆる、秋の夕の風に、立田姫が織りなせるもみぢばに、夕日の照りそふを、ふきてちらすもいとをかし。

たよをふれども綠なる松が枝に、琴はかけれど、峯の嵐か松風か、こととふ人の爪音か、」とまでうたがはるる程の自然の音樂を奏てつゝ、峯をかすむる風、いとをかし。

さはさりながら、かばかりをかしき風も、時によりては、なかなかに、惡戲事もなすものぞかし。

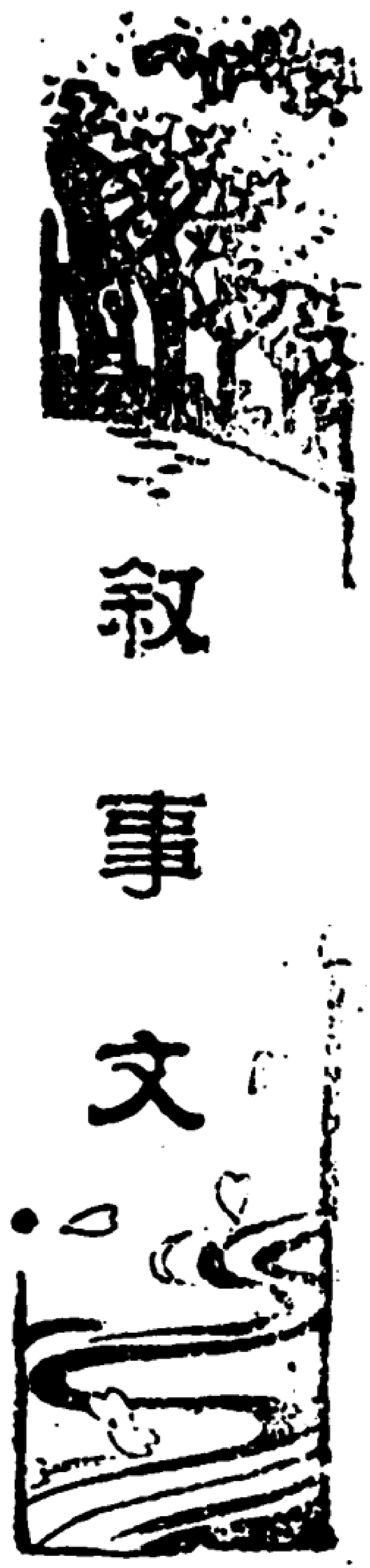
人まちかほに咲き匂ふ花をふき散らし、明日見んと思ひし手弱女の心に仇をさとらしむることも、あるぞかし。

雨すぎて、草葉における露の上に、玉かとまがふばかりに、夏の夜の月の宿れるを、吹き散らす風も、あるぞかし。

雪かとまでにすみわたりたる秋の夜の月に、うき世のうきをなぐさめんと思ふ折りしも、むら雲おくる風もあるぞかし。

さなきだに、ひとり旅寐のさびしき冬の夜に、窓をかすむる、凩もあるぞかし。

實に定めなき風なれや。




## 塩井雨江先生選

### 天

### ○春雨小景

東京小石川東青柳町二　近藤愛香

立ちこめし霞の、いよゝ深うなりまさると見るまに、霧の如き雨は、しと／＼とふり初めぬ。晴衣の袖をぬらすも、いと惜しき心地せられて、捧げもちし櫻の一枝を、頭におほひつゝ、麥生畑の細道を、家ある方に向ひて、小走りに急ぎたり、里川のほとりに出でぬ。ふめば音ある板橋のまなかに立ちて、水上の方うかゞへば、岸邊の柳静かに、水の面に垂れて、ぬれ色の一しほ紅き姫桃の花、波紋と共に動き居る風情、いとをかし、水にそうて、やゝ行く所に、伯母が小家は立てり、つと走り入れば、庭は落花に埋れたり。足音に驚き飛び立ちたる鶏は、つばさにのせたる花片を、雪かとばかりふりみだして、あみ戸の内に入りぬ、椽にのぼりがてら、振りかへり見るに、はるかの橋を渡り行く人のかげ、かすみに墨繪のさまのをかしさ。となりの籬うちこえて、とび來れる白き蝶の二つ、我目の前にたはむれ居たりしが、やがては庭先の菜の花畑にかくれたり。軒より落つる雨の雫はいとさびしげにて、ぽつ／＼と音して風もあらなくに、軒端の花は雪ふると見せて、絶えまもあらず、散りしきりつゝ。

（雨評）軽妙なる筆、優美なる詞、誠にゆかしき春雨の小景、盡き來たりて、詩韻限りなきものあり。

### 地

### ○春趣

愛知縣碧海之濱　松翠女史

富士の裾野は、見渡す限りはる／＼と、木の芽けぶりて、見上げまつる御山の雪には、朝日の影、所まだらに照り輝き、横雲棚引く山の端、やう／＼霞に蓬のもえゆく様など、繪によくも似たる哉。と見れば、山のみならで、彼方此方の茅屋の軒も、今は早や霞の内に籠められて、うら／＼と長閑けき田面に烟る陽炎、もゆる若草、色うつくし。折り知り顔に匂ひ出でたる木

木の花に、こち吹く風の靜かに訪れたる、何をか語り、何をか問はんとするらん。囀り交はす鶯の音色も、清らかに澄みて、雲井の空にまで響くべう思はれ、鷄の聲、雀のこゑ、亦た時を得顔なり、綠を疊む生垣の内外に、飛び狂ふ胡蝶の姿も、門邊の園に遊べる小狗の態も、春はこよなう嬉し氣に見ゆ。鍬肩げたる男、菜籠抱へたる女などの、糸引く如き細き畦道を、ゆるやかに縫ひ行く後より、牛飼童の足許のろく、柳の蔭に其身諸共佇みたるは、面白き野節など聞き惚れてにやあらん。此君なければ春も春ならずと云ふらん如く、酒に醉を借りて、浮かれし男の一入元氣なりけるが、岡部の芝生に、軈て野伏の氣樂さは、浮世の外に樂しき夢をや貪るならん。此の世の阪も越ゑ果てつらんと見ゆる翁共の、打ち連れて、杖に縋りたるは、歸依の御寺に念佛講の催しなどありて、春の日長を爪繰る珠數に數へんとするものなるべく、是も亦た、いかばかり樂しかるらん、良久しくして、若き夫婦連の、乳兒の可愛きをさへ脊にしたるが、一筋道を森蔭の方へと志して行くあり。二人は快き春の光を浴び、暖き野風に吹かれて、何やら面白氣に語りつ興じつ、運び行く足許輕げなるは、里の親許訪るゝにてもあらんか。見送れば、可憐なる此の姿は、紅霞と疑ふ桃の木蔭を辿りて、見えつかくれつせしが、やがて、其の影は霞の内に包まれて、朧に消えゆきぬ、思へば、彼等は、人の世の樂しき道を蹈みつゝ、何地往くらん、ゆかしの姿や。



（雨評）長閑に樂しげなる春趣、掬し來りて、ゆかしきものあり。

人

## ○夕日影

麹町區山元町三丁目一番地　高橋つる子

「美代ちやん、お遊びなさいな……」

隣家の太郎さんは、今年三才になる次郎さんを連れて、吾家の美代を誘ひに被入いました。

「太郎さん、待つて頂戴、今直ぐに行きますから‥‥」座敷で千代紙を弄んでた美代は、斯う叫んで、あはふた紙を箱に仕舞つて、ばた／＼と外へ出ました。太郎さんは、

「美代ちやん、八幡さまのお社に遊びに行かないか」可愛らしい眸をくるりとさして、斯う言つた。

「行きませう。そして、裏のお山に登りませう。次郎ちやん、あんよが出來ますか。」

直ぐ同意した美代は、太郎さんとの中に、次郎さんを入れて、路草食ひながら、巴のやうになつて八幡の社へ、三人ちよこ／＼と小跨で歩んで行きました。

太郎さんは今年七歳、美代は六歳です。

終日長閑に吹いてた春の風が、暖々眠くなつて、柳の葉にも訪づれるのが少くなると、お日さまも草疲れて、遙か遠い／＼森に沈まうとすると、向ふの高いお山の方から、ぱつと明るく夕榮えして、まるで孔雀が五彩の羽を伸したかのやう、緋の笹縁を縫ひそめて、赤く／＼空の一角を劃ると、次第に／＼廣がるやうに見えて、戀の女神が牡丹殿で舞つてるさまも、これには及ぶまいと思ふくらゐ、華やかに美しく色どつて空の山や川やを天の柱に懸けさせる。

太郎さんは、次郎さんを脊中に負つて、八幡さまのお山で、暫然と夕映を見てゐる。やがて美代に對つて、

「美代ちやん、奇麗だね、僕かあ、彼處へ行つて見たいな、屹度面白いと思ふんだ。」

「太郎さん、わたしも行つて見たいことよ。それして飯事でもして遊びたいわ。」

小まちやくれたことを言つて、また美代も昵と見惚れてゐる。

「お日ちやま、もうねんねなちやいますか。坊は未だねんねちまちぇぬ、さよなら。」

突然、脊中の次郎さんは、可愛らしいおちよぼ口を開いて、ぴよこ／＼御辭義しながら、斯う言つた。驚かされた二人は、何が可笑しいか、次郎さんの身振りを見て、共に

「ハッハッハ‥‥‥」

「ホッホッホ‥‥‥」

と笑ひこけるのでありました。

今し方、鴉がかあ／＼と騷かしく、榛の木から向ふの樹立繁つた森の方へ、急いで飛んで行きますと、續いて雀が、ばた／＼と二三十羽、羽ばたきして塒へてんでに歸へつて行く。あとは、薄ら寒い風が靜かに頬を

撫でる。

「兄ちやま、ちう〳〵もおうちへ歸りまちゆから、坊も母ちやんとこへ行きまちよう。」

脊中の次郎さんは、太郎さんの顏を覗き込んで、しきりに歸宅を促すのでした。

「美代ちやん、おうちへ歸りませうか。」

「太郎ちやん、次郎ちやんも歸りたがつて居ますから母ちやんとこへ歸りませう。そうして、儂しの家で遊びませう。」

美代は、そうしてと言ふのが、口癖である。太郎さんは重いので、脊中から次郎さんを下して、三人共々山を下りるのでした。

「夕燒け小燒け、明日天氣になあれ！」

一緒に唄ひながら、さら〳〵とした流れ清い小川を沿うて、樂し氣に面白さうに、やがていそ〳〵三人は歸つてまゐりました。

（終り）

（兩評）あどけなきものどものさま、あつさりとうつされたるところ、愛すべし。

秀逸

## ○歸省

備前　松本もと

岡山々々、汽車は止まりぬ。こゝより一里と思へば、早故郷に歸りたらん心地して、いそ〳〵汽車を下りて、俥に乘りぬ。老いし車夫の遲き歩みに、心はいらてど、三年ぶりに國訛きく嬉しさよ。彌生の春、野も山もみな、一樣の若みどりに染めなされて、み空に歌ふ雲雀の聲も、いと長閑に、うす霞たなびくは、國境の山なり。

あゝ山も野も昔のまゝの姿にて、妾を迎へくれぬ。水清き大川の板橋を渡れば、やがて宿北方の村。そを過りすぐれば、なつかしや、吾が村は見ゆるなり。妾は俥を下りぬ。

ゆる〳〵と流れきて岸の柳のみどり髮洗ふ里川づたひに、歸りくれば、土橋の彼方に、里の乙女のやさしき唱歌の聲の聞えしが、妾の近かづきしに恥らひけん、聲はと絶えぬ。道のべには、げんげ、たんぽゝ咲き亂れて、黄に紅に、打ちつゞく菜畑には、蝴蝶ひらひらと舞ふ。

あゝ故郷の春のながめの美しき事よ。

牛の聲遠く聞ゆる岡下の廣野には、里の子ら、打ちよりて、暖かき日の光浴びて、或は草刈り、或は牛飼ふさま、ほの見ゆ。嬉しさ胸にみち〳〵て、足の運びも、

いと早かり。汽車の都合にて、一日早く歸りしを、さり共知らで、父上母上も明日を待ちまさむ。

村に入れば、三年見ぬ間にかはりはてゝ、珍らしく感ぜらる。土橋を渡りて、桑畑通りぬくれば、吾家なり。つみ草に餘念なかりし妹は、妾を見るや、一目散に門内に馳け入りぬ。母上父上も、喜の色面に溢れて、こは思ひもよらず、一日早かりしと出迎へられぬ。家に入れば、感極り、喜びみちて、何より話してよきか、それさへ知れず。

わざ〳〵母上が沸し給へる風呂に入りて出づれば、日は早沈みて、夜の帷次第〳〵にたれこめて、籬の外馬の鈴のひゞくは、馬子なるらし。

明日は親しかりし友だちをも尋ね、師の君を訪ひまゐらせんかな。

（雨評）文才は儘に認められたり。唯だ、後段の筆の、前段に似ずして、もの足らぬ心地するを惜しむ。

## ○妹の墓

赤坂　河村菫秋子

一

小やみになりし雨の行く方やいづこ、七彩美はしき虹の榮も、いつしかうすれて、野山もうす墨を、流したらむ如き黄昏野道、せゝらぐ水の幽韻に、ものゝ哀れは、一しほ深く、亂るゝ尾花の露に、袂うるほしながら、われは今專念院の墓所をさして、重き足をはこびつるなり。

二

清き夕づゝは、雲の帳をもれて、今し專念院の甍の上に幽かなる光りをなげぬ。あはれ、天つ空馳け登りし、妹露子の靈か、そも。

雨あがりの露けき小路を、やう〳〵に辿りつきて、半は頽れたる山門の廂に、虫食みたる一面の古顔、專念院と包げに書かゝれたるを、仰ぎたるときは、妾かむねには、又一しほの悲しさと、哀れさとをそへぬ。

門を入りて、左に折れ、寂漠の境を、半町ばかりも行きて、更に右に曲り、壘々と立ち並ぶ墳墓の中を、進みゆけば、妹の墓なり。闇の色は、見る〳〵地上に擴ごりて、不意に響く振鈴の音に、思はず頭をもたぐれば、灯幽かなる庫裡に、年若かき僧の經よみたり。

三

露子！、露子！、われは墓前に泣き伏しぬ。

あまり高からぬ新墓は、野芒の穂に面なでられ、骨ばかりになりたる提灯の、青竹の先きにかけられたるが、夜風に物化の如く動くさまの、いともの凄し。

やよ、可愛しの妹よ、春は花さく野邊に菫つみ、秋は月照る窓に文よみしも、夢なりき、なれが小さき唇よりもるゝ一言一句は、いかに我がホームを平和ならしめしか。さはれ、愛の權化、天使の化身のなれも、遂には死の神が放てる白羽の征矢に、むね射ぬかれて、

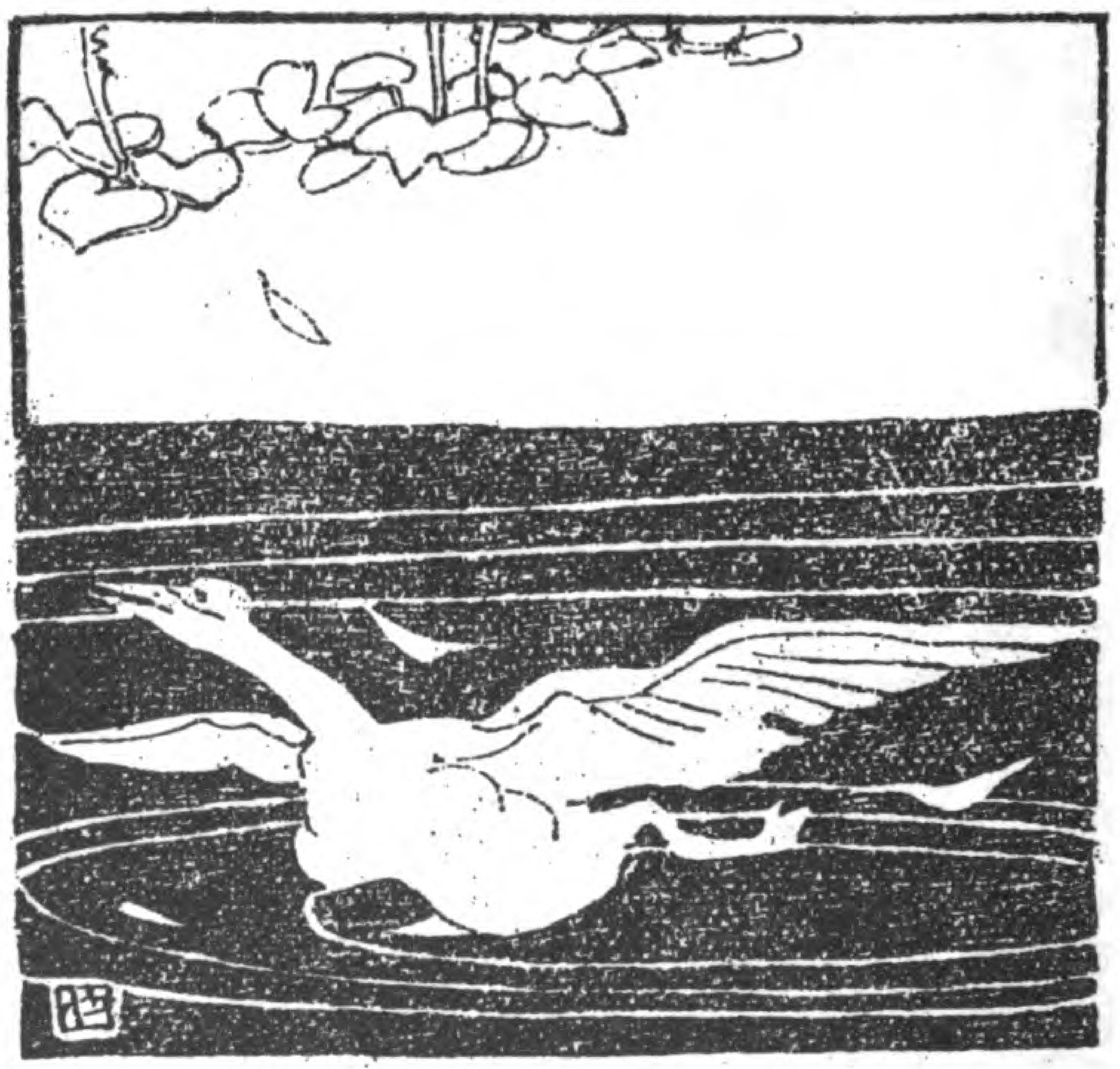
冷やゝかなる土にかへりぬ。やよ、妹よ、小雨そぼふる寂しみの夕べ、前の世の事をふと思ひうかべて、あな戀しとな思ひそ、夜毎の松風によく魂をすませて、未來の解脱をこそ祈れ。われも亦隙ある毎に、必ずとひ來るべければ、やよ、可愛しの妹よ……。思ひ迫まりて、よゝとばかり再び墓前に泣き伏せば、あたり靜かに、たゞ松籟の響、怪禽の聲、夜はいたう更けぬ。

（雨評）筆は先づ整ひたりといふべし。されど、さして取り立てゝ申すべきほどのふしなきををしむ。

## ○田舍の冬

紀伊　木村　秀子

秋もはや過ぎて、冬とはならぬ。見渡しの草の原、霜白う置きわたして、木々の梢やうやうまばらに、吹く風、身にしみて、寒さ次第にきびしうなりぬ。まこと、冬枯れのあはれは、いづこにもあれど、わきて、人目も草もと云ひけむ、田舍の景色こそ、ひとしほあはれなれ。訪ふ人もなき柴のとぼそも、峯の松風、たえず音づれて、時雨にまじる落葉の、のきばたゝく音、いと寒げなり。ふりみ



ふらずみ、定めなき時雨も、やみぬれば、日やゝ暖かなるから、そがひ曝して、つゞれぬふ媼のかたへに、うち臥す小猫さへ、なほ小春の日盛は、戀しかるらむなど、思はるゝもをかしういつしかも、日數かさぬる程に、やがて、木がらし、はげしう、吹き立つれば、落葉雨の如くに降り、梢あらはに、山はみながら瘠せはてゝ、こゞしき岩が根のけはひの、見ゆるにつけても、ゆくりなく、常なき世のはかなさおぼゆるぞ、物うき。

あけくれのながめばかり、あはれなるはあらじ。峯の炭がま、木のまにけぶるあした、霞、まどふ夕べはさらなり、よたゞ、空しき枝に、すさめる木がらし、をやみて、旭まばゆく、さし出でたる空に、小鳥の聲もたえて、見出せば、荒れはてし門田のあぜに、倒れたるそほづゝ茅もてふける屋根、道のべにちりぼひたる葉ども、さては、野末まで日に置きわたしたる霜のあした、落葉にうづもれて、音たえだえなるやり水より、烟りのたつこそ、あはれなれ、さても、冬深うなり行けば、雪のけしきこそ、こよな

うをかしけれ。昨日まで遠山にのみ眺めしみ雪も、庭しろたへに、降り積れば、いぶせき茅屋すら、玉のうてなとまがひ、あらはなる梢にも、ひと夜の中に、匂はぬ花の、咲き出でたるなど、その眺め、たとしへなしや。まいて、風なく、雪なく、見る人もなき、月影のさえ渡りたるゆふべ、白銀の光り、こと更、さやかなるなど、つたなき水茎には、かきつくすべうもあらず。げに雪と月とのうれしきけしきに、冬枯れのさびしさも、しばし打ち忘れぬめり、

そも、日頃北風はげしう、雪を飛ばすとたえねば、筧の水も氷りやしけむ、音たえはて、雀どもの、塒失ひてかまびしく囀るも、また、あはれにかなしうなむ。折しもあれ、かなたの山かげに、つゝの音、すさまじうなりひゞく、こや、雪にくるしむ、きゞす、などからむとての、狩人がすさびなるらむ、いと心うし。

（両評）詞は優美なり。されど、新しきふしなきををしむ。

## ○静ちやん

静岡縣　静枝

静ちやんは、妾が教へ兒の一人で、今年八歳尋常二年生で、學力に於ても品行に於ても、級中の優位を占めて居るのである。

色の白い福々しい面影、鈴のやうな涼しい目元、凛とした高雅な、しかも愛嬌溢ふるゝばかりの愛らしい顔には、いつも微笑を湛へて、艶々とした光澤ある、緑の振りさげ髪には、紅のリボンをさして、薄桃の袴の着こなしのよい、花の姿！　眞の美の權化、愛の化身である。

妾は静ちやんと大の中好。毎日、静ちやんの紅葉のやうな手を引いて散歩するのが、例である。花の香おくる暖たかな春風に、清い／＼音樂のやうな御得意の唱歌をうたひつゝ、紫、赤、黄、白、紅、などわれ劣らじと美きにほふ草花のそが上を、右に左にはた前に後に、追ひつ追はれつ睦じく飛び狂ふ蝶々を、彼方此方と、追ひまはつて、嬉々として居る其の有樣は、丁度天女か紫雲靉ける雲の上に、舞ひ戯れつゝあるそれのやう、實に静ちやんはエンゼルである。

浮世の仇浪、汚世の有樣、無趣味の現世など、そんな事は静ちやんの胸には少しもない。たゞ世の中は、彼女の野遊の如く樂しいもので、世人は彼女の慈母の如く親切なものと思つて居るにちがいない、ア、此の神聖で、清浄な、無邪氣で、愛らしの心の、いつまでも變らないで居ることを得るだろうか。岩間にせゝらぐ眞清水も、やがては濁りたる雨水と共に、大河に集うではないか、ア、如何にも心細い事である。

刹那、何處ともなく歌ふ聲が聞えて、迷想はハタと途絶えた。「蝶々とまれや菜のはにとまれ」と讃美の歌のそれの樣、而も、だん／＼近づく。今度はついそこで

唱ふので、さてはと思つて、窓を開くと、果して靜ちやん。ア丶、この愛らしい紅薔薇の如き唇から、清い唱歌はうたひだされたのであつた。靜ちやんと聲をかけると、アラ先生とひとしく叫んで飛んでくる。可愛い子と、堪えず抱き上げて、思はず接吻した。

ア丶願くば、惠深きミューズの神よ、此の靜ちやんをして、無邪氣であどけない愛らしい心の消えぬやう、行末多くの幸給ひてよ、と妾は竊に默祈した。

（をはり）

（両評）筆は先づ整ひたりと申すべし。

## ○咲き野邊

越後　五十嵐富美

「お里さ、麥の草取りだの。」

咲き匂ふ菜種畑の間から出て來て、いまし餘念なく麥畑の草を取つて居る娘に、かう聲をかけたのは、年のころ十七八の赤ら顔の、てく／＼と肥え大つた。女であつた。

「ヲヤお春さかひ、おら、びつくりしたよ、突然にお前に聲かけられたもんだから。」

お里は鎌を持つたま丶立ちあがり、左の手にて冠つて居た笠のふちをおさへて、お春を見あげた。

「ほんにかい、それは惡るかつたのし、オホ……、おやもういかいこと働いだのし、おら今まで隣家の母さと垣越しに話して居たもんだから、つい遲くなつたのね。」

お春は、お里がきれいに草取した幾畝の麥畑を見廻しつ丶、お里の傍近く進み寄つた。」

「さうかい、何かまたおもしろい話種でもあつたのかい。」

お里は、赤紐の前垂に鎌の土がついたのを、片手で叩き落しつ丶、問ひかけた。

「なにの、それ、お前も知つて居る長兵衛殿とこのお國さが、今夜隣村の吉作さの許へ嫁入りするといふ話さの。おら今、隣家の母さから聞いたのだがね、お國さは大へん衣裳が出來たさうだわのし、ほんに、お國さと吉作さは仕合せものだわのし。オヤ／＼、またこ丶にかうして長話して居ると、直に正午になつて仕舞ふわ。どれ早く行つて仕事にとりかゝらうか。お里さ、さよなら……。」

お春は日脚を仰ぎ見て、あわて丶二三枚の麥畑を通りぬけて、野川づたひに、小走りしつ丶行つた。」

「人は嫁取り聟取る中に……わしは軒場にしらみ取る……。」

土橋を渡つて、柳のかけに、お春は唄ひ出した。

「美い聲だこと、おほ……。」

お里はまだ仕事にか丶らず、立つたま丶遥にお春が後姿を見て居る。

自然のこの美、あ丶春の女神は、今しこの長閑き平和の野邊に、逍遥ひて居給ふてあらう。

（両評）咲き野べの情景、多少うつし得たるものあり。

## ○田舍の春

静岡県　名倉貫子

主は市に行きぬ、小娘は弟脊負ひ、芹摘まんとて出で行きしが、彼の唄ふ里謡の聲も、早や菜種畠の彼方に聞えずなりつ。あとに殘りゐし主婦も、菅笠うち被ぶりて、脊戸道を行けり、近き麥畑の草取らんとて。鄙人の氣樂さは、藁ぶき古りし家の、雨戸一枚閉ざして置くなる、

庭の隅には、手入れもせぬ白牡丹ひと株、殊の外淸う、今ぞ盛りなる。愛らしの小蟻の數限りなきむれは、朝鮮垣の下なる草むら分け出でゝ、そが花影の地に印する陰を納屋の方へとねり行く。納屋の軒近くには、井戸あり。桁さへいたうふりて、端には山吹の花、えもいはぬ姿に、むら／＼香り居て、折り／＼、そが小さき花瓣の井の中へ落つるも、憐深し。

かの香りある水を、澁茶にわかして、飮む家人はいかにかうましと飮むらむ。彼の花の香りを心づかでのむかはた如何に。小さき斑犬は、此家にて飼ひ置くものなるが今しも花散りみだる菜畠の小路迴り歸りつ、ちさき愛らしき聲ふりたてゝ、家人さがすさまなりしが、誰も居らぬにあぐみてや、春日影限り無う暖けき軒のわら莚の上にはらばひ、脊などかきむしりつ、愛らしく黑き眼を、よろ／＼輝かし居しが、いつしか其のまぶたは閉ぢぬ。彼は早や華胥の國をたどりてあるならん浮世の繁き務に追はれながら、人は花見遊山と出であるく、此長閑けき日をも、たれこめて日を暮しつる我は、かの小犬の境遇をいたく羨ましと思ひぬ。

（評）のどかなる春日田家の景、多少うつし得たるものあり、されど洗煉の足らぬものあり。

## ○梅を觀る記

三州　都筑靜子

閉ぢこめてのみ、物學びせる身には、月花のころさへ知らで過ぎつるが、常なり。けふしも未明より起き出て、物の本などくりひろげつゝありしに、ふと窓のあたりと覺しく、えならぬにほひのすれば、顔さし出して見まはすに、いづこよりか、花賣る翁の、今を盛りの梅が枝をかつぎてゆくなりけり。見るからにうと／＼しくて、ありしことのいと口惜しく、我にもあらで宿たちいでつ。そこはかとなくあくがれゆく程に、ふくとしもなき東風の、そよとかをるに、心ときめきて、覺えずざまにふりむけば、かなたの川のほとりに、消え殘りたる雪かとまがふばかり、いとしろう見えたり。小走りしてゆきて見るに、梅の盛りはやゝ過ぎにたるやうなれど、袖にしむ香の今一しほにしるく覺えて、ひら／＼とちる花びらの浮びて流るゝさまも、いひしらぬ風情あり。面白さに、水涯近く下りたちて、ながれくるを掬はんとすれば、誰が筆のすさびなるらん、冴えわたりたる水鏡の底に、やつれたる己が姿も

ろとも、枝振りをかしうさしかはしたる花影の、あり〳〵とうつりけり。あまりにめざましければ、ひとりにてはをしなど思ひつゝ、我を忘れて、しばし見とれてありけるに、いづれの梢なるらん、鶯の世にもやさしき聲音して、徐ろに鳴き出でたる、譬へがたなき心地して、うたよみ習へばと思ふも、かひなし。さる程に、午ちかうなりければ、ほいなくも家路をかへりくるに、あかぬ心のたゞかへりみがちなり。

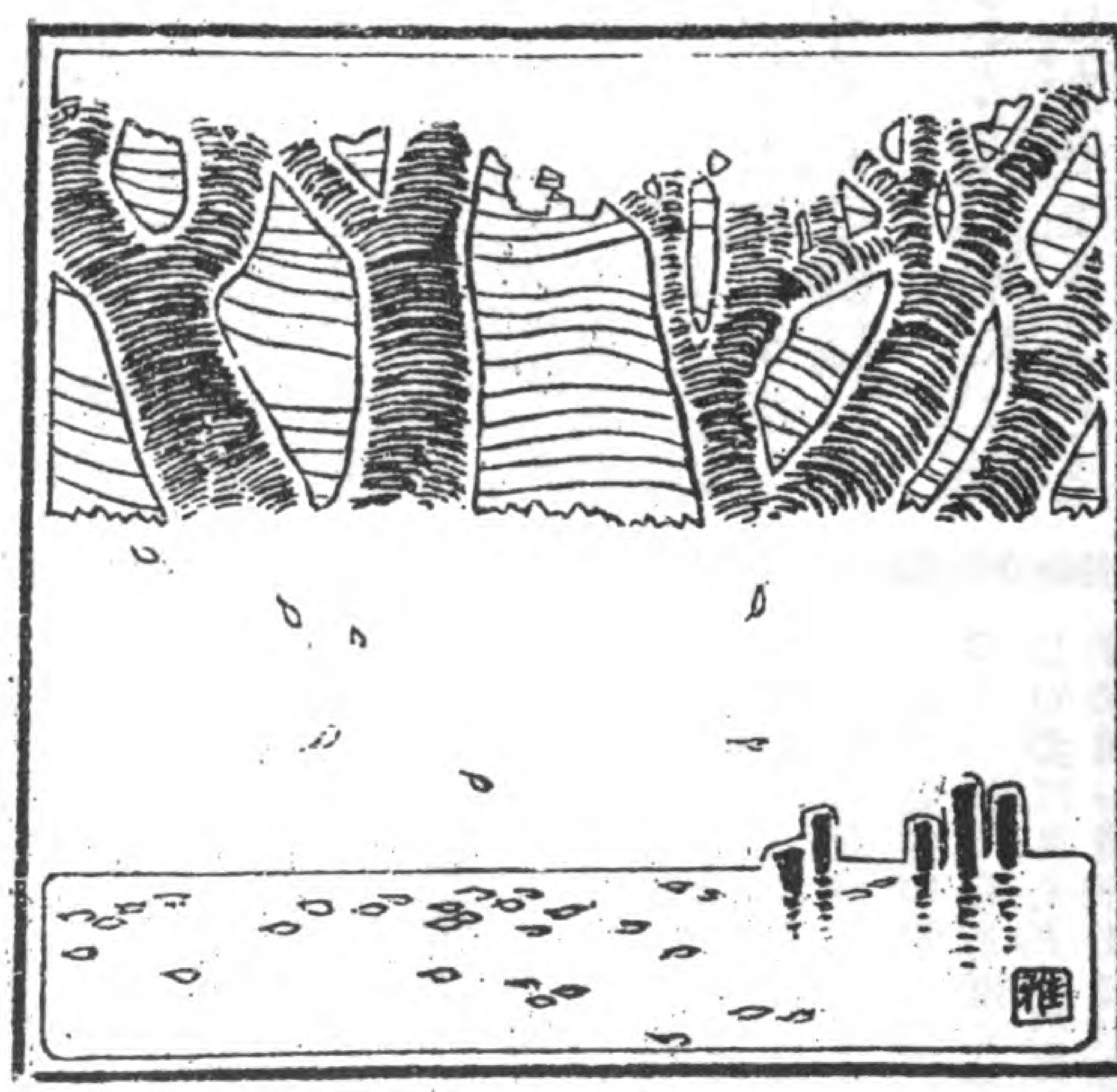
（雨評）難ずべきところもなし。取りたてゝいふべきふしもなし。

## ○里川の夕

福岡市　廣瀨美江子

そよ〳〵と音づれくる春の夕風の、肌心地よきを、胸にうけ、折りからまひくる蝶と、後になり先となりつゝ、若草もゆる野道をかへりゆく程に、ふと小さき里川に出でぬ。

水はいと清うすみ渡りて、底の小石も數へ得べく、岸べの柳のたをやかに靡けるすがたの、水面におちて、あやをるあたり、花の筏の二つ三つ漂へる、またなくおかしきに、彼方の岸の水車小屋には、轣轆としてゆるやかにめぐる車の吐き出す水の流れゆくほとり、夕日



に一しほあかき紅梅の枝たれかゝりて、その上に一羽の小鳥の尾羽つくろひつゝ、美はしき聲にさへずるなど、げに平和の詩境なり。

折りしも、誰が子にや、川下の半ばくちたる土橋のあたりより、稚な兒すかす子守り歌の一ふし、靜かなる夕べの空氣に波紋を傳へつ。

あゝちりの浮世の濁波をつゆほどもしらぬいとしの子よ、如何になれの心裡は清からん、行は美しからん。げにこの里川にむせぶ水のさゝらぎのそれのごと。

あゝ、つゆけがれなき汝の身でそ、羨ましけれ……ふとかへりみれば、日はいつしかかくろひて、天つ女神おがりなしゝ薄絹のそれにも似たる夕霧は、靜かに〳〵野を蔽ひつゝありき。

（雨評）これも、特に難ずべきところなし。また、特に稱すべきふしもなし。

## ○雛祭の記

德島　貞月

いつしかと上巳迎へて、文机の前に生けたる桃の花ながめたる姿は、夢の樣なり。都の姉君にはさてこそ此方

をなつかしみおはすらめ、いざ一言をと墨すりながす折しも、竹緣の上足音高く、やがて障子の影よりあらはれしは綾子、早くも晴衣着たり。見ればをかしや、日頃髫々とせがみし頭に、今朝は、小さう愛らしう髮結べり。うれしくてとさゝやけば、もるゝ喜の目を彼方にそむけつ。母君はと問へば、雛樣の前にといふに、いざ姿もと丸き手とりて、笑ひさゝめきつゝ行けば、供物あそばせり。終り給ふまて、あや子もつぶやかで、見つめたり。しばらくして、母君、うしろ見たまひ、花をと仰せぬ。あゝさなりきと、わらは立てば、あや子行かんと、走り行く後姿の愛らしう亦美はしきに、今更ながらほゝゑまれて、庭下駄はきしめ追ひ行けば、いつしか其木の下につきけり。さてとらばやと見あぐるに、いかていかで、枝高くしてとゞかず、何をか木もがなと、ほとりさまよふほど、彼方に父君の御聲して、來給ふを見れば、あや子は、はやくその御膝にすがれり。

笑みつゝ迎ふれば、とりてんと、かるがると木によぢ給ひ、やがて上より一枝三枝。わらはが花おとさじとつとむるに、足もとには、あや子、蕾拾ふにいそがはしげなり。花の枝胸にかゝへて、父君これにてよからんとさゝげつゝ歸れば、母樣いと美はしく、活け給へり。その御手のとゞまるを見て、これをあやにと一枝ひたすらにのぞむに、さらばとあたふれば、小枝おりて頭にかさしぬ。母君おもはす失笑したまひて、あやは今日雛樣にあやかりき。

旭影をば御酒にさしたる桃が香にこめて、朝餉食するまとゐに、今一入の笑と美はしさとをそへたるは、あや子の姿にして、父君の御手はたゑずその愛らしき小肩にあり。母君の御目は常に其赤き唇に、そゝがれて今日は實の雛樣のさかえ、この雛君にうつりけり。あゝ、いでさらば、とくこのありさま書きのべて、都の姉君よろこばしまゐらせん。

（雨評）先づ整ひたりと申すべきか

### ○雄蝶、雌蝶

徳島市　久保串子

見渡す限り下界は模糊として白く、習々と吹く春風は、時に淸き香りを送るのであつた。われ等兩人は今、春の神より、美しき羽衣を給はりて、この住みなれし五層の樓閣を辭して、下界に降らんとするのである。はや紫の雲はおばしま近く待つて居る、われ等は、この雲に乘つて、春風の吹き送るがままに降り初めた、其愉快さは何に譬へん樣もなく、次第に下界に近づくのである。はや中程になつた、元の住居を見上ぐると、今まで金色の雲の上に築かれてあつた五層の樓閣は、只白う朧に霞み渡つて、おばしま近く出てまして、われ等を見送りし淸けき懐しき人の美しの姿は見えず、只出立を歎ふ樂の調は、いと幽に漏れ聞ゆるのである。今此樂を聞いては、何となく住み馴れし宮を慕うたのであつた。一人は斯う云ふた、妾は下界の何の上に降らうか、梅の花の降らうか菊の花の上に降らうか、薔薇の花の上に降らうか、淸けき小石に降らうか、少女の頭の「リボン」の上に降らうかと。

他の壹人は斯う云ふた、妾は何の爲めに下界に降るのです、わが欲を滿さん爲めに下るのでないでせう、垂乳根の母の神は、如何に我等に教訓られたのです、下界に降りて、浮き世の人に希望慰籍を與ふべく、羽衣まで與へられたのでせうと、懇懃に說き敎へた。

常にやさしき春風は、次第に吹き降した、下界に近づくに至つて、だん／＼靜になつた。野はさながら毛氈を敷つめた樣で、菜の花や黄、紫雲英や赤、薑花や紫、梅や桃や梨や櫻の花は、白くかすみの樣である。春風は、遂にわれ等を、下界の菫の花の下に送り付けた。そして、春風は全く消えて、あたり長閑である。

われ等は、しばし悵然として居たが、靜に母上の御敎を胸の中にくりかへした。時に空は朧に霞んで、何處となくかりがれの聲、懸しい都近く行くのであらう。

ふと若き男女は、菫を摘みつゝ、何か話しつゝあつたが、われ等の降るのを見て、口の內かすかに、『蝶々蝶々』と合唱して、あゝ中のよき雄蝶雌蝶とほめた。

## ○秋の夕まぐれ

神戶市　神山園子

うす寒の秋の夕暮れなりき、何となう心みだれて堪へがたきに、宿を出て、野邊さ迷ひぬ、

華やかなる夕日の影は、既に亰松の梢の下になりて、餘光は遠く兩山の間を流れ行く、谷川の殘流！閃々たり、紅葉したる山寺の公孫樹の葉、黄金色に葉を光らせ、そよ吹く凉風に、パット舞ひ散る上には、風情ある哉、夕烏の一むれ！

農夫は急ぎ足にて、家路につきて、次第／＼に、さちの川邊より、淡靄にとぢ込められたり。四方、鎭守の森の傍にて、淡き烟の如き影の五ツ六ツ、歌唱ひながら四方に散るは、里の子供か。北を流るゝ小川の土橋を、馬に何やらん負はせ、實くゆらしつゝ來る翁、宛然薄靄給それの如くかすかなり。

暫くにして、大きく圓き月は、恰も熱したるほゝづきの如く紅う美くしう粧ひて、東空に現はれ、惜しげもなく、その淸き光を下界になげかけ。

草むらがくれに、鈴虫蟋蟀などのすだく音の外には、耳にするものもなくいと靜かにして、あるものは、皎々として一點の汚塵なき明月と、闇黑の俗界を離脫したるわれとのみ。

❋❋❋❋❋❋❋❋❋❋❋❋❋❋

折から、如何なる雅び男の吟むなるらん、遙かの松原にて、嚠々たる笛の音聞ゆ愛らしきその音、盤上を走る黃金の玉の響か、岩間にむせぶ淸水の聲か、怨むが如く、訴ふるが如く、痛むが如く、慕ふるが如く、幽ろに有情の佳人を泣かせんとするに似たり。

吾は步を止め、悄然として聞き惚れしが、俄然！高强なる一聲響きて、笛の音は絕えたり。われは、此時、懷中の寶玉を奪ひ去られし心地して、茫然として聲せし方を眺むれば、水色の薄絹張りたらんやうなるみ空に、心ありげに月影のみぞ、冴え渡れる、

あゝ、人の子の吹き吟む笛の音さへ、かく心の淸く澄み行くものを、ましてや、煩惱のけがれなく、迷をはなれし佛の淨土の神の天國にて、眞如の月をもてあそび、微妙の音樂きかむには、あゝ、いかにたのしきものならんよ！

## ○靜かなる夜

神奈川縣　すみれ女

その一

日は落ちぬ。

向ひの山、をちの森より立ち昇る靄は、ゆう／＼天を蔽はんとし、四に分かれ、東に流れ、鎭守の森は麥の間に眞白に彩られぬ。

田の面、はやくも靄に包まれつ。草刈の乙女。塒求むる小鳥、今は全く神の眞白き御手に抱かれたるなり。かくて、霞の香四邊に滿ち、賤が女の飯炊く音錯しうなりぬ。

その二

箱根八里は馬でも越すが……………
　　越すに越されぬ大井川――――。

昔ながらの馬子の歌、村の若者が自慢の喉なるべし、節おもしろう、夕の靄を傳ふて、高く低く臥く、四方にひろがりて……………餘音嫋々！

葉末を傳う白露の一滴、ほろりと溢れぬ。

あはれ靜けき夕ならずや。

その三

夜風一陣！

霞の衣また〻く中に消え失せ、月なきみ空の星影あやしきまでに冴え渡り、天籟寂として聲なく、折々は夜守る犬の微かに吠ゆるこゑするのみ。向ひの河邊、木間隠れ力なく光る燈は、あはれ渡守りする翁の假りの住居なるか、さても、危き燈の運命なる哉。

その四

あゝ、さても、今宵の靜かなる事よ。

小窓おし開らけば、月は早や神明の森高く昇りて、溶々として流るゝ清光は、賤が茅屋の影長う地上に彩りぬ、園生に茂る竹の葉サラ〳〵と動き、美妙の音ゆうゆう四邊を操はしつ。かくて、月光の冴ゆるにつれ、燈の影次第に薄うなり行きぬ。

## ○平康頼の傳を讀みて　上毛　金仙女史

榮枯盛衰生者必滅の理は、獨り沙羅双樹の花の色にのみ見ゆるのみかは、はた祇園精舍の鐘の音にのみ聞くものかは、つゆふかき晩秋の野に、あはれ惝然と立つなる案山子のやれ笠に、おきそふつゆの白玉さへ、拂はん人の手はなくとも、やかては朝日に消え行くものを、そかひぬの間のいともながう思はれて、はては無下にふりはらふなど、こも亦人の情なれや。

奢る平氏のたゞ惜うして、そが滅ぶる據だに今は待れず、とある夕、鹿山の莊に非謀をめぐらされしこそ、やがて身が浮沈の種なりしか。

八重の鹽路の程遠き、はなれ小嶋に流されては、聞きなれぬ涙の音、木の葉の叫びに、夜もつゆまどろまれず、想は遠く故山に走せつ、嵐山の秋に紅葉をめて、吉野の春に花を見てしも、さめては同じ鳴の孤客、沖を渡る大船に、ひとり想をこがしつゝも、うしや二とせの春は來ぬ。身は思ひもふけぬ大赦にあひて、戀しき花の都にかへりぬれど、三日見ぬまの櫻花の、あらしに散りし世の變轉、やぶれし軒には猶も苔むして今は月さへもれず。

ふる里の軒の板間にこけむして、
　おもひしほどももらぬ月かな。

と口ずさびつ、そのまゝそこに籠居して、再び世にはいでず、花のあした、月のゆふべ、うかりし昔思ひいでゝは、寶物集と云ふ物語をかゝれぬとか、げに又なくあはれふかしや。

## ○女子の生業　鎌倉　加藤めくむ

安房上總の境なる山など、險崖の小徑を、女の身もて、克く石材の運搬をなすを見たり。その往きには、あやしげなる地車を背負ひて、五步に憩ひ、十步に息ひつゝ上るを、既に荷を積みて下りに向へば、重き車は走り過ぎて、なかなかに止むべくもあらず。もし一度梶をあやまちなば、其の身は、車と共に、谷底に、くだくるなるべし。

又、外房州の海邊にて、藻草とる海人は、朝夕冷たき彌生の頃も、あさまだきより、海底にもぐり入り、藻どもかき集めては浮び出て、そをあたりの砂場に持ち運び、休もせて、又海中に飛び入るなど、そのありさま、實に驚くに堪へたり。

世の習とは言へ、かかるすぎはひせる態を見て、誰か哀と思はざるべき。然れども彼等はなほ笑うて、之に從ひ、敢て其勞苦を訴へざるなり。

## ○のぞみの海　名古屋市　岩瀨波子

（一）

妾は、いま恍惚として、朝霧深きこの詩趣に富みし知多の海邊に佇立みぬ。

二十日に餘る利鎌の如き月は、その淡き光を海の面へと浴ひせ、芦間に宿る白き雲は、玲瓏として玉の如く、世はいまだ寂として、み空の朔雲は奇しくほの闇く、睡みの内みな黒み勝なり。おらはゝこの面白き汀を逍遙せはいやと、松原傳ひに、ふめばくづるゝ白砂の上を、もすそあはに辿り行けば、打ちては延す男波女波に危ふく足を掬はれんとするも、また面白し。

（二）

遙かに、あを〳〵とすみ渡りたる海原に、薄黑色して浮べる黑き山は、希望を孕みつゝゆく白帆の船と合して、一幅の趣味あるスケッチなり。あゝ、世に迷へる人よ、來たりてこゝにはせ、迷ひは闇なり、夢なり、彼の曉の神の光は闇なる汝に、ある悟りを開かしむるに。あゝ飄零落魄の人よ、來たりてこゝに憩へ、憂悶のやる瀨なき胸に、多大なる慰藉を與ふるに。

（三）

やがて冷かき曉の風は、わらはが、面を吹いて、夜の幕は次第に掲げ渡

れり。

げに曙の神は、望ある光を放ち給ひて、白帆を彩り、海を彩りて、譬へば、荒れに荒れたる怒濤の中より、眞珠の玉の跳り出たらんが如く、え知らぬ想ひにかきみだれて、知らず識らず清き涙の双の瞼に溢れき。

（四）

日は燦然として、水平線上に出てゝ、夜の衣は全く明けはなれぬ。深渺たる滄海は、さながら黄金の波を浮べたるが如く、磷々として磯へ打ちよする漣は、芦間につなぐ漁舟を打ち、岩を打ち、轄ッと波紋を畫きては、幾筋の金線を汀に描きぬ。

## ○かるた遊び

名古屋　永田加須尾

指をり數ふれば、學びの園生を出てしより、はや、二年の春秋をぞ過しぬる。かたみに心ゆるして、語らひぬる友、數あるが、今は昔のまゝなるは少くて、内には幼き者、もち給ふもあり。皆遠からず、住みなし給へど、日頃は、うと〳〵しくのみ打ち過ぐるを、口惜しう、思ひつゝげけるが、又なき、能きをりなれば、こん新年の初月を期して、骨牌會催し、かつは、昔を忍びてんと、おもほえては、しばしも止まるべうあらずかし。たらちねの君に、このよし聞えて、みゆるしを得たれば、いまは心のよろこび、たとへん物なし。友には文して、野中の清水には及ぶまじけれどまた、我心の有る處を汲み給ひて、あすの夜は、是非によ、など、云ひ入る程に、やがて、時をも違へて、つとひ給ひぬ。山田の君を初め、五たりになん。

げに、我が淺き心を、深くも汲み取りたまひしよ、と、思へば、嬉しさに、手の舞ひ足のふむ處を知らず。心のかぎりもてなしても、いまだあかぬ心地ぞする。はらからも、及びなき、友垣の、へだてとてはあられば、何事も面白う打ち興ずる折しも、母上の「たのしげにもおはするかな、今は老の身をも忘れて、いてきはべりぬ」とて、いとゑましげに立ちいて給へば、皆よろこびて、まとゐに入り給へなど、せちにそしのかしまつれば、さらば、目もいたくうとければ、よむ人とやなりはべらんとて、心よく、うべなひ給ひつる、いとうれし。あがれる世のすま、明石の戰にはあられど、赤白に組など分ちてきそふ。母上のよみいて給ふことに、我れ劣らじとひしめく。うちにはさあらぬをとりて、ほこりかに示しありき、かくてやう〳〵き付きたる、さては、もはやこと人の手にあるをも知らで、いづこ〳〵など、たづぬるなど、いみじうをかしきに、皆え堪へて笑ふ。

かくて、時立つに從ひて、いよ〳〵興のみぞます。實に、今宵はたのしといふより、又、ほかに思ひもなし。

やがて、兵糧まゐらんとて、ちりどもはらはんと、すれば、あはれ、そこにも、こゝにも、手負し骨牌のいたましさよ。いかにはげしき、戰なりしよと、打ちわらへば、手負はそこのみならぬよとて、だす友の手を見れば、うたてや、赤きものさへ、いでたるを。

今はいたく、更けぬれば、いとま少き御身たちを、さまでは、止めがたければ、惜しき袂を分ちぬ。あはれ、今宵の如き、たのしさは、過ぎこしかた、行末にも、またとはあらじなど思ひければ、後の思ひ出草にもと、一筆かきつけぬ。

## ○曉の富士

茨城縣　西野春女

緑こまやかなる小松ばらの、目もはるに打ちつらなりたる彼方、うすむらさきの霞の、あかつきの風にきえて、いとよく晴れて、うらゝかなる天きはに、ふと富士のたかねをみとめぬ。

碧紗のごときおほそらを後景として、たゝ白きこと白皚にもにたらむすがた、巍然としてうるはしく、大そらたかくそゝりたてるさまの、げに崇高なるかな。

眩ゆくばかりに、旭はのぼりぬ。黄金いろのひかりは、朗らかに萬象をおほひて、そが純白のはだへは、倏ちばらいろに匂ひいでつ、山はさながら笑めるが如し。

かくて花もなき冬のあめつちにも、あたゝかき情うごきかぎりなき平和みちぬ。泉のひゞき、雲のいろ、さらにのどかなるを覺ゆるも、ゆかしや。

妾は人もなき野ばらにたゝずみて、とほくなつかしき富士のねにむかひ、しばしはたゞおーとばかり、きよき神采にうき世の煩雜をわすれたりぬ。

## ○櫻の一枝

豐後　上　隆　子

オヤツ一夜のうちにお庭の山櫻が咲いた。噫一年の昔である。去年の春の暖かい長閑な日であつた、丁度閉塞隊の旅順口封鎖の行はれて、軍神とまで呼はれし彼の廣瀬中佐が、あつぱれな最期を遂げられたといふ、號外を片手に、兄さんが、「美代さん、美代さん」と、妾の名を呼んで「これを見なさい、同じ軍人ても、こんなに、勳功をたてた人があるのに、僕にはどうして召集が來ぬだろう。若し僕が出征したら、兄さんと二人分の御孝行をなされればならぬよ」といはれるので「妾必ず御兩親へは仕へますわ。召集も今に參りませう。兄さんは家の事は思はず、お國のために御盡しなさい」といつたところに、お母さんが忙しく、兄君をお呼びになるので、妾も從て行たら、兄さんへ赤紙をお渡しになつた。勿論召集状て、兄さんは萬歳といはれた。

翌晩は、親族知已近隣の人々が、盛なる送別會を、妾の家て開かれた。なか〳〵賑やかにすぎて、御客も半ば以上歸られた頃、春の夜の朧朧月が、お庭を照して向の川岸に燈火の影二ッ三ッ、遠山の峰のうすうかすみて誠に得も云はぬ景色なので、庭下駄を足にして、いづれば櫻花の香床しう築山の傍まで行たら、松の根に兄さんが腰かけて居られて、「美代さん、好い眺めだねー、僕も再び完全な躰ては歸らぬ、多分骨になつて歸るのだ。勉強して立派な淑女とならればいけないよ。」「ハイ」と答へて、兄さんと手を取て、これがお別れと思て散歩した。心あるにやなきにや、櫻の花がヒラ〳〵顏に散りかゝつて、無限の感に打たれた。兄さんはお口の中で、「敷島の大和心を人とはゞ」と謠て居られた。

明くる朝またき、萬歳聲裡の中を、勇ましく御出發なさる其時、「敷島の櫻の花と武夫は、散りにし後のなこそたかけれ」とまづい歌を、櫻の一枝に結びつけて、差上げしに、大層お喜びなされて「美代さん來年まで武運強く生きて居たなら、お前の美しい手紙の中へ、此花を封じこめて送てくれ」といふ言葉を、名殘に御出發なされた。

されど、兄さんは、其後桃も櫻も散てしまつた頃、即ち、南山の激戰て、戰場の花と散て、櫻の跡を追ておしまひになつた。噫、月日は廻り廻て、今年の春となり、櫻の花は奇麗に咲いたけれども、送るべき兄さんは、此世には居られぬので、去年手折た傍の枝を一枝折て、佛壇の兄さんのお寫眞と、まだ新らしい「おゐはい」の前にそなへた、噫。

## ○春來草紙

南多摩　小島はま子

（一）

小野の峠の葉茶屋の娘、今年十六、身飾らず。高嶺吹き荒ぶ寒風に、身をば曝らすも心は破れず、雉子追ひて、山奔け廻る都下りの獵人迎へて、老母大事と目送り行く。

（二）

萬松寺が寺男、日頃頗ぶる勤勉、主に仕へて朴直。終日の勞を僅に浴みて洗ひ去り、一瓶の酒に悦を盡くして妻と語り、和氣靄々の中に疲れ去る、日々然り、愛すべし。

（三）

金井か里の御伽爺、孫を抱きて唯泣くのみ、人ありて其由聞けば、旅順にて子失ひたりと。生みの子の凱旋夢みし曉寒く、皇御國の爲とは云へ、討死の報は傳はれど、屍たにも見ること能はず、思ひは徒に異地に馳せて、さこそ身も狂せんばかりと、思ひやられて、殊に哀れ深し。

## ○幸なき我が家

丹波國　波多野繁子

廣き此の世に、我家ほど幸なきはあるまじ。住みなれし戀しき故國を、後に見て、沖に漂ふ捨小舟の、流れ流れて、此の片山里に來たりしは、今を去る二十年の昔なりしとや。其の移り變りの艱難苦勞を、物語りに父君より聞くも、少さき胸に堪へ兼れて、涙に袖を絞るの度々なるよ。月日は流るる水の如く、滔々として止まず、二十三の春を迎へられし姉君は、花の都に良緣ありて、嫁ぎ給ひ、愛らしの幼な兒をさへ設けられ鴛鴦の中、睦まじく、人の見る日も、喜しかりけるに、ふとせしより、良人の、よしなき巷に狂ひ初められたれば、斯くては行末の案ぜらるるに、遂に離緣を申し込み、歸り給ひぬ。それより、姉君は血の道てふ病に魔魅られつ、日に日に瘠せ衰へ、骨は露はれ肉は落ち、起居も今は、不自由となりて、去年の秋、壁に來て鳴く蟋蟀の聲細り行きて時雨る夕べなりし、遂に恨みを呑むて、永く眠り給へり。殘孫の幼な子の、母を慕ひて泣き叫けぶ。ああ、げに、涙の種。斯くて、一家は、亡き姉を思ひ出に、泣きては明し、涙に暮し年立ちか

はりて、やがて二月の梅笑ふ頃となりぬ風邪の心地惡しとて、床に就き給へるが始めにて、重り行く、病氣、日頃健かなる母君のことなれば、直ぐ心快く成り玉はんと、醫師よ藥よと、介抱に餘念なかりき。さるにあゝ、無情なる哉、母君は、死の神に導びかれて、遠き死出の旅路に逝き給へり。

あゝ斷腸の涙に咽ばずして、これを。

何れ浮世は果敢なきものと、知りながら、餘りと云へば餘りのことに、斯くては前途の恐ろしく、父君と共に泣く夜な夜な、圓かに夢を結びし事のあらじ、

あゝ、運命の神は如何なれば、斯く迄、我が家を逆境に苦ましめ給ふか。

## ○春の夢

遠江　大石よし子

◎

庭の櫻に夕雨やみぬ。嬉しきは紫の星、花の露、桁の雫、さら〳〵拂ふ花の風、おばしまにしらぶる、妹が春雨の曲！。

◎

岩の雫か花苔の露か一滴二滴。それがうれしき筧の水、吾が朝な朝な白き手に掬ふ淸き水、美しき水、春の水。

◎

椿一輪、胡蝶の夢のせて流れゆく裏のさゝ川、柳の影にすみれの花と、もの言ふ小女一人、詩人は丘の上に微笑みぬ。

◎

詩集ふところに里を横ぎりぬ。あたゝかき春の風吹く花小道、吾歌に醉ひたり、今來し方は何處あはれ霞は四方をつゝみて……。

◎

花の下かげに泣く若き妻、冷たき石を放れて起ちぬ、空には紫の雲流れて、花間に光る白星のうすき光りを瞳に宿す哀れさよ。

香の烟は足もとに白く、花の露に香り……。

◎

月おぼろなる山小徑、ゆくは京の歌法師の影、墨の衣にあみの笠、はら〳〵と散る山櫻、法師は只それに無言。

◎

泉水のほとり花椿散る、女の子二人、赤き毛糸にさせる花束五つ、やがて眠りぬ子等夢に、ミューズ神ゐますエデンの園に遊ぶらむか？。

## ○わが家

越後　高橋むら子

日頃好ませ給ふわざといへ、今日も亦父君は朝まだきより、魚釣にと出てましぬ。春とは名のみにて、谷間の氷解け初めてより、一入身に沁む信濃河原の夕風、嘸や堪へがたくやおはすらんと、針持つ御手、急にとゞめ給ひて、母君の、もはやたそがゝるに間もなきに、物縫ふ業は之にてやめ、御歸りの程をこそ待ためと仰せて、急ぎ埋火の炭かき起し、父君の御酒下し給ふ料にもと、常より好み給へる湯豆腐暖め、獲物炙るべく串の用意して待つまほどなく、なつかしき釣竿の音戞々として、父君の今歸りぬとて、いと重げの獲物の籠下し給ひし時の嬉しさよ。急ぎ妾は御足濯ぎまゐらせ、綿厚き布子着更へさせまつるをまちて、母君のいそ〳〵と青き炎と燃る七輪に、雪かとまがふ湯豆腐グツ〳〵と煮て、酒の御かんも出來はべり、いざ御一つ過し給へて、今日の寒さに、ひねもす河風に吹かれし御身うちの冷えを忘れ給へと、なぐさめ給へば、さらでだに藹々と肥えふとりたる父君の、常にもましてみけしきうるはしう、醉の廻るまゝ、御聲さへいと高く、今日ありつることゞも、面白をかしく語り出て給ふ。そが中に、手なきの釣竿置き忘れしとて、二町あまりある人氣なき底沼のあたりに來かゝりしに、さわ〳〵と從の葉渡る夕風につれ、キヽと鳴く怪しき音に、キツト聲をしるべにすかしみれば、こは如何に、小犬の如き大川獺の、何に驚きてか、父君目がけてあはや飛びかゝらんけはひに、心得たりと、昔學びし武藝の心得、ひらりと身をかはし、護身用の鉞鎌、ハッシとばかり打ちつけゝれば、水音高く白波と消え失せし事など、或は一尺六寸餘の大鯉に、釣針取られて、すんでに河に落ちむとせしこと、或は獲物の多くて樂しかりし事など、餘念もなく話し給ふを聞きながら、妾は嬉かひ〳〵しく、星にもまがふ光して溌剌したるうろくづのこけら引き、腸を取り、數をかぞへ、竹の串に貫き、中にはすぐれて、大きやかなるは、尺もて一々何尺何寸と聞えあぐれば、父君の盃持ち給ふ御手の打ち震ふばかりに喜び給ふ御顏の、ランプの光に照りそひて、いよ〳〵赤くはなやかに見へ給うて、爰暫し人の世の富も憂も打ち忘れし親子三人の樂しきまとゐに、障子の破れ目よりもるゝ月影の今宵ばかりは何となく、尊き神の福音に接しまつりしが如き心地しけるこそ、げに暖く樂しきわが家なりけれ。



# 抒情文

## 塩井雨江先生選

### 人

## ○秋海棠

麴町區山元町三丁目一番地 高橋つる子

鄙より一

夕べ秋の野に我れ立ちぬ。自然の風光に晴れやらぬ胸の煩悶を慰めんとてなり。見渡せば、一樹の楓林、風なきにひら〳〵と散つて、苔の細道、萩か、あらず、蓬か、あらず、可憐の花のうね〳〵、清けき月の光をうけて、紅葉し初めて、色殊に美はしう候。京なるは如何に。不忍池畔、蓮の落葉の聲を聞いて、共に歌語りに更くる夜はなきや。さても、都よりの便り聞かまほしう存じ候。

都より一

なつかしの御言葉かな。かくては、いにし秋海棠の露、永久に忘れがたく候。京も今は秋、のこりなく闌けて、東叡山の鐘漸く音も寂寥に、赤蜻蛉二ッ三ッ、花を掠めて飛ぶが見えて候。さも申さば、南の小窓に机に倚りて、君が御うつしゑ、日毎に眺めて、想ひに耽くる人あるを知りたまひてんや。西の空、紫の雲懸りて候。

鄙より二

月待つ蟲の哀れに戀に鳴く夜にて候、小窓開けて、庭面眺めやれば、雨戸に近き碧桐の枯葉、風にかさ〳〵と音して、簷に添ひし芭蕉葉、やさしくも、露の惠みをうけて、清光に玉動いて候、あら心よき夜にもあるかな。せめてはこの月、この景、君に見せまほしく候。風また一わたり、木犀の花の香送り來て、鼻を撲ちて候。定めし月の中より薫るにや候はむ。

都より二

小田卷草の葉蔭れに、こほろぎ寂しう鳴いて、雨細々と降る夕にて候。君江の君と圓居して、遠く故郷を偲びてありし昔の秋の野邊。露の情のかず〳〵、共に語りて泣いて候。あはれ、人まつ蟲もやがて鳴かんに、とく來ませずや、君。三人ひねもす團欒して、月にあかさんは、如何に、戀に泣かんは如何に、今より芙蓉の露に臙脂ときて、雁の音信を待つに候。池の水鳥、何にやらあわたゞしく羽ばたきして候。

鄙より三

さては、京も白露の朝夕を、虫秋譜をかなで候とや。懐かしとは鄙も京に劣るべしや。一葉一葉に蓮の影見えて、夢おどろかす水鳥の、よしや寂しくとも、二人手に手をとつて、落葉にゆく秋の譜をあはれみ、夜毎〳〵に不忍池畔に歌語りしたまはむこそ、なか〳〵に興深からんと羨しく存じ候。山なる柿の木枝もたわゝに、鈴なりの實、いと紅う色づきて候。

都より三

今宵月いと冴えて候。あはれ、この月、幾夜かの雨にさへぎられて、無情なくも相見ざりし戀しの姿、優しの姿、思へば思ひ出ふかき夜にもあるかな。花野の露に袂ぬらせし三人、別離の悲しさに泣きてしその面影を寂しう笑みて照らし〳〵、おゝ、その月よ、奇しくも今宵の姿に似て候。されど〳〵、いにし昔しは、未だ眉若かりし。今、影痩せ老いたらんやうにて、怨めしく候。



鄙より四

庭なる秋海棠、いろなき風にさいなまれて、一葉づゝ池の水面に散りてこぼれて、色いたく褪せて候。日頃あたゝき涙濺ぎけんに、また何ゆゑ、斯くしをれ果てつるとは、我が泪、愛でんには、尙ほ足らざりしか。これも卿等がかくるに由なき情、うくるに由なき心の、遠き地に在ましし故からにて候。はてしなき思ひにふけて、なつかしの念やみなく、糸萩の夜半の露、ほろ〳〵と花もろとも零るゝを見てあれば、十三夜の月は雲にかくれて候。さらば〳〵。鄙よりの便り。これを最後に、近く京に入るべく候。

（雨野）意匠一寸おもしろく、文才見えて候。

秀逸

○斷腸

神奈川縣 小野雪枝女史

寂しさに門にたち出て眺むるに、世はうき秋にはあら

ねども、思ひある身の、眼にうつるものは、皆何かは哀れならざらん。そもや、霞はたが爲めに棚引く色ぞ。鳥は誰がために鳴く聲ぞ。入相の鐘にさそはれて、二ひら三片交野の雪と散る花を見ては、法師ならねど、やがて色即是空のことわりは觀ぜられ、里の子の口ずさみに吹く芝笛の音につれておぼろにいづる月を望みては、そゞろに盛者必衰のあはれを催す。まして、尾花の床なれて、蟲聲庭に滿ち、ましら三聲巴峽に叫びて、人目も草も枯れはつる頃ならましかば、また如何に我が膓を斷つべき……。

『あはれ、いかなればかくばかり汝は此の世を悲觀するぞ、獨斷膓の思ひに沈むぞ』。と問ふ人あらば、妾は言葉はなくて、たゞ我家の佛壇の上なる、新らしき位牌を指して、うち泣かんのみ。あはれ、此の新らしき位牌こそ、天にも地にもかへがたかりし我が母上の今の姿なりけれ。

思へば、妾が身程世にさらなきものはあらじかし。祖父母はなきが上に、父には五ッの時に別れしなれば、御顔だにしかとえ覺えざる身の、たゞこの母上の柔かく溫かき御手一つにさゝへられ、この一もとの蔭にかくれて、かつ〳〵十七の長の春秋を、思ひのまゝに人となりける其程の御いつくしみは、いかばかりぞや。あゝ、母上は、去年の暮より、御氣色何となくすぐれさせざりしが、こは例の持病なれば、春立ち歸らばおこたりやせんといはれしが、春を迎へ、やがて梅咲く頃にもなりぬれど、おこたり給はざるのみか、藥石の効もなくて、次第に重くなりまさり行ければ、遂には自ら起たざることをや知り給ひけん、一日妾をば側近く呼び寄せ、妾が手をしかと握り給ひて、蟲より細きお聲音もあはれに、家のこと妾が行末のことども、こま〳〵とのたまひ、はては、そなたの立身出世を見ずに死ぬるは、いかにものこり惜しけれど、これも定命なれば是非もなしなどのたまふを、妾は打ち消して、さる心弱き事のたまふは、やまひの爲に惡しかり。いまひと月經なば、必ずおこたり給はんになど、口には云へりしまのゝ、旦夕をはかるべからずとは、十指のさす所、頰落ち肉あをざめて、いとど憔悴したまへる御姿は、われならぬ人の見てだに、誰かははらわたを斷たざらん、かくて、四日を經しあかつき方にいたりて、人々の嘆きかなしむをもかへり見給はず、逝く水しばしもよどみなくて、父のあとをば追ひ給ひぬ、折しもあるべきに、殘むの曉月、山の端に影をあをざめて、さながら有し母上のかほばせの如く、風なきに庭の椿の落つるを聞きぬ。あはれ悲しの夜景色や。われはすべて夢心地のうちに、野邊おくりなどしはてしが、さて、家の中の何となく廣く物足らぬ心地のせられて、

いと堪へがたきに、ほとゝぎすの鳴く頃にもならましかば、またいかに血を吐くおもひやするなど、たどらるゝ折りしもあれ、友におくれしかりがねの、聲もあはれに、唯一羽。何處の空に迷ひ行くらんと思ひやらるゝに、命もつれなくさへ思はれぬ。

（雨評）文はよく整ひたり。されど、新しく取りたてていふべきふしなきををしむ。

## ○月の宮居

澎湖島　山門若葉

我舊友花子の君は、今の境遇の羞かしくてや、樣々と慰め止なるをも聞かで、何處ともなく立ち出で玉ひぬ。『アヽ友よ花子さんよ』と、暫し窓を開けて叫びたれども、雪か霞か、更に其影は見えざりき。我れは病後の身の、何とせん術もなし、只茫然と眺めやるのみ。『三日見ぬ間の櫻哉』とは、そも何人が云ひ初めし。思へば、三とせの其の昔し、仝じ音樂學校の生徒として、互に勵みつ勵まされつ、雙影相携へて、月の校庭を逍遙したることも、幾度か。或夜、我月に對して「月の宮居」の譜を謠ひけるに、花子さんは、得意の手風琴に合奏せられつ、或は高く或は低く、春の小川のゆる〳〵と花片を流るが如し、流れては淀み、淀みては流れ、盡きんとしては盡きず、絕えんとしては絕えず。春の深山の鶯か、秋の野に啼く妻戀ふ鹿か、又朗々又喨々……。夫れも昔し……。此の廣き世界に、無上の友としては、此の花子さんよりはなきものを。今が今迠、賤しき乞丐の境遇とは、如何に斷腸の事なるぞや。春の夜の夢、晨の露、飛鳥川の流れ定かならずとは云へ、可愛なつかしき花子の君は、飛んだ若氣の誤か、愛とか戀とかに引かされて、名譽も地位も打ち忘れ、忌はしき俳優等と家出せられしとか、今は夫れさへ打ち捨てゝ、寄るべ渚の捨小舟、便る身もなき哀れの境遇。そも〳〵、今宵は何處の軒端、如何なる處に宿り玉ひてぞ、定めて辛からん苦しからん。情に薄き世の人の、いかで憐みくるゝものぞ。一そ。無理にも引き留めて、我家に宿せざりしは、妾の不埒とは云ひながら、今の樣を果敢みて、顏をもよく〳〵得上げ玉はず、襟元のいたく赤かりしは定めて心苦しかりしならん。却つて止めざりしがよかりしかと、思ひは千々に亂れつ、さても、年を積み日を重ね、練り〳〵し至妙の音樂が、哀れなる身の糊口を過す料となりつるか。あの頃裝ひ玉ひし綿繡が、見苦しき襤褸となり變りしか。運命の神は、何處迠も此の逆境に迷ひし少女を助け玉はざるか、吁。

熱き淚は我襟を傳ひぬ。憂き餘つて、窓を押せば、一輪の春月、山の端にほのめきて、又もや學校の昔を繰り返さしむ。アヽ斷腸、妾は飽く迠も君を救はむ。

（雨評）情はきこえたれど、筆未だ洗煉を欠くものあり。

## ○いざ、さらば。

和歌山市　小池薬子

あゝ、お日樣も傾きなされた。もう此村を去らねばならぬのか。離れともない。離れともないと、何程泣いても、哀しむでも、去郷の時刻は、刻一刻と迫まつて參るではござゐませぬか、哀しや、妾の胸は妙に迫まつて參ります。

『まよはしやんすな、旅の人。末は鴉の泣き別れョ――』

渡守の作さんだろう、何故に今日に限つてあんな歌を歌うて、妾を悲しましめるでしやう。少しは思つて呉れてもいゝに。それのみではない。川の流れも淋しく、ちよろ〳〵〳〵よどみ、その藪かげに巢くふた小鳥共も、淋びれ切つた聲で鳴いて居ります。何事も皆哀しげに。慕しい、懷しい慈母とも思うて居りまして、一生を此の里て送ろうと思ひました望みも空しく、妾は今此の村を去らねばなりませぬ。

あゝ、汝學文路の村よ。お前は、お前の懷ろに生いたつた妾に、その胸奥の悲哀を汲むで呉れる情はないのですか。妾は今恰度、颶風が天空に捲き上つては、荒凉たる眼界を常闇にでもしようと云ふ、恐ろしい光景裡に彷徨はんとして居るのでございます。

日も暮れるのか、お日樣は紅う沈みかけていらつしやる、あゝと妾しは思ひ出多い楓樹の白い幹を撫でゝ、失望の溜息を吐きました。

西の空！あゝ、そこは妾の指して行く方ではありませぬか。そこに、お日樣が黄金の樣な榮光を放つて、妾が行く先を祝福して下さる。何卒神樣、妾の前途を守つて下さいと、覺束ない願望を抱いては、行きつ、戻りつ、最後の視線を投げんとしては、行く先の闇黑に身慄ひして、顧みては涙を抑へ、泣いては顧みつゝ。あゝ、其の最後の悲哀は諸士諸姉、あゝ、如何ばかりと思し召す。

（雨評）意匠はおもしろきものあり。筆も前半はおもしろし。されど、後半筆の力のにぶりたるを惜しむ。

## ○日誌の一節

三河國　都筑靜子

野に山に花は咲きぬ、鶯はなきぬ、垂れこめて春うき身も、人にすゝめられて、けふ一日のすゞろありき。何事ぞ、一里に足らぬ途も、歸るさは稍疲れて、並木原の切株に腰かけつゝ、たゞつら〳〵と夕の景色に見とれたり。

夕の雲遠くして、村の白壁も小さく、霞のおくになりゆくを眺めては、轉た今のわが身の、病ともなくて、たゞなやましき想ひ到らざるを得ず。

入相の鐘の音は、寂げに靜なる大氣を震はせて、遠く遠くこゝに響き來ぬ。そは、かの菜の花の奥なる野

寺よりならん。あゝ、春は此の如くにして暮れ行くなり、曉の鐘に迎へられて、夕の鐘に送られて。

人の身は、いかに、これに似たることなきか。しかも、わが身は、いかに。あゝ、わが身の春は、そもいかに。

蕾にて散りたる花あらば、それはわが身ならん、風寒く、日薄らして、永へにわが身の春は鎖されたるなり、世は花に餝られても、霞に彩られても。

（雨評）才氣は鑑に見えたり。されど、情熱の足らざるをかなしむ。

## ○愛の原

神奈川縣　中村　美津枝

「モシ〳〵、龜ヨ、龜サンヨ、世界の内で、お前程」、此の唱歌は花子のお得意なのです。否、お得意と云ふよりも、外のは知らないのでせう。其のすき通る樣な黄色い聲で、此の歌を唄ひながら遊びから歸つて來る花子、今日はどうしたのか、星の樣な目を泣きはらして、紅葉の樣な愛らしい手て、貌を押へては歔欷り上げて居るのです。「オヤ、花チャン、誰かにいぢめられたの、エ、母チャンにお話しなさいな」と聞きますと何か恨めしさうに妾の貌をヂッと見て居りましたが、「アノ母チャン、何處へも入らつしやりやしませぬわね」、と鼻聲でかすかに云ふのです。「何處へも行きァしませぬヨ、何故です」。「デモ、清チャンはそう云つてヨ、花チャンの母チャンは、お嫁に行つて、よその母チャンになつて仕舞んだつて、私の事を置いてきぼりだつてヨ。そして置てきぼりつて、何、母チャン」。



「マア、そんな事を……」。ア、、此の小さい胸に、浮世の波を早知り初めたのかと思ふと、妾の胸はかきむしらるゝ樣。「は、花チャン、堪忍しておくれつ！」。ひしと花子を抱きしめて、熱き〳〵キッスを與へたのであります。ア、、妾は何故から不運なのであらう。小さい時に兩親に死別れ、此の家の厄介者となり、叔父叔母樣の手助けと、朝夕の水仕事、浮世の荒い浪風にも、早く逢ふて、勉め〳〵た結果、十八の春、森岡文雄と云ふ銀行員の所へ嫁いてから、足掛け四年目、花の梢に風荒く、月の前に雲黒しとやうにて、愛しき吾が夫は、ふと風がもとて、色々手に手をつくした短

生涯は夢か幻か、夫の靈は眠る樣に天へ歸つて仕舞つたのであります。さすがに父樣は親身だけ、いろ〳〵親切なお言葉に、又も此家に引取られ、離れの一間をかり受けて、樂しみと云ふ物の絶えてなき身、一日も悶えぬ日はなく、千々の思ひになやみつゝ、不識々々此所に過ぐす事二年。アヽ、神さまは、何故かう情無いのでありませう。昨夜も昨夜とて、又再緣せよとかき口說かれ、又も煩累を增す斗り。然し、叔父樣のお話には、嫁けと云ふ倉橋とかは、此の家に對しては、少なからぬ恩人とやら。初の程は、再三おことはりなされしを、頭から恩を被せて、滔々と說かれて見れば、それでもとは云へぬ義理。能くお前も前後の事を考へて、と云はるゝ妾の胸には、五寸釘を打たるゝ樣な心持。さりとて、最早再び夫は持つまいと、一語決心に背いてどうして嫁かれ樣。まして、懷かしい夫の形見の花子があるに。

*　*　*　*　*

「母チャン」と一聲、何か恐ろしい夢にでも襲はれたのてあらう、泣きつかれてかすや〳〵寢入つて居た花子けたたましく叫んで、夢心地にあたりを見廻しながら、「母チャン、行つちやアいやア」。「オー、可し〳〵、夢を見たの。母チャンは何處へも行きやア仕舞せぬヨ。さア、ねんね仕ませうね」。靜かに背なに手を置くと、チッと妾に抱き付いて、又目を閉ぢたたわいなさ、妾は遂に堪へ得られず、聲を忍んで泣きました。アヽ、此の子を、此可愛らしい花子を……うたゝ寢の夢に迄此妾を思ひ慕うて居る者を、どうして置て嫁かれ樣。親切らしき叔母の言葉も、根は他人。日ねもす情薄い叔母の虐待を、薄き衾の中に嘆く時もあろう、樂しかつた過去を夢見ては、此母を慕ひ、思ひ寢の枕に時雨をそゝぐ時もあろう。アヽ汲むも盡きない愛の泉は。哀れや、今せき留められ樣として居るのです。どうぞ、皆樣、妾の心中お察し下さいませ。

（雨評）情はよくきこえたり。惟になほ言ひまはしかれたるところあるををしむ。

## ○運命

伊勢　加藤倭文子

思ひ返せば、夢なりけりな。あはれ、三年の昔、己れ、よくも、學の大海に棹し出てんとはせしぞ。そを始めて父に聞え、わが心の決する處を語りぬ。されど、されど、父は只一言のもとに、はや二十にも餘れる女子を、遠く隔てて、もの學びせさせんこと、世人の聞えも如何あるべきは思ひ止まれよとぞ、さとされし。さあれ、わが家の運命を知れる己れ、一度かたく決せし心、いかで思ひやみぬべき。憂きも喜びも幼きよりしろし給ふ、師の君が御袖にすがらん、とこそは思ひ定めけれ。さらば、心せよ。ゆめ、女子の道をな汚しぞ。過ちあらんには、よし、一人子たりとも、親子の緣はそれ限りぞと、嚴なる父がいましめ。うけたまはりぬと深く心にきざみ。住みなれし故鄕をあとに、病後の父と、病める妹とをのこし、昨日までは、わか手にとりし、家政のこと凡てを、乳母の手一つにうち任せて、たゞ、廣漠たる野に、一すぢの光明をたよりにして、學の道にとは上りぬ。かゝる事情もてる己れ、いかでうるはしの花かざさで、故鄕人に面見えん。流石は心の駒に鞭ちて、つゆ、忘らざりし。あゝ、されど、運命はわが成功を待たずして、われを悲境に陥らし

めよ。父は遠けき百里の外に、已に一人は學び舍に、ましてや、幼くて母に生別れたる身に御養育の恩一方ならぬ祖母は、去年の暮果敢なくもこの世を去り給ひて、故鄕の苔むす奥都城の下に、眠りましぬ。あはれ、過ぎこし方を繰り返せば、うたゝ涙の種。あゝ語らじな、何とてかくは意氣地なき。今日あらんを知りつればこそ、かく學びの道に上りしなれ。されど、たをやめとうまれしおのれ、そを忍ぶには弱かりしよ。遂にわが身は敢果なき運命に泣きぬ。さるにても、嬉しく尊きは、師の君が御なさけよ。あはれ、優しの御さとしなからましかば、わが身は憂の子とやなり果てつらんを。

またぬ月日は、いつしか過ぎ去りて、慈み深き師の君達に手をとられてより、はやもこゝに三年。一月の後には、卒業といへる名の下に、この校を去らんとぞすなる。御親とたのみし、師の君の膝下を去り、同胞と慕ひし、多くの友に別れ、數多可憐兒を打ち捨てて、父なく母なき故鄕に、われは、何を賴みに行かんとはする。

訪ふもうし、とはぬもつらし、故鄕の
苔しのぶの露のさこそは。

しげる小草をふみわけて、あとゝふべきよすがだになし。學の道に出立つべき先つ夜、親しき友と、木立ち繁き庭の面を、散步して、別るとも今しばし、三年の後には、又こゝに、樂しくまどかなる、今よひの月をめでばやと、誓ひしものを。朝夕に文机と親しみし、彼の三疊の室、今はあれはてゝ、さゝがにの住居とやなりつらん。昨日迄は腰をりまげて、かしづきし人々も、知らぬ顏にやうち過ぎん。よし、さもあらばあれ、身は神聖なる敎育の道にたづさはりて、國のおさな子敎へたつる、重き責め荷ひつゝある身ぞ。勉めにつとめ、勵みにはげまんには、せめて御國の爲め、はた、衰へしわが家の名聲をも、恢復せん一はしともならんか。

## ○水仙の花

岩代　服部てい子

母君は今、柴折りて、靈の前にかゞみ給ひぬ。われは米とぎにと、背戶の清水へ。

いつ來ても、にごりなきは、此清水かな。いつ見ても淸きは、此の清水なるかな。あゝ、父が戰死せられしより、此の里に移りきて、早や七ヶ月。その一日一日と、父君を思ひて、母君の已れにかくす一雫見ては、得堪へで、こゝに、この淸水のもとに、走りきて、我が泣顏うつしたりしよ。うつしては、その淸きさゝやきに慰められたりしよ。あゝ名譽の戰死。父は名譽の戰死なり。君の御爲め死せしなり。されど、あゝ、今更に米とぐ手の、たゆたはるゝかな。思はじとすれど、生憎に、頰を傳はるその一滴、澄みたる水に輪をかきて、やがて、大きう、大きう…………。うるめる眼に、その餘波を見おくれば、あな！岩に碎けて、輪は消えたれど、そこには靈の國生の女神の如く淸くやさしき水仙の花。わつかに殘れる白露を袴に、今し苔をすべれる一雫に、ゆら〳〵と水をのぞきぬ。きのふまで、見出でざりしは、そよ、神の守りましゝならむ。さはれ、われにはゆるさせ給へ、父が遺品の軍帽に、かざすべければ……。ぬれ手のまゝにとりあぐれば、さてもゆかしの香りなるかな。

後れ毛かき上げ、一我ッ家ふりかへれば、母の焚きます竈の烟り、細う……白う……。

## ○曉

橫濱　永非ちか子

憂きものはと云ひけん人の心は知らず。八聲の鷄に不圖眼覺むれば、爽氣枕を壓して、心自ら淸々しう、高まり來る想の神の默示かとばかり嬉しきに我れにもあらず臥床を出てつ、取るや一穗の筆に、我れ人の子の汚れたる手にしあれど、天の奇しきを寫し出だしゝ折々、曉ばかり樂しきはあらじと定めたりしことの、今にして思へは、あはれ、及ばぬ心なりしよ。

戀には疎き身にしあれど、情なく見えし其の曉の生別れ。軍の裝ひ勇ましう、さらばとばかり、有明の月影踏みて出で立ちし人の、次第〳〵に遠ざかり行きて、軈て霧の彼方に隱れし時よ。其時、我を曉の憂きに泣きぬ。

さては又、眼眩くはかり麗なる榮の冠戴きて立ち歸りますよと見し夢の覺めての後も嬉しきに、消え殘る閨燈の其處にも、芽出度き吉丁子

の花咲くを見入りて、獨り微笑むこともありしが。

兎角は逆夢の多き例、有明の灯かき立て、疾く配り來し新聞の、何より先づ軍の便り見もて行くうち、我が其人の名の、端なくも、負傷者の中に記されたるを見し我が驚愕。之れぞ正しく夢よとばかり、中々信ずべくもあらざりしが。

鶏の聲いつになう悲しく聞かれて、明六つの鐘の音さへ諸行無常と告げ渡るかと覺えし時しも、けたゝましう扉叩きて投げ込みたる電報。取る手も遲しと解きて見れば、あはれ、人は佐世保に送り歸されし夕、傷所俄になやみて、此の明方を西の空へ……。

ふりさけ見れば。なまじいに入り殘る月影細う〳〵。我が玉の緒は絶えんとす。

## ○あはれの乞食

岡山市　松本最登

雪霙深う國境の山を掩うて、北風いとゞ寒き夕、盲目の父の手を引きて軒に物乞ふ乙女あり。

娘の年頃二八ばかり、油氣なき髮は、何時くしつけたるらん、蓬々と亂れて。着けたる着物も、破れ〳〵て、さながら荒布のそれの如く、垢つきたる素足に、草鞋うがちて、背には汚れたる風呂敷負ひたり。父の盲目は、五十路の坂を越えたらん老の身、片手に杖つき、片手には娘に引かれたる袂、しかと握り、死せる眼は白く、髮は亂れて蓬なし、首には南無阿彌陀佛とかきたる袋をかけたりあはれ、彼の盲目、美しき花清き月はいはずもがな、咫尺の前に千尋の谷のあるも知れず、頭の上に白刃のひらめくも知れず、わづかに杖もて辿りゆくさまの憐れならずや。彼れとて、生れ落ちてよりの盲目にもあるまじ。一度は花も月も眸に集めしならんを、神、何のいたづらぞ、彼が目を閉ぢて、暗黑の色の外何者も見せしめざらんとは。

あはれ、彼の乙女。よき衣着たし、美しの髮飾り欲しと、我まゝいふ年頃なるを、盲目の父の手を引きて、家毎の軒に佇みて、あはれの盲目に物賜へと、小さき聲に訴ふる憐れのさまよ。

顏の醜きを嘆つものよ。嘆つを止めて、彼のあはれなる盲目を見よ。見て、已が身の活ける眼を有せるを喜べ。富を羨むものよ。うらやむを止めて、彼のあはれなる乙女を見よ。見て、已が身の食に飢ゑず、着るに寒からざるを喜ばずや。

*　*　*　*　*

夕暉いつしか沈みて、寒風一陣、見るまに、空には紛々として六花の舞ひ來たりぬ。とみる、村はづれ庚申塚のほとり、あはれ二個の黑影、そは憐れなる盲目と乙女。前村に燈火一つもれて、犬の吠ゆる聲遠し。

## ○かへらぬくり言

越後　すみれ

今宵は雲はれ月すみぬ。日ねもす野面に罵りあへりし農夫等は、皆かへりつくしつ、田になく蛙、小川の流れの外には、絶えて音なふ物とてはなく、春とは云へど靜けき夜は、中々に、憂ある身に物思はする習ひ、いてや、身上の事ども繰りかへしみん。

父母同胞の暖き愛と、師の君の深き情とに絆されて、憂きこと悲しき事は、知らで過ぐしつる身の、十八歳の春、社會の海に船出してより、始めて、浮世の波風荒きことを悟りぬ。それより、三年の今日に至る迄、逆卷く激浪に、搖られ揉まれつせし事や幾度。嗚呼、三年の歳月。思へば、斷腸のことの多きかな。人生夢の如く、何人も運命の手の飜弄を免れ得ずとは知りながら。

あはれ、はかなく悲しきは、妾の運命なりけり。妾は現在に於て、安なく、慰なく、快なく、樂なく、而して、將來の空を想へば、一點の希望の影だにも認むる能はず。あゝ、此の人生は、長へに妾を苦しめ、長へに妾を悶えしむ。

散りにし花は、再び枝にかへられども、時至れば、同じ樣に咲きぬるものを。ちりたる人の子は、再び咲きいでん春もなく、絶えにし望みは、長く千萬無量の恨を殘すのみ。

思へば、去にし彌生の末つ方、恰も今宵の如く靜けき夜なりけるよ。人も我れも、月影朧なる櫻花の下に、春霞深き心の中をかたりあひて樂しみしものを。今ははや、その人は……。あゝ、その友は、千秋待つと、妾にかへり來んにはあらじ。今もなほ、梢の花は匂へども、暇な

き月はてらせども。

## ○陽柳の君を送りて

長野 飯塚ぎを子

したはしの陽柳の君は、近き日この里をさりて、ふるさとさして歸へられんとす。

はしなくも我れはのこる身、送る身とはなりぬ。

あゝ、いつの世よりか、人の世にこのつらきわかれのはじまりけるよ。思へば、むつみしつき日の、いともはやうすぎ行きしことよ。さりし其の日の、そゞろうちしのばれて、たへぬ思のまさりゆく我が身をしろや、君。

あゝ、されど、されど、我れは希望の涙をもて、君を送くらんには、あまりに心の糸のみだれがちなるを、いかにせん。

げに人の世のさだめのわかぬはあらじ。きのふまではともに心のたけをむつまじくかたらひ、あるは、そでをつられてそゞろありきせしを、それも一夜の夢そかし、いまはつれなくも君を送らんとは。かくもわかれのはやかりしとはしらざりき。

はや君とかたらふすべもたぬ身とはなりぬ。わかるゝはおなじ思ひながら、君はふるさとさしてゆく身、かなしみのうちにもなぐさめあるを、君さりてのち、我れはまた、たれとともにか、文のみちをかたらはむ。心は千々にみだれゆきて、筆とる手さへあやしうわなゝきて、すゝまぬをすいしませ、君よ。

我ははや多くはかたらじな。つきぬ思ひは少さき胸にあふれて、そをふがかんには、我が筆のつたなきをうらむるのみ。

もだゆる胸をおししづめて、我はふでをおきぬ。

折しも、あなたの空みわたせば、くもりがちなるそがなかにしとしほきらめく一つの星をみとめぬ、君よ。



あゝ、くしきその星影は、やがてふたりの胸にかゞやくのぞみの光か。

我れはせきくるなみだうちはらひて、君が行末の幸を、かみにいのりぬ。

あゝ、さらば、君よ。あゝ、さらば、君よ。とこしなへにあたゝかき交のつなたつなよ、あゝ。

## ○戀しき君

筑前 います

ともに花咲くふるさとをたちいでゝ、塵埃深き東の都に、さすらひの客となりしより、晨た夕に袂をつられ、おなじ心に業をはげみ、水魚の交りも啻ならざりし戀の君！。君病めば、我れ憂ひ、吾れ病めば、君は悲しみつ、かたみに慰めあふ言の葉に、仇浪狂ふこの世も、我れ等の身には幸深かゝりき。無言のまゝ微笑みたる君のかほに、情の露したゝる計りのまなざしを眺めては、慈愛ふかき母様の言葉なきも悔しとせず。吹く風ははげしく窓打つ夕べ、淋しき此夜も、優しき君が慰撫にあひては、一家打ちつどひ樂しく夜物語りをせんの心も起らざりき。木枯寒く霰たばしる冬の夜も、君としあれば、薄夜着も寒むしとはせず、綿布の中に身を横たへてなほ寒さをうつたふる輩を笑ひき。

あゝ！其の君と吾れ、いまは情なくも、ところを異にして、同じに月に恨をはく。あゝ、戀しき君は、いまいかに。

## ○秋の夕

越路 落葉

月影の澄み渡りたる秋の夜、芝生の野邊に一人佇み、そゞろに物思ふばかり、あはれに心細きはあらじ。古人の言の葉にも、物のあはれは秋こそまされとあり。實にや、遠近の木の葉の紅葉したるが、心なく吹く嵐

に散らさるゝ、露しげき草葉がくれに、さま〴〵の虫の聲出ゆるなど、なべて、淋しからぬかは。

まして、父君母君ゐまさぬ身の、なほさらに感多く、月影のさやけきを見ては、過ぎにし年の十五夜なりしか、故郷の板庇いとあらはなる伏家にて、高峯に澄めるを、をさな心に、母君の膝を枕に眺めしことも浮び來り。或時は父君と共に知人の許よりのかへるさ、雲はれて、月の前行く初雁の聲めづらしく聞えしを、島にやと尋ねし事のありし物を。過ぎにし昔を思へば、中々に涙のたれならぬはなし。

あゝ、憂き世の常とは云へ、ふた君ともに、夕嵐のさそふまに〳〵、落葉とともにゆくりなくも、行きてかへらぬ人の數に入り給ひしぞ悲しき。あはれ、父君、あはれ母君、今はしもいづくにかおはする。あゝ聞きみよ。果して、靈のおはするならば、一度御姿を夢にだに見えさせ給へ、まぼろしにだに見せ給ひよ。實に變りやすきは世の習ひなり。はかなきは人の生命にこそ。あゝ味氣なき世のならひかな。

同胞とても多からぬを、唯一人の兄君さへ、遠き國邊にまして、今宵の月をいかに見たまふらん。折節のうつりかはりに、文おこせ給ひて、須磨明石の月、淀川の夕の景色のよしなど、認め給ふを、皆我が心を惱まさぬぞなき。

折しも、雲間を啼き渡る雁が音の、いとさやけきに、仰ぎ見れば、秋の空の定めなく、月はいつしか雲がくれて、雨さへ蕭々と降りいでたれば、やをら、身をおこして、うちに入りて、燈火の下に、かくは書きつけて後に、

さらぬだに露けき袖を、いやましに
　濡れまされとや、あきさめぞふる。

## ○紫陽花

德島　ふた葉

五月雨の晴間もなく、打ちしめりて、友を訪はむも、ゆきゝの道のあしけれぱ、おのづからとぢこもり勝なるけふの日曜日、いかゞはせんと、思ひ煩ひつ。

はげしくふる雨もやう〳〵小やみとなりて、軒端におつるあまたれ、とだえんとしては、また落つるもさびしまどの戸、おしひらけば、紫陽花の今をさかりとさきいでたるが、連日の雨にいよゝ色ます可憐のすがた、いともしほらし、あゝこのけだかくすなほなる美はしのこの花も、われにとりては、かなしき想ひの種なるよ。げに思ひいづれば、去年の今日此頃なりき。友とわれとは、手をひきつれて、かの下に、たのしく、おかしく、たはむれ遊び、友はまたこん年の思ひでにとて、大きやかなる花の一とふさをわれに、ひとふさをみづからと、わかちとりて、さらばとばかり、かへり給ひぬ。あゝ、此の別れこそ、一生のわかれなりけるよ。神ならぬ身の、しるによしなく、またこん年もかくしてと、よろこびまちしぞ、はかなきや、

ひま行く駒のあしなみはやく、時はまたきぬ。花はまたさきぬ。あゝ、されど、やさしき友の、かんばせは、また見ること能はず。友のみこゑは、またきくこと能はず。いかに悲しのきはみなるよ。

感極まつて、しばし茫然たりしが、さなり〳〵、せめてはこの花の一枝なりとも、友がみたまにたむけ參らせ、いさゝか、地下の靈をなぐさめまつらむと、いそぎたちあがればのき端をおとづるゝ、あまだれは、いとゞいそがしう、雨はまたもや降りいでぬ。

## ○あゝ母よ

下總　中村由

一

無常の風、朝な夕なにやまずして、一年ばかり涙もて暮らす中、遂にわが母は、花とともにもろくも散り失せぬ。あゝ、永く血に泣きしは、われなるかな。

二

今宵、愁の風、樹々の梢にやまずして、なげきの聲いやたかし。しきみに注ぐ風、草葉にふりかゝる涙の雨、つきせじな。やがて、月の東の森に出てしとき、弔ひし人はかへりぬ。殘れるは唯我等兄弟三人。あゝ、母よ、母よ、そが白棺に、何を夢みて眠り給ふや。われらがなげきを他に見なして、蓮華の苑に、などて早う急ぎ給ひしぞ。母よ、一度は誰れも行くてふ浮世なれど、そもつても、いと〳〵早き旅立ならずや。母よ、母上は　紫の雲間に謡ふ女神が妙音を、七寶のみ池に咲く青蓮のほとりに聞くと、われらが朝な夕なに血に泣くを見ると、何れがたのしき

ぞ。あゝ、母よ、母よ。

三

あはれ人の命の五十年とは云ひながら、そはげに露の一夜なり。朝にありて、夕になし。われは嘆かじな、愁ひじな。依らんかな、萬里の土中にゐます佛神のみ袖に。

四

はれやらぬ目を、み墓に注げば、燈火愁の風に消えて、月かげ松の梢に清く、星花四方にみちみちぬ。われはかへらん、月の雲間に隱れざる中に、母が夢あたゝかき間に。

## ○妹の墓前に詣でゝ

河州　大崎雅子

嗚呼、こゝに眠れる我が妹よ。御身は彼の國に如何に在すらん。我れ今御身を問ひ來れば、松風吹きて白楊戰き、過ぎにし昔の忍ばれて、せきくる涙にむせぶなり。思ひめぐらせば、御身と我れと、はらからの契りを結びしは、我が五つの頃かとよ。御身がまことの母上は、御身を生み給ひし後、程なくみまかりけるが、其の時、我が幼き弟も失せし折なりしかば、我が母上には、一には御身のたよりなきを憐み給ひ、また一には、亡き兒の悲みを忘れん爲めに、御身をこひうけて、我が妹となし給ひしとかや。御身は五つ、我れは八つの頃とぞおほゆる。暮れゆく秋の夕、二人外にて遊びゐたりしに、ゆくりなくも時雨降り來にければ、あわてふためきて內に入りし其の時の、御身の美しき愛らしき俤は、今もなほおほろげに心の鏡にうつるなり。御身は、七歳の時までは、いと平けくおかに生ひたち、父上母上には、雪も消えば、學校に入れんなどのたまひて、歡び給ひしに、ふと風の心地とて、床につきたり。始めの程は、かりそめの病と思ひしに、なか／＼に癒えやらず、さま／＼に心を盡しぬれども、早くも別るゝ宿世の定めなりけむ。さらに其のしるしとてもなくて、却て、日毎にいよ／＼弱るのみ。我れは或日、隣の村の學の園にありて、讀書を學び、いとおもしろく讀み居たりしが、御身あやふしと告ぐる人あり。疾く走りて、家に皈りしに、御身ははや泣き悲む母上の膝に抱かれて、清らかなる眼を閉ぢつ、美しく豐なる頬はやせ衰へて、息は既に絶えたりき。我れはこども心にも、御身とむつみし日頃のことの忍ばれて、何となう悲しく、其の夜は安く眠り得ざりき。げに、光陰の過ぎ去るは、流るゝ水の如くにして、指數ふれば、早や十年の昔となりぬ。御身若し恙なく此の世に在らば、今は二八か二九のいとも美しき乙女の數に入りしならむ。兩親の御身に望みをかけ給ひしこと多かりしものを、思へば、まゝならぬ浮世かな。されど何事もうつせみの定めなき世にしあれば、今更なげきて、何かせん。噫々、なつかしき我が妹よ、唯安らかに眠れよや。浮世の波風あらけれど、父母を始め我も亦まさきくてあるなり。この手向くる一たばの花、色ははや、さめたれど、我が赤心のかなりばかりを、せめては。

（評）此の文章と、次の（哀れかま子の墓）の文とは、餘りによく似たるもの哉。あやしといふべし。

## ○哀れかま子の墓

岐阜縣　寺倉龍子

咲きも殘らず散りも初めぬ櫻花、嵐なくとも、かくてやはやむべき。さるを、夜半の嵐は、散るべく見えぬ花を散らすこそ、淺ましけれ。若しとて病まざる定なく、死は幼なりとも免る能はざるは、いかにともしえぬぞ恨みなる。我が妹かま子よ、御身は彼の世にありて、いかにおはしつるぞや。我今御身をとひくれば、道邊の若草戰ぎ、雲雀長閑に囀り、昔のこのあたり忍ばれて、せきくる涙にむせぶなり。御身は五つ、我れは九つの頃とぞ覺ゆる、霞たなびく春野に遊びて、菫摘みつつ、胡蝶追ひたる俤は、今も猶おぼろげに、心の鏡にうつるなり。御身は八つの年迄、いとも健やに、學び屋に生ひたち給ひて喜び玉ひしに、ふと氣分惡しとて床に就かれたり。初の程は、かりそめと思ひしも、月日と共に重り、樣々の心盡しも、其のしるしなくて、日毎にいよ／＼弱るのみ。忘れもやらじ、二月六日、我れくすしよりの歸るさ、御身あやなしと告ぐる人あり。とく走りて、家にかへりしに、御身は早や、悲しむ母の膝の上に、清らかなる眼とぢつ、麗しく豐かなる頬はやせおとろへて、ふたたび答へはあらざりき。アヽ、早く別るゝは、宿世のさだめなりけむ。我れは子供心に、むつびあいし頃を思ひ出て、其の夜は安くもねむらざりき。月日の小車はめぐりめぐりて、流るゝ水、射る矢よりも早く、御身の此の世を去り玉ひてより、數ふれば、今は早や十年あまりの昔となりぬ。御身も恙なく此の世に在せば、二八のいとも美しき乙女の數に入りしならむものを思へば、まゝならぬ浮世かな。されど、なげきてもいかにともすべからず。なつかしきかま子よ、たゞ安業に眠れよや。たらちねをはじめ奉り、我

れも亦すこやかなり。
この手向くる一たばの香、このたむくる一株の花、このたむくる一杯の水に、我まごころを汲みとりて、殘れる香にも受けよかし。

あなかなしや。

（評）前の（妹の墓に詣でて）女子と餘りによく似たる哉。あやしといふべし。

## ○亡き母を思ふ

紀伊　石橋奈三枝

遠ざかる者は日にうとしとかいひけん世にありても、母君を慕ひ參らするの情は、いかで片時も忘るゝ隙のあらんやは。まして。咲く花を見、限なくてらす月をみては、たゞありし昔の偲ばれて、先だつ者は泪なりけりな。生者必滅會者定離、定めがたきは浮世の習ひとはたがいひそめしぞ。されど、古より五十年を常の齢といふなるに、春秋なほあまりある世を殘してうせ給ひし事の悔さよ。指をり數ふれば、早六年の昔とはなりぬ。あたりも漸う佐保姫の錦あやなす其の朝、ふと風の心地とて、打ちふし給ひしが、それよりはとかくにみけしきすぐれさせ給はず。されば、靜なる處にて、しばし養生せんと、の給ふまゝに、宗應寺となんいへる精舍の一間をかり、つきそひには姉上たゞ一人と定まりぬ。妾をもと願ひまつれど、許されず。如何はせんと、其の夜母君が部屋へ參りぬ。燈火ほの暗き其下にうちふし給ふ御姿は、常日頃の我母上とも思はれぬ迄にやつれさせ給ひ、青白きかんばせは、さながら此の世の人とも思はれず。うるみたる目に、しばし妾をみつめ給ひしが、やゝありての給ふ樣、わが事は別に心配するにも及ばじ。なれが家にありて、父上のおほせ言をよく聞けよと。あはれ、此のみ言葉、此おもかげが親子一生の別れならんとは、神ならぬ身のしるよしなかりき。かくて、月日に關守なく、早立田姫の心づくしのもみぢ葉もちりなんとする其の夕、母上の病篤ければ、とく來れよとの使は來たりぬ。あなやとばかりに驚きて、魂も身にそはず、たゞちに車急がせたれど、はやる心の駒にくらべては、虫のはふが如く、手に汗のみ握らせて行きけるに、はや母君はうせ給ひし後なるを如何にせん。あはれ、妾はいかな世の報いにて、逢ふ事のかなはざりけんよ。きけば、母君には、妾の遲きをまち詫び給ひ、孃はまだみえずや、孃よとの給ひて、遂に夜半の嵐と共にあの世の客となり給ひしとか。これを後れて聞きつる妾が心、いかなりしぞ。胸ははりさく思ひにて、熱き泪は湧き返りつゝ、今一歩早くば、此の怨みはなからましものを神や佛も隔れとおぼし給はらば、せめて此の世の思ひ出に、今一言かたらせ給ひてよとさけべど、如何にせん其の唇の早すでに動かずなりぬるを。涙のまさこの百千度くり返しくり返すとも、此の怨この悲はつくる時なからん。あゝ思ひ出でては悲しうのみなりて、偲ぶとはすれど、いよゝ我が袖のぬれまさりぬ。げにうらめしきは浮世のさがなるよ。

## ○八重ちやん

千葉町　土屋重子

八重ちやんは、○○學校の○年生で、毎日學校に來ては、活發に元氣よく而かも、大人しく、成績も二と下らぬ子供である。

其の毎朝、小さな靴チキユー〳〵ならせながら、愉快氣に來るいぢらしさ。肉づき豐かな頬邊は、斜に曲線を畫いて。薔薇の紅をふき込んだやう。羊のやうな愛くるしい無邪氣な眼には、常に神の福音が浸み込んでゐる、輝く兩の眸は、今にも露の滴るやう。いつもニコ〳〵打ち笑んで。先生オ早ウとばかり、それからいろ〳〵の話、家での滑稽談、はては、オニゴツコなどをするのである。

ある日、いつものやうに運動場で遊んでゐたが。自分のかたはらにかけよつて、だしぬけに、

先生！ワタシハオトツサンガナイノ…………

と、どう思ひ出したのか、いふのである。

自分は餘りの不意なのに驚いて。

ナンデスノ……

と、いつたまま、八重ちやんの顏をながめたのである。するど其のふくやかなほんのりとした頬よりは、時ならぬ雨が注ぎつつある。

自分は一言もいてぬ。ただまばたきするのみであつた。アー、思へば、明治甲午水無月半ばすぐる頃であつた。鷄の林に風あれて、アリナシの阿波立ちさわぎ、我が幾百の武夫は其の泡沫と消え去つた。八重ちやんのおとーさんも、その時、特務曹長であつて、第二軍に從ひ、○○に上陸し、金州に戰ひ、旅順に進み、遂に不幸にも名譽の戰死を遂げたのである。

爾來、星うつり年かはり、佐保姫は行き、立田姫は去り、茲に十年。八重ちやんは、かよわい母の手一つに育てられ、今日に至つたのである。

今や日露の戰たけなはにして、我が幾億の益荒武夫は、海に陸に連戰連勝、ペテルブルグ城下の盟も將に近きにあらむとす、されど〳〵、無常の風は、現にハルビンの野に吹き荒びつつあるのである。十年前の星や月は、今も是等勇士の屍をてらし、かくて幾百の八重ちやんのやうなものは、此の世に殘さるるであらう!!!

アヽ、神よ、希くは八重ちやんをして、幸に建在ならしめよ、

# 消息文

塩井雨江先生選

地

## ○絵葉書に書きて故郷の母へ送る文三つ

赤阪區田町六丁目十一　高瀬八重子

母上様、ごは妾が愛宕山に登り、寫生したる品川の海にて候。兄様が御出立なされし時、此の海にて、妾がハンケチを振り、兄様が帽子を御振りなされて、御別れ申し丶海にて候。母上様が病重うなりて故郷へ御歸りになされ候時に、心もとなくながめ候ひしも此海にて候。なつかしき海、思ひ出で多き海。紀念の爲にと御送り申し上げ候。（第一信）

母上様、此の畫は、兄様の愛馬月鹿毛にて候。兄様の出征の時、御乗せ申し丶月鹿毛にて候。今頃は遠き滿洲の野に、兄様と苦樂を共になし居る事と存じ候。（第二信）

母上様、太郎は今し御友達と庭に戰ごつこを致し居り候。松の木に腰を掛け居るのが、太郎に候。太郎は乃木大將にて候。まだステッセルは降參せぬのかなどと意張り居り候。父様はこれを御覽なされて、御笑ひなされ居り候。（第三信）

（雨評）意匠、一寸おもしろく、多少の情もこもりたるを以て、地とす。

人

## ○上京せる友のもとに

伊豫喜多郡大洲町　土居優香

曉の月細く、朝霧の中に屹立せる城山の木立にかゝりて、ちく霜白き朝なりし、一刻〳〵川霧にへだゝり行く御姿を、渡頭に立ち、見えずなり行くまで、涙の目もて、……あゝ御別れの如何につらかりしよ。それも未だ昨日の思ひせらるゝる、早もともにさまよひし里川のつゝみに、若菜もえそむる頃とはなり申し候。あはれ、なつかしき綾子の君よ。さるにても、如何に都の春をや過し給ふらむ、御身に恙もおはせずや。此

頃の月あきらけき夕など、すゞろ故郷なつかしくは、思ひ給はでや。美しき水、清き山、君慕ふ小妹のある此の里を、まして塵の世、はなれし清き山里の、春の光みち渡りし此の頃を。
かの野川は、ひねもす、床しき自然の琴に、村の平和をつげ、山蔭の水車は、楽しき詩(うた)をうたひをり候。望みちたる春の野は、やがて、菫、なの花こきまぜて、美しき花の袷衣を、おり出で候。あなた様、もし御閑だにあらば、一日を自然の友とは過し遊ばされずや。封じ込めしは野川の堤に昨日今日、つぼみを破りし菫に候、あたりの景色、この花に封じ込め候へば、御忍びぐさにと、美はしき御詩とならば、惠み給ひてよ。
かしこ

（雨評）文も整ひ、多少文才の見ゆるを以て、人とす。

秀逸

## ○初春友の許に

宮城縣　桂島登美子

東風久しく途絶え候て、風の便りの成りがたきまゝ、絶えて御無沙汰致し居り候ところ、如何渡らせ給ひてか、いぶせき伏家にわび住まひする身にすら、此の頃はたち迷ふ霞の奥の雲雀の小うた、まがきの梅に鶯の美音位の楽みは得られ候へば、況してや、みやびなる都の御住居、朝夕の御眺めも、さこそと推し上げ進らせ候。承れば、御地公園の櫻、昨今の日和に、大方咲き揃ひ候由、定めし御許様にも、親しき御友垣と、花に御心や寄せ給はん、其の折りにこそ、かねて、勝れ給ひしおん言の葉の錦のさこそと、床しう存じ上げ進らせ候。當地天王山の櫻も、今しくちびる紅に、まさに笑はん風情、誠に美くしう候。されど、甲斐なき妾には、徒に、涙を誘ふ媒に候のみ、昨日は梅子様と久々にて、野外散歩致し、かつて、君と、テニス争ひし落合野に、しばし休らひ侍りしに、さをさし上る鳴瀬のほぶねの、霞がくれに消え行く様、實に、一幅の好畫圖にて、去年に變らぬ野邊の様々、見るから御許様の慕はれ、御懐しさにえ堪ず侍るを、あはれ、雲井の他所に眺め給はん御身の、故山の夢や如何、うけたまはりたくてなん、かしこ

（雨評）文は整ひたれど、何んとなくものたらぬ心地するををしむ。

## ○菫花に添へて贈る文

盛岡市　山崎こずゑ

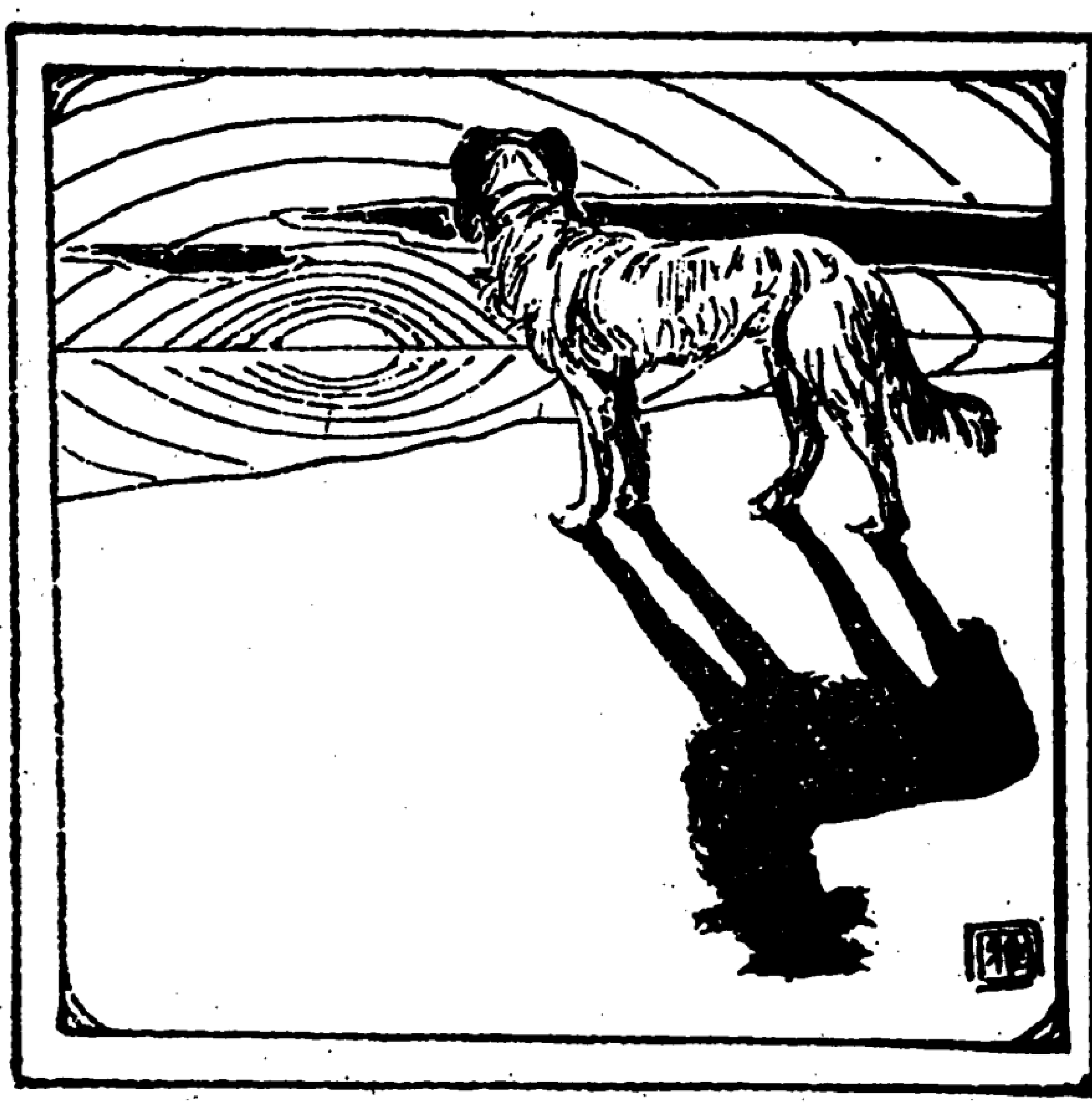
その後はいかにわたらせられ候や、伺ひ上げ候。去年なつかしき君のいます都をはなれて、この山里の人と

なりてよりは、ひとたびの音づれだに申しまゐらせずお詫びする言の葉もこれなく候。

御地にては、最早や龜井戸、芝などの紅白の梅咲きそめし事と、山家住まひの此の身にうちくらべて、都に御兄樣共々學びの御園に遊ばるゝ貴女の御身の上、誠に羨ましう存じ候。此地はよろづの事他所に後るゝと、兼ねて聞き及び候に、昨朝水桶に氷のはりつめ申ししには、今更ながら驚き申し候。北上山脈には、未だ二三尺雪積り居るとか、村の人話し合ひ候へば、是れも無理には候ふまじ。

さて、今日は近頃に稀なる好天氣にて、かつは日曜日なるを幸ひ、櫻山のほとりをそゞろあるき仕り候。其折り、あまりの美しさに、手づから根掘りに致しゝ此の菫、兼ねてそなたのお愛花ときゝはんべるまゝ、お氣に入るまじくと存じ候へども、一株試に進じまゐらせ候。菫といへば、さいつ年、貴女と共に御地の上野に遊びて、かつ愛てかつ語り、はては、えならぬそれの香に醉へるまゝ、しばし恍然とせしことなど、すゞろに思ひ浮べられ候て、たゞ／＼君戀しさのいやますのみに候。せめては貴孃よ、この花、はしたなきわらはとも思召して、一日たりと君が箱庭に植ゑて御眺めくだされ度 候かしこ。

（雨評）なほ少しく練熟せざるところをしむ。



## ○愛子を失ひし人の許に

千葉縣 小森貞子

白金も黃金も玉も、子にはまさらずと承るに、其の寶を失ひ給ひけむ、御身の上、何と申し上げむ樣もなく候。御幼少の頃より、御發明にて、萬の業に秀で給ひ、殊に、御顏容の愛らしうおはせしを、いかに御胸もさけ給ふらんと、おし測り參せ候。頃日御伺ひ申し候折りは、何の御變りもおはしまさず、我れは農學士になりて父樣の御宿志をつぎ、兼ては軍人になりて、勇ましき功をたて、金鵄勳章をば、此の胸にかくるなりと、大威張り遊ばされし事など、戯言とは思はれて、眞に御名をあげ給はん御思召、學校の御勉め振りにも顯はれて、末頼もしう存じ居りしをいかにはかなき世なりとて、あたら蕾の咲きあへぬ程に、散りにし事の口をしさよ。眞に夢に夢みし心地して、そゞろに、まゝならぬ浮世をかこたれ申し候を、

ましてあなた様には、同じ年頃の御子様方を見るにつけ、なつかしき御聲、愛らしき面影の、まのあたりに浮ぶ思ひして、わするるひまも有らせられず候らはむと、御察しまゐらするだに涙の種に御座候。さはいへ末の露もとの雫は世のならはしにて、すべなき業に候へば、千度百度くり返すも、いかゞはせむ。たゞ此の後は、御身の、御保養専一と存じ候。早速さぶらひて、御悔み申し上ぐべきなれど、涙もろきくせに候へば、さらぬだにぬらし給ふ御袖を、ぬらし添へんもとて、筆にまかせ候事あしからず汲みとり給ひてよ。あなかしこ。

（雨評）文は整ひたれど、別に取り立つべきふしなきをなしむ。

## ○遠征の兄に

鳥取市　上山千重子

なつかしき兄上には、日々御軍務に献身御従事遊ばされ、こよなく目出度存上候。まして、病魔もロケスの彈丸も、生が身の前は素通り、戰爭は、僕の大好物の羊羹に比して、一層味もあり甘く候など、いつに變らぬ勇壯なる御筆つき、アヽ如何に御武運長久にいらせ給ふぞ、さはいへ、明日をも知られぬ人の命。まいて鉾取ります武夫の身は、それよ、風前の燈の危さにも彌増りてん、あはれ、澄み行く今宵の月、兄上には恙なくて見そなはし給ふや、否。窓の呉竹がそよぎも、屍を渉る小夜風の、血汐にむせぶ聲かとも聞きなされてなん。アヽ死させ給へ、悲しき事のみ聯想するも、兄上の御身氣遣ひての心細さに御座候。幸夫さんも、此頃餘程大きく口達者に相成り、毎日征露坊やの遊戯に餘念なく、祖父上はじめ皆々様の御賞賛を戴き居り候。別紙に、歌詞譜曲とも認め候へば、御覧下され度候。尚兄上御秘藏の鉢の紅梅、今日初めてほゝ笑み候。陣中の御慰にと、一りんもぎて封じ置き候へば、妹の心を汲み給ひて、花摘みし罪、御免し下され度候。まだ／＼申し上げたき事も、數々御座候へども、後便の材料にと書き殘し、是にて筆納め候、あなかしこ。

（雨評）すべて今一しほの文にて候。

## ○友の許に

茨城縣　山口澄子

世は花鳥の長閑の春に引きかへて、袖の時雨の晴れ間なく、果敢なう歎きつゞくる我等の上の便なく候よ。さても、先日あなた様御慰め下され候てより、やゝ歎きも薄らぎしやうに見うけられたる姉の、またも今日此の頃は、母の歎きもしらつゆの、それよりもろく消え失せし我が子の上のみ思ひつゞけて、一間にとぢこもりては、移り香殘る衣服とりいて、形見こそいまは

あだなれこれなくばと、涙そゝぐを見る身もつらく、夜は殊更に、軒端をめぐる風の音に、夢さめて、添寢のありし世思ひいでゝか、忍び泣く音をきくたびごとそばに伏す身のまぶたは合ず、思ひはそれよりそれとはせめぐり候ひつ、戰地にをはす兄上の、風のたよりの、それだになきうき中に、いままた、いとし子失ひし姉の心の、さぞなと思ふに、己も共にえ堪へずなりて、慰むべき身の、よゝとばかり泣きいる甲斐なさ、おしはかり給ひてよ。きのふ三週日にあたりぬれば、梅の初花たづさへて、み墓に詣で候ひしに、吹く松風の音淋しう、無常をつぐる鐘の音に、また今更に我世はかなう涙こぼれて、姉はえたへず、己も共にと、暫はそこのえさりがたう候ひき。かくてゆかば、歎きに身も心も細りやせずやと、只管姉の上の心許なさに、なめげの願事には候へど、是非にいま一度とぶらはせ給はりて、沈み行く心御引立せ下され度、おろかなる妹の心づかひ、あはれとおしはかり給ひて、御出の程折返し願ひまゐらせ候。かしこ

（雨評）情はきくべきものあれど、言ひまはしのまだしきを惜しむ。

## ○寫眞にそへて友の許に

加賀　庵子

雨につけ雪につけ如何に過させ給ふらんと、思ひ出でぬ日は御座なく候へども、いかにせん、百里の山川に隔てられて、翼なき身のかなしさは、唯そなたの空のみ打ち見やり、人知れぬ歎きに袖をぬらし居り候。過し紀元節には、せめてもの思ひやりにと撮影致し候處只今出來致し候まゝ、いとゞ不出來には候へども、一葉御目にかけ申し候。もし座右の友と御いつくしみ下され候はゞ、こよなう嬉しう存じ候。さても、月日の宿に關守りなきは今更ならねど、げにかばかりなりとも思ひ申さゞりき。戀しの君を始めとし、あまたの友垣に見送られ、一聲轟く汽笛の音をあひづに、思ふ胸も語りあへで、唯さらばと計りに、袖を分ちまゐらせしはるは、昨日の如く、空一面にたちこめし彼の朝霧は、未だに去りもやらぬ心地せらるゝを、いつしか三年四年は過ぎて、早や五年の春を迎へん事と相成候。思へば、我れは彼の時僅に十年にあまれるうなゐ子に候ひしよ。この五年が間に變りし姿、如何に御目をや驚すらん。君にも定めし如何計り變らせ給ひけん御事と存じ居り候、希くは吾にも一葉御惠み下されたく候。猶申し上げ度事は海山に候へども、いづれ後の便りにと書き殘し置き候。かしこ

（雨評）言ふところは整ひたれど、さりて取りたつるふしなきををしむ。

## ○卒業をいはふ文

岡山縣　小山松枝

花笑ひ鳥うたふたのしき春と相成り、うら〳〵と霞みわたりたる野山の至る處、よろこびの色みちたるをりから、年ごろあつめ給ひし螢雪の功しろく、月の桂をかざして世に光り出でたまふべき、御許樣はさらなり御兩親樣の御滿足いかばかりと御察し申し上げ候。申し上ぐるまでも候はねど、戰捷國の榮ある世に、貴き〳〵希望をいだきつゝいて給ふなれば心して、日々つちかひ給ひし理想を實地に行ひ、高尚なる趣味をもたらして、荒ましき波風に障らず、人々のまどひし暗路も學の道の光をあかしに導きたまはんこと、御許樣の責任ならめと存じ候っげに前途光榮ある御許樣、何をがな御よろこびをと考へ候へども、よき思ひあたりもなく、たゞこの硯の海の、淺くとも、君がまごゝろのこき墨色に、美しき名をとめ給ふやうにとて、わざとさし上げ候。この後とても、相かはらず妹とおぼして、經驗し給ひしことども、折につけてもらさせたまへ。見聞少なきわらはのために、うれしさにもつ筆もいそがれて、先は御歡びのみかしこ

## ○春風吹く頃遠き先生の許へ

岩代　服部ていチ

春風は今、こゝに音信れて、筆もつ私のリボンを、輕うなでゆき候。さてゆくへはと見れば、敷石の上に餘念なう遊べる小雀のあたりとは、その和毛の小ゆらぎにて知られ候。あゝ、此春風は先生のお書齋にも吹き入りて、緒からろゝみ木をそよがすしてならんと存じ候。かの香り高き梅の木かこみて、一つとや歌ひ、あのしだれ櫻の下に、先生のみ手にすがり、蝴蝶逐ひて遊び居りし時には、いつも此春風とも〳〵にて候ひしよ。あゝ、此春風、先生のこの地旅立ちましてより、早五つ度吹きかへり候て、今年もかの白梅咲かせ候。櫻も遠からず咲かすべく、しきりに枝をもて遊び居候。今朝登校の折り、なにとなうなつかしくして、かの梅の下にたゞずみ候ひしに、やさしき先生のみ聲きこえて、袴に落ちしは、こゝに封じ込めたる一輪に候。あはれあたゝかきキッス給はりとうあゝ、先生、けふ此頃櫻の下に遊べる兒等は、あの頃はまだあたゝかき母君の懷に罪なきゆめを結び居りし今年尋常一年の生徒に候。あゝ、今更に身に浸み候ふは、先生お口癖の「光陰矢の如し」の語に候。あゝ、ゆるさせ給へ、かやう墨黑々しきを。こもまたかの風の仕業に候へば……。あゝ、先生よ、お身お大切に願ひ上げ候。先は春風にうながされて、日頃の御無沙汰謝し奉り候。また足らぬ此文の御添作、樂みに待ち居り候。かしこ

## ○友の遊學するを送る文

麴町　榊原千重子

世は花鳥の春となりぬ、百千鳥の聲のどかにして、霞ならぬ心さへ浮立つ頃なるを、君には、花のかぐはしき譽をかざし、霞のいや高き業を終へ給ひしとか。長き年月積ませ給ひし螢雪の御しるし、けふのむしろにかゞやきて、御身の光も一きはそびぬべし。さるを、猶あかで、こ度は外國に物學びし給ふとか。御志し程、世の爲め國のためにいとうれしきにも、けふまではかく親しう同胞にもまさりぬるを、今は雲井はるかにへだゝりて、御なつかしさのみいやまさるべし、と、思ふにも、先づ心ぼそきを、如何せん。海山遠くへだゝりなばいかに、いづれの時にか相見ん、何時の時にか言問ひまつるべき。よし、夫れは私事なり。いでや君かの地にて遊びて後は、女子の責任を全うし、皆人の鏡とあふがれさせ給はんには、父母の君にもいかばかりうれしう覺し給ふらん。忠孝の道此上やおはすべき。されば、はかなき譽をてらひて、實學を忘り、寸毫にほこりて、美德を損ふ如き行は、必ず愼み給ふべき事にこそ。妾がこ度のれぎ事になん。きこえあげたる事は、猶多かれど、却りて物學びの御さまたげにやなりぬらんとて、申し納めぬ。あなかしこ

## ○上京する友に送る

攝津　森田壽子

いつも乍ら御流玲の御筆、いまさら感じ入り候。さて承り候へば、あなた樣には、こたび御物學びの爲め、遠き東の都へ御上らせ玉ふ由、誠にお羨しう存じ候。兼てより學びの道にはいと秀てゝ御はしますあなた樣故、こたび都の名たゝる學びの舍に入らせられ、一入御勉め遊ばされなば、いか程進ませ玉ふらんと、拙き妾もいと賴母しう思ひ侍り候。されば、こたびの御上京は、元より歡く可き事には候はれど、只幼き時より、春は霞たなびく朝、共に手を引き、櫻花の下に戲れ、夏は、むし暑き日を、猪名川の淸き流れに洗ひ、或は悲しき秋の暮れ、共に月を稱し

或は寒き冬の日、火の邊てかろた取り、或は同じ學びの窓の下に、情けある師の教へを共に蒙り、はらからも只ならぬ心の底より、親しう交り喜憂相共に致し何くれと妾を導き玉はりし故、妾は誠にあなた樣をのみ杖とも柱とも頼み、行末長くお教を請はんと樂しみ居り候へしを、如何に、御學びとは申せ、御身を立てさせ玉ふよすがとは云へ、今かく御別れ參らするには、いとも悲しう又心苦しう存じ侍り候。あはれ、あなた樣よりは友なき妾の、此の後は誰と語らひ誰と共に勵み候はん。之を思へば、せきあへぬ涙に袖もうるほひ候。

さり乍ら、かゝることいつ迄申すも、かひなき事に候へば、只之れよりは、あなた樣の業を卒へ玉ひて、早く御志を遂げられて、一日もはやく歸りまさむことを祈るべく候。なほおぼつかなき妾の申す迄には候はれど、油斷大敵と申す事に、よく〳〵心して、ゆめ〳〵惡しき習はしに染み玉ふことなく、一すぢに志す方につとめられ、奥深き文の林に、倦まじ撓まず怠らず、身を大切に致され、我身の光り心の光り、磨き〳〵て、總て錦をまとうて歸りまさむ事を、今より指折り數へて待ち居り申し候。呉れ〳〵も都のちりひぢに御まみれ遊はさぬ樣、肝要に候。さて、此の女子自修文庫、失禮乍ら、餞のしるし迄に差し上げ候まゝ、舟車の中にて、慰みがてら御讀み相成り候はゞ、定めて御參考にと存じ候。先は右迄、あら〳〵かしこ

## ○花子樣の許へ

遠江 大石よし子

春の花、春の草、かすみよ鳥よと、とり〲にあかぬ眺めの今日と相成り申し候。妾こと、きのふ美保野の花小路を過ぎし折り、はろかお梅の橋とおぼしきあたり、紅き綸日がさを見出し、春の景色にこよなうよき色添へしものよと、暫し綠草の中に彳みて、歌びとならむには、こゝにおかしき歌の一つも哉と、白布かざして、よく〳〵眺め申し候へば、遠きかすみの中ゆゑ、其の面影のほどさだかには見えわかず候へ共、むらさき袴の美くしきを見申し候へば、慥にあなた樣とがてんいたし候。さぞや昨日は暖き中のあたゝかき日故、春の野あそびの一入樂しかりしと存ぜられ申し候。又昨夕は、あなた樣のおん事故、花の窓に水茎のあと墨の色、すみれの花よりもたんぽぽの花よりも一入美はしきもの、み文机の花とかなりならるゝならむと、いと〳〵お羨しう存じ候、就ては、是非共其の巻拜見いたし度、今宵は君江子樣にもお遊びにこらるゝ樣、今朝玉章に接し申し候へば。幸ひあなた樣にも是非々々ご遊びにお出て下され度。さすれば、昨日出來上りし竹の間におん誘ひ申し上ぐべくそこには泉水も新らしく湛へ、櫻は今が花盛りなほ朧月のさし入る窓にご座候。幸ひ今宵は丸き十五夜とぞ。かしこ



## ○別れて久しき友の許へ

和歌山縣 山東かをる

秋ならぬに、なぞかく露けきよと、共に袖をしぼりつ、かの恨めしき汽笛の音に、御別れ申してより、御消息きこえんとは存じながら、拙き筆のはづかしさに、梅の花さく此頃まで、音づれもせざりしむらいの罪は、例の廣き御胸にて、御ゆるし玉はり度く候。

さても、此の地に御座する時は、同胞も及ばぬ惠をたれ玉ひ、まことの姉もかくまでにはなからむを、先つ頃一人の姉に別れし身は、一入御はしさ增りて、なほ末永くみ教仰がんと思ひ居り候。御許樣の御物學びのため、遠き東の都なる跡見女學校へ行き玉ふとて、去年の彌生の末つ方、惜しき袂分ち候てよりは、只片腕の落ちし心地して、いと心細く、此頃は文机の塵も拂はず、硯の海もかわきがちにて、只東の空のみなつかしく、かの花の晨、月の夕手を引きて、山里に散りゆく花をおしみ、

袖を連れては、大波小波よする濱邊に、ふけゆく月をなげきなど、睦びあひしことども、偲ばれて、今日は如何になど、袖に置く露のみ、いとしげく候。往にし初春の夜、月はみ空にてほゝゑめる時、共に眺めにし庭の梅花、今年も麗はしく咲き出てゝ、人待ち顔の風情を見るに付け、坐るに過ぎし夜の事の偲ばるゝに、一枝手折り、文の中に巻きこめて、御目わづらはし申し候。よしや、色あせ匂ひを止めずとも、かくまで思ふ心を哀とおぼし、朝な夕なに眺めさせ玉ひなば、妾一人の喜びのみかは、花の心も思ひやられ侍り候。折りしも、來鳴く鶯の、哀れなる聲にて、友をよぶかと、思はれ侍るに、いとゞ、おなつかしさまされるまゝ拙なき水莖をもて、御安否伺ひまつるになん。かしこ。

## ○春の夜友に　京都　安部澄子

文子樣、ほんとに美しい夜ですね。私、つひ月にうかれて、濱邊へ出て散走して居りましたが、やつぱり少しあるくと、苦しいものですから、あの並木の松の根で休んで居りますの。あゝ美しい事丁度月が松の枝にかゝりました。光こそ夏の夜におとりますけれども、其あはれさは、春の夜の月に限りますね。あなたもきつと、あの御庭の櫻の花の下で、この月を見ていらしやるでしやうね。どんなに美しいでしやう。そして、あの苔の一ぱい生えてある岩の根の胡蝶様にも、この月はもれて、御欺の袋は、もしほころびる程でしやうね。ちつと御さらし下さいな。このさみし暮らして居るあはれなこのあはれな友に。しかし、朝の榮も夕に散る花の運命ですから、昨日今日は、そろ〳〵あの美しい花も散りそめるでしやう。あゝ、もし、とても、今年は一所に花かげて、うたふことも出來ませんね。けれども、蝴蝶は今頃再び咲くあの世の花の梢て樂しく遊はるゝと、待ちわびて居るでしやう。あゝ、あはれと思つた蝶の運命も花の行末も、今は返つて楽しくなつて來ました。あゝ、ほんとに私はつまりませぬね。千鳥さへ友呼びかはす里に、只一人の友もなく、日日ぶら〳〵と暮らして居るのですもの。あら又出ましたね。あゝ、もー、こんな下らないぐちはよしませう。又文樣にしかられるから。何も終生こんなじやありませぬから、私もはやくよくなつて、今度は蝶も花も楽む程樂しく暮らしましやうね。其頃はもはや、あの花は、木立採うなつて居るでしやう。そしたら、私が此間つくつたハンモックをつろうぢやありませぬか。はやくそんな時が來ればいゝにね。月はいよいよきれいですけれども、大分寒くなつて來ましたし、向ふからばしやかさがしに來た樣子ですから、もーよしておきます。このもしぐさは、いつも目なれないのですから、まだぬれて居りますけれども、お送りします。どうぞお鉢を御大切に、さよなら。

## ○若菜を贈るに添へて　和歌山縣　小川敏子

しづしづと降り出だす春雨に、垣根の梅もほゝゑみそめていとうららかなるに、心なんとなう浮き立つものから、家の子三人四人と打ち連れ立ちて、程近き小川のあたり物しはべりぬ。うら〳〵とかすみ渡れる空のいとのどけく、鶯の來なく聲のいとゆかしきに、こゝかしこ育みわたりて、若菜のもえいでたるなど、いとめづらしくおかしうて、あるは雪ふみわけ、あるは小川に袖ぬるるもいとはずして、摘みとりしに、いつしか籠にみちしかば、日の暮れぬまにとて、そを持ち、家にかへりしを、いさゝか分けてまゐらすになん。春は中々田舍よりけしきだつものと知り給はゞ、春のくれぬまに一度は御車をまげさせ給ひてよ。今よりむしろの塵を打ちはらひて、待ちはべるになん。かしこ

## ○妹を失ひし友の許に　長崎縣　嬉野益子

花は根に鳥は古巣にたち歸り、青葉しげる木の下陰に來鳴く山時鳥の聲さへ、血をはくが如き今日此頃、さらぬだに涙ぐまるゝを、あはれかなしくも、いたはしき御事こそ承はり侯へ。御受妹露子の君には、散る花の跡したひ給ひ歸らぬ旅に出てましゝとか。さぞ〳〵母君御許樣がたには、御名殘をしくおはしましならん、思ひやる身も共に袂をぬらし侍りぬ。

咲きみちし櫻は散るををしまれど、
　つぼみの花をなど散らしけむ。

あゝ、無情の夜嵐は、つぼみの君をうばひ去りしか。さは云へ、天には神のおはすものを、

獨行く旅と思ふな、いつくしみ
　溢るゝ父は、君を導く。

あゝ、天の父は、彼の君を天つみ國に伴ひ給はんを。御許樣にも、かまへて御嘆きのあまり、御大事の御身をなそこれ給ひそ。先は落つる涙に筆そめて、取り敢へず御悔みまで。



# 短篇小說

廣津柳浪先生選

天

## ○歸らぬ姉

小石川久堅町七十四　並木みどり

「母さん、今頃姉さんは什麼して在しやるでせう、」

冬枯の淋しい風は破れ障子にびり〳〵と怪しき音を立て、五分心の薄暗い洋燈の下に母のお露は一心に針を運ばす傍、讀書の復修に餘念なかつた十二三の愛くるしい千江子は突然斯ふ問ふたのであるが、母の答なきに重ねて

「チエ母さん、」

漸うお露は針持つ手を緩めて

「もう〳〵、しづ江の事など言ふのではありません、大概今頃は罰が當て此寒さに路傍へ凍え死てても仕舞たでせう」

「まあ……」と千江子は呆れて母の面を仰ぎ見たがパッチリとした鈴の樣な眼には少なからぬ愁の色をたゞよはした。

お露は針の運を止めて灰計りに成た火の氣なき火鉢に手を翳しながら

「阿麽親不孝な兒はありません、稚い時には身躰が弱く隨分苦勞を懸けたがお前が生れてから少しは壯健に成たと思ふと、お前は知るまいがお父さんはあの通り漸と三日か四日の病でお亡なり……」昔の面影の偲ばれてか微かに嘆息を漏し思はずホロリと溢す雫は灰に落ちた。

千江子は始終俯向勝ちに是れも瞼には露の玉を宿してゐる。戸外は木枯吹き荒む、お露は倚力なげに語を繼ぎ。

「それでも尠少計りの遺産を幸ひ如何かして此立花家を繼がせ御先祖の御位牌に對し辱かしからぬ樣にと女には不相應な學問迄さした揚句が……千江さんお前に迄還麽見絎な態をさして、最う〳〵親とも子とも思ひません。」後はえ言はず淚のみハラ〳〵と灰を濡す。

千江子は何と語も出ず母の顏を覗ては少さき胸を痛め

るばかり、雨が加はつたかバラ〳〵と窓に音がした。
「千江さんもしづ江の事など想ふのではありません、最うしづ江はお前の姉さんではありません。
「妾……」何か言ふとした千江子の語をお露は遮て
「いゝえ、もうようござんす」お露はうるさしと言はん計りに
「千江さん、もう寝ませう、」
床を延べやうと力なく立ち上る折柄。
「立花さん郵便ッ」
走り出でんとする千江子を押さへて、静かに戸を排け先づ裏書を見るや其眼には異様な光を放た
「何處からッ母さん、」
お露は是れには答へず只封書を見詰むる計り、千江子は心元なさそうにソト覗き見て
「アラ、姉さんからネエ」
遖に懐かしさに堪へやらず眼には嬉涙さへ浮めて居る
「母さん早く讀んで頂戴な、ネ母さん」
火鉢の向に座た母に千江子は慫う促したのである、お露は無言で封押切て披けば、いと優しき水茎の跡亂れて
一筆申殘しまゐらせ候、今更お手紙さへも差上げらるべき身に之れなく候へ共、妾が一生のお願ひに候へは何卒一通りお讀み下されたく願ひ上げ候
妾事餘りの淺墓なる心より海山の御恩あるたつた一人の母上様に此上なき御心配お懸け申し嘸かし恩しらずの憎きものよと思召されんも、不孝の罪は幾重にもお詫びいたし候
母上様には彼の書置にて是迄の事大方御存知の事を推しまゐらせ候へ共、一時の無分別より勇様と深くも契りを込め、勿躰なけれどお側に侍り居りては迚も此戀協はぬ事と存じ候まゝ、不孝とは知りながら斯様な不始末いたし後悔先きに立たず候へ共、かへす〴〵も不孝の身よと今更面辱かしく前非を悔ひ申し候。
勇様去る日妾の留守の間に宿を出てしまゝ今にお戻りなく其行衛を宿の者に尋ね候へ共もとより知る筈なく若しやと室の内あちこちと改め候ところ、重立ちたるもの、一つもなく、始めて此身の捨てられしを悟りしときの妾の胸のうち如何計りなさけなく候らひしか想ひ出すさへ口惜しく、日頃母上様の御教訓身にしみじみと悟り申し候。
宿の者の情にて今日迄は過し居り候へ共何時迄斯くあるべきやうもなく、さりとて今更母上様にお詫も申さ

れず行衛定めぬ捨小舟、便るべき島もなく、靜かなる夕雁の聲を聽きては懷かしき母上樣や千江子の身を思ひ浮べ、又は更け行く夜半梟の泣くを聽きては此身の行末を案じ、明け暮れ心を痛めし末、一層此身を殺してと思ひ定め候。

されど死ぬる際にせめて千江子にも一目遇ひたく候へ共、母上樣の御許しも如何かと是れのみ心殘りに候、今宵三途の川へ身を投げ相果て申すべく先き立ちまする不幸の罪は何卒御許下されたく父上樣には冥土にてお詫びいたし候間、妾亡き後は不憫と思召一片の御回向賴み上げまゐらせ候、御老躰お大事に千江子の出世陰ながら祈り上げ候。

何々申上たき事濱の眞砂の數多く候へ共、死出の旅路を急ぐものからあら〳〵かしこ



彈琴 〔地賞〕 熊本市 鵜れい子

評 哀に、じみな着想、遣書の文章もわざとたくみを弄さずに悲しく出來て居ろ、書きぶりのおちついた處は優に小說を作り得る伎倆も見えて賴母しい。

地

## ○心の底

長野市田町二九 飯塚ぎを子

（上）

「岸田さん、岸田さん。」ばたばたと廊下の方からやにわにかけだして來たのは、銘仙の着物に蝦茶の袴を胸高にしめた女學生。

遊歩場の片隅にたゞ

同じ服装に紅のつやつやしたリボンを結だ、友のかたへにさし寄て肩に手をかけ同情のある眼を以て四邊をみまはしながら。

「ちよいと、岸田さん、どうかなさつたの、お顔の色が大變わるいようね、それとも、また、藤井さんや、佐伯さんが、何かおいゝなさつたの、アラあなた泣てゐるの」と、意外の樣子にいそがわしく袂からハンカチーフをとりだして「さあ、これでおふきなさいよ、みつともないは。」

「えゝ、ありがとう」と、やがてハンカチーフはしなやかなる友の手に握られた。

「私。ほんとうに殘念でたまらないのよ」と、いふ言葉さへうちくもつて、とめどなくあつい涙がはらはらと、頬へつたはてゐるが別に拭こうともしない。

「岸田さん、もうかまはづにいらつしやいよ、藤井さんや佐伯さんは御自分のことは皆お棚にあげて、いろいろなことといふのがあの方逹のごく惡ひくせ、一寸でもきにいらぬとすぐあれこれと人のあげあしばかしとる方だから、まあだまつておいてなさいよ、」

「それても、こんどといふこんどは私だつてだまつてゐられませんは、あんまり人を馬鹿になさるもほどがあるは、なんぼ級がしただからつて」と、ハンカチーフて顔を覆うたなりすゝりなきをしてゐる。

「岸田さん、そう激しちあいけませんよ、あなたは神聖なるクリスチャンていらつしやるでしよう、その人をにくまず其罪をにくむといふお心で」と、さもなだむる樣に脊をさすつて眼には玉なす涙がいつぱい溢れてゐる。

「私だつてそのくらいな考へはないてはありませんが、あんまりてすもの、三井さん」と、おちくる涙うちはろうて、友の面をうらめしそうにながめてゐる。

今まで運動場のはるかむこふの方で、餘念なくテニスをやつてゐた同じ年輩の友つれだちて、何事をか語りあつて此方へとやつてきた。

そのうちたけたかき背のすらりとした夜會結に白リボンをつけたのが、たゞごとならぬ樣子をみて、

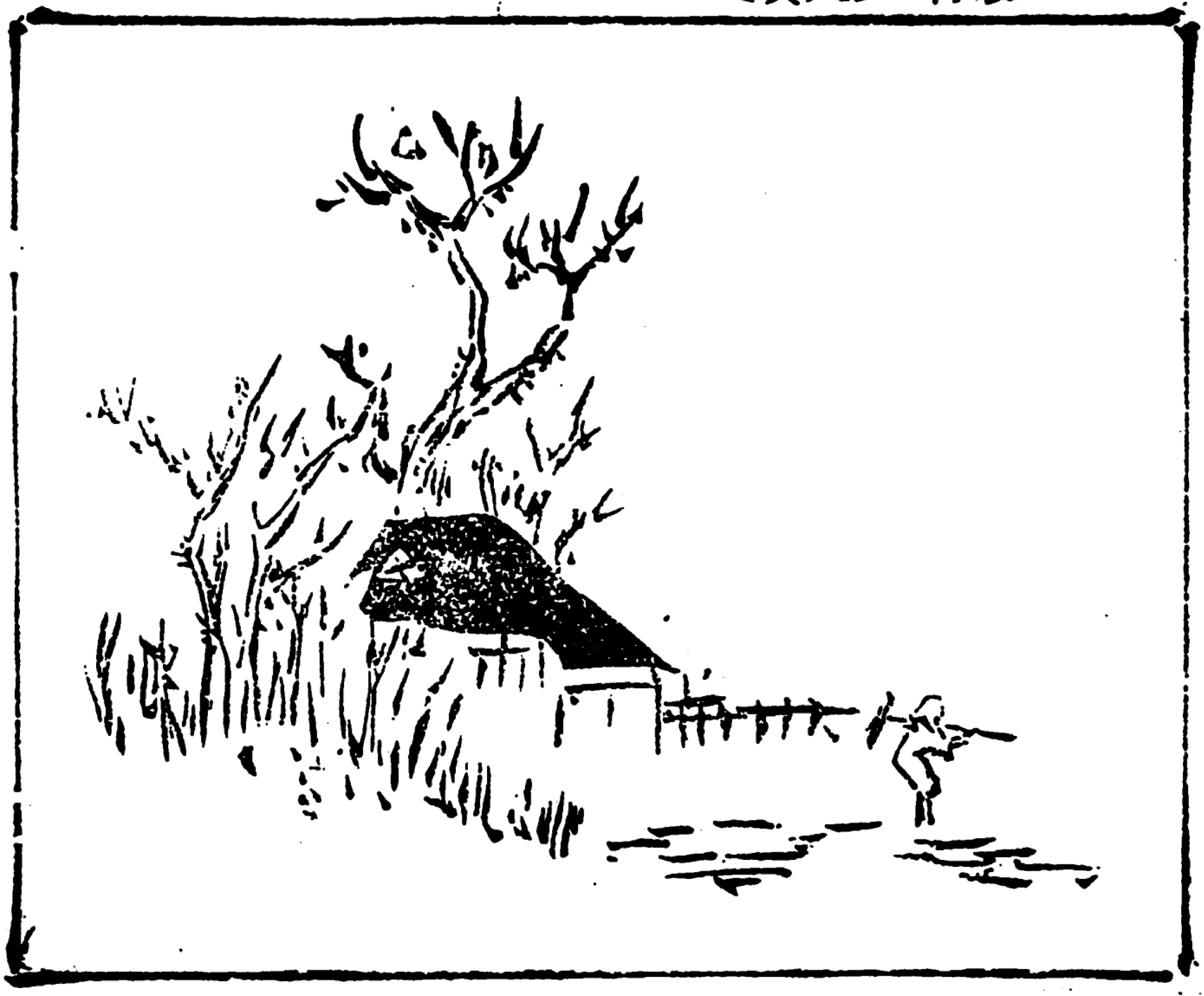
「三井さん、岸田さんはどうなすたの」と、いぶかしそふなおもゝち。

「藤井さんや佐伯さんが、何かおつしやつたのでしようよ、」

「何に、また、よくいろんなことといふかたねえ、ほんとうに、わたしも」と、岸田秀子の方へ皆の視線はあ

つまつたのである。
「岸田さん、もう泣くのおやめなさい、くやしいつて、お察しますは、だけどだまつておいてなさいよ、おやまあ、めのふちがあんなにあかくなつて」と、すかすように言ふてゐる。
「ほんとうに、くやしくつて、くやしくつて」と、何思ひだしたのかまたなきだしたのである。
これをみてゐたかたへの學友は思はず袖をしぼらざるをえなかつた。
「ねえ、岸田さん、藤井さんや佐伯さんは校中意地わるの評判のたかいかたゞから、あんなお方にとりあうとかへつてあなたの損よ、それに貎もうへだし」と、秀子を取圍んて交る交る慰めてゐる。

寒村〔入賞〕　神奈川縣　小野雪枝子



始業のベルはいつもより氣のせいか高くひゞいて、どやどやと敎室へいそぐ幾群。
「あら、もうぢかんだわ、さあ岸田さん行きましよう」

（下）

「私ほんとうに、あなたに對してすまないことをしたと思ふてつくづく考がへるのよ」と、永の病に髮もところにかきみだれて、昔日の面影もどこやらうせて、痩せ衰へたる雙の手をかいまきの袖からさしだして、枕に身をよせてゐる姿は健全であつたときの藤井てつ子とも思はれぬ。
「あなたはたいそうおやつれなさいましたね「と、秀子は友の面をみまもつてこう言うた。
「あなたにそんなことを言はれると、心ぐるしくつてならないの、なぜあんな心を起したのでしよう、それ

にもかゝわらず、姉妹もおよばぬ御親切は」と、たえぬ思がまゆのあいだにありありとあらはれてゐる。

「いゝえ」と、友のことばを岸田秀子は遮つて、「私は心にはなんともおもふてゐませんの」と、すこしい雙の眼をみはつて。

「でも、わたし以前のことをよく考るとなんだか」と、ことばさへとぎれがちに「私思もへばおもふほどあなたにすまないことをしたとおもふの、かんがへればまへに私のしていつたことは女の道にそむいてゐたのよなんてあさましいことをしたのでしよう、それを別にお心にもかけずして、訪れて慰めてくださる其おなさけは、眞に」と、感にたえぬのであろう、かいまきの袖口でめのあたりを拭うてゐる。

「藤井さん、もうそんなふるごとはいくらいふたところで、しかたがないは、それよりまへのことはお互にみづにながしてしまあふではありませんか、そうしてあたゝかい平和なおつきあいを致しましう」と、ごくおだかな口調である。

「もう、もう、そんなことをいふていたとくとかへつて、過去の罪悪が一層身に泌みて」と、枕の上になかば顏をうつむけてしまつた。

「ねえ、藤井さん、そんなこと思てはからだにさわるといけませんから、もうすぎさつたことをとやかくいつたところでしかたがないは、それよりゆつくり御養生でもなすつて、學校へでもあなたがおいでになるのを待つて居ますの」と、どこまでも溫和なる語勢。

「これほどにもあなたは、わたしを」と、いまゝでうつむいてゐた顏をもたげ、ぼうぼうとたれさがる髮の毛をうしろの方へとうるさそうにおくりやつて、友なる藤井は「秀子さん、岸田さん、あなたは私の罪をゆるしてくださるつて、まあなんだかもつたいないような氣がして」

「ゆるすもゆるさないもないことよ、お互につみがあるんですもの、これから心をいれかへて新人になりませう」

かたりをはづたとき、藤井の顏は涙をもつてうるをつて、眞珠のように頰のあたりにつたはつてゐる、二人はしばし無言、やゝあつて。

「ごめんあそばせ、わたしがわるいのです」

「わたし、うれしくつて」

いつのまにやら秀子の右手は哲子の左手に、哲子の左手は秀子の右手にと、互にひしとにぎられてゐた。

其後、ほどへて藤井の病氣は癒えた。縣町をさして旭町をのぼつて、毎朝たのしそうにうちつれだちて、讃美歌を清いこえでうたひながらゆく、二人づれの女學生は、まぎれもない藤井と岸田とである。

然し、佐伯はあいかわらず評判はよくないとのことである。

（終り）

評　何と云ふ美くしい物語てせう、筆つきは未だ稚いやうに見受るが思想の清らかさ、女性の徳を發揮して遺憾は無い。



讀書〔賞外〕　近江　柴原春醉子

人

## ○お隣の姉さん

横濱市太田木内家畜病院内　瀟間秀影

お隣りの姉さんは此頃どうしたのだろう、何時〳〵、秀ちやん〳〵つて可愛がつてくだすたのが、此頃は僕を見ても、だまつてへんな顔をしてる、僕が君江さんや、盛夫さん等と喧嘩したり、ころんだ時なぞは何時でも家から出て來ては泣いてはいけないよ、秀雄さん好い物あげやうては僕の手を引いて姉さんの家へ連れて行つてはお菓子や色々面白いお話をしてくれたので僕は僕の眞當の姉さんのやうに思つて居た。昨日姉さん處へ遊びに行つたら姉さんがお庭の築山の後で何か瞻乎として居たから、そつと行つて姉さんと影から姉さんと呼んだら吃驚しておゝ秀雄さんかつて僕の手を握つて秀雄さん、秀雄さんの兄さんにお嫁さんが來るつてね‥‥秀雄さん嬉しいでしやうと言つた。僕は知らないけれども此間、母さんが今に他から坊の姉さんが來るから是れから大人しく、しなければいけないつてね、母さんが云つた、姉さんは側の方を見て何か、考へて居たから、

僕はつまらないので直ぐ家へ歸つてしまつた。

*　*　*　*

四五日立つと姉さんは病氣だから鎌倉のお伯母さん處へ行くのだと僕に言つたので僕は淋しいから早く歸つて下さいと言ふたけれど、三日立つても十日立つても歸つて來ない、あゝ姉さんは今頃何して居るだろう、矢張り琴を彈いたり唱歌を歌つたりして居るか知ら。

評　楚々たる小品、子供の口を藉りて失戀の人を寫す、短いながらに整つた處があつて趣もあれば姿もある。

秀逸

## ○野道

茨城縣土浦町　しらつゆ

夕榮の光もいつか夢見るやうに薄らけば、空とぶ鳥は鎮守の林の中に落ちて、遠くの森影は黑ずんでゆく。この淋しい野邊を、薄ら寒げな肩付て、彌助老爺は只管行路を急ぐのであつた。

と、不意に立止まつて、肩の小風呂敷をゆすりあげたが、つと懷へ手をやつて、一通の手紙らしきを打返し〳〵見いつたが、

「ア、見せてやつてからが、思はれるだ」

ホッとばかり、空を見上げて吐息一ッ。

「泣かれべーな、さぞ泣かれる事だんべーよ、無理もねへ尤だ、なくてなんねへ其人が、兵に出てさへあとの難義は、一通りや二通りぢやねへだのに、今はもう死にました、形身としてはこの髮毛…と明けても暮ても無事で歸つてくるやうにと、待ちこがれている其中へ、戰死の模樣を知らせたら、さぞ打驚て泣くだんべーよ、ア、いつそ知らさずに歸つちもうか…が、まてよ、息子があれ程、松田君が云々だから、遺族の者へ一刻も早く知らせてやつてくれろつて、忙しい中からくれ〳〵も云つてよこしたものを…けれど遲かれ早かれ御上から御沙汰があらふ…だが夫迄も、死んだものを生とる〳〵と思はせておくも氣の毒だし…

…仕方がねえだ」

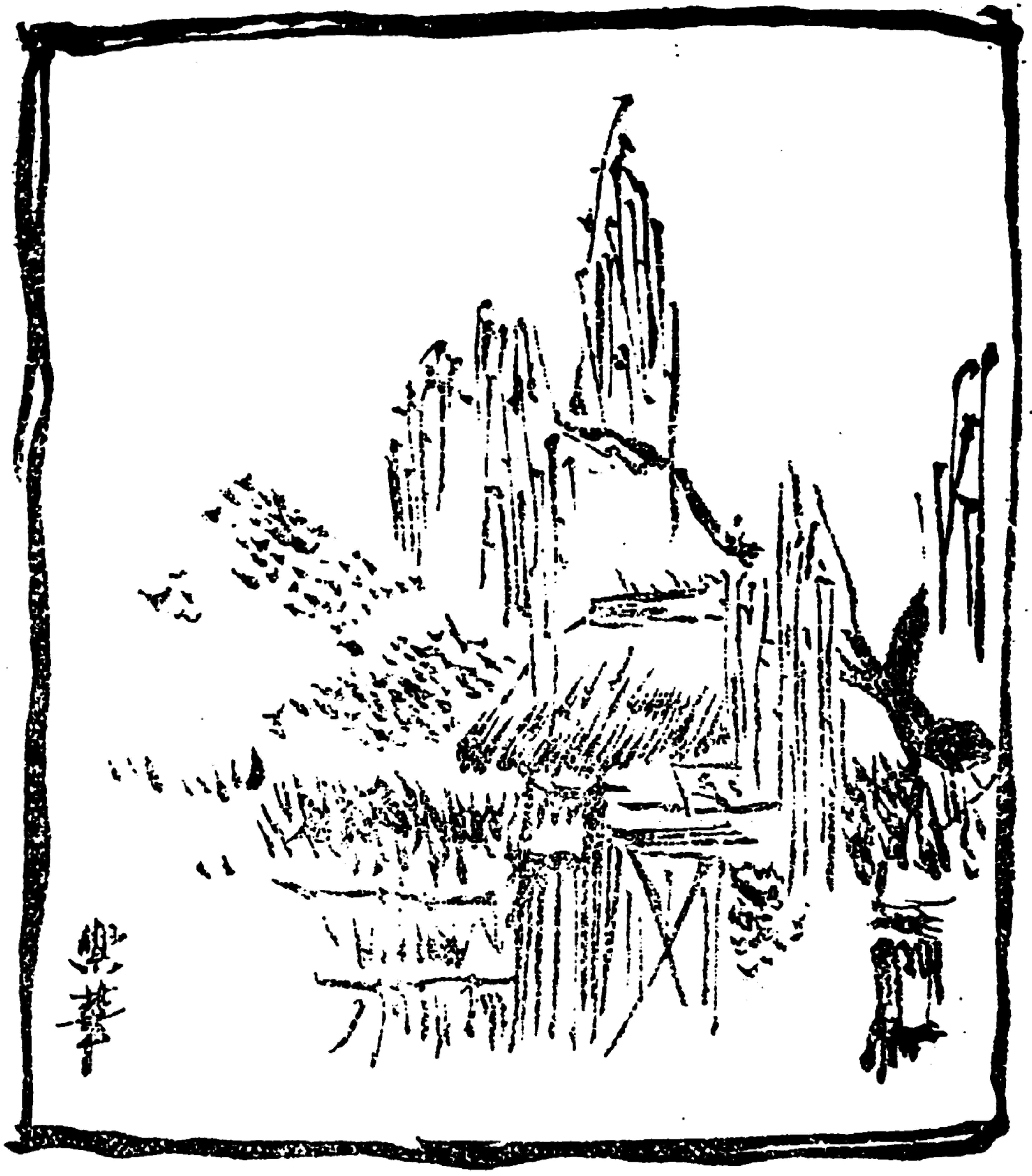
つぶやき〳〵弓なりの腰一ひねり、首垂れたまゝ行手を急ぐ。

と不意に、「アヽもう」と思はぬ聲に振返れば、下髮リボンノ十二、三の可愛娘が、弟らしい子の手をとつて、物問たげな風情である。

日は最う餘程西へ沈んで、黃昏の色は刻一刻、其翼を

廣げてくる。
老爺はいぶかしげに、
「お前樣等、なんだかね」としげ〳〵と二人を見入ると、につこと、可愛眼で笑みかけて、
「ア、この先に、お稻荷樣がありますか」
「稻荷樣、ア、さうだ、ありますだ、この先の林の恰度、眞中頃にありますだが、そこへ何しに行かつしやるだね」
解せぬと見やる老爺の頰を、颯と强く夕風が撫て過た。
「ホー寒い風だ、この寒いに、お前樣等早く家へ歸らつしやれよ」
「いゝのよ、寒くつても、私お稻荷樣へいきたいから」
「ハテナ、寒くともいゝだかね」

初春　〔賞外〕　愛知縣　平野樂華



「ア、私一生懸命なの、お願かけたのですもの」
「願かけたゞかね、ぢやそこまで一緒にいきますべーか」
と思はぬ道連。
「あのおぢいさん、お稻荷樣の後に、澤山草がはいてますか」
と女の兒は顔を見上げた。
「ア、あの廣い平地の處だかね、あそこへは草もはへれば、秋になるといろんな花も咲くてがす、だがの、今時分ぢや何もあんめへよ」
「いゝへアノ花ぢやなくつてよ、只一ッ裏葉の赤い、小さな草がほしくつて‥‥」
思ひいつたとやうに語尾に一際力をこめたが、
「ありましやうかしら、只一ッ、お父樣に御負傷がな

いやうに」
「花でなくつて只一ッ、裏葉の赤い小さな草、それで御父様にけがゞない、はてね、わかんねへだ」
と首を捻る。野路の柳はざわ〳〵と風にそよいだ。
「ぢやアね、お老爺さんに話してよ」と見あげ〳〵。
「私、御母様可哀想で〳〵……」
振の袂を顔にあて、暫言葉を途切らせたが、やゝあつて、
「アノ私の御父様、戰にいらしつたの、あとで意地悪のお祖母様、御母様をなんのかのつて、そしていやなおぢさんもくるんだわ、御祖母様は眞のお祖母様ぢやないのよ、御父様にもお母様にも、だからお母様泣いてばつかり、只御父様におけがゝなくて早く歸つていらつしやるやうにつて……私泣顔見るたんび、御父様早く歸つてくるやうにと、家にいてゝ、御稻荷様へ御願かけたの、そしたらね、一昨日の晩御父様歸つていらしつて、御稻荷様の後から裏葉の赤い草をとつてくれろ、それをもつてるとけがゞないからと仰有つたの、アヽ嬉しいとかけよつたと思つたら、夢なんだわだけどどうしても夢ぢやないやうな氣がするの、あり〳〵とみたのだもの」

そして草のあるとこまで
「其時はこう、空がぼんやりして、月が細くて」
と空を仰げば、首の上にキラリと一ッ天の秘事を語りさうな星がまたゝきそめた。
「恰度今と同じやうな時だつた、だからどうしても夢ぢやない、夢ぢやなくて、いけば決つと御稻荷様の後の處に、裏葉の赤い草があるに相違ない、その草をとつて御父様にあげたなら、おけがゞなくて早く歸つてくるわ、歸つていらしつたら、母様がまアどんなに悦ぼう、私達も嬉しいと思つて、武さんと二人して、家をぬけて、人にきゝ〳〵やつとこゝまできましたの」
老爺は何に感じてか、無言に歩み乍ら瞼を連叩いていたが、二叉道の其處へ來たので、ハッと氣付いたらしく立止まつた。
「アヽ感心なこんだ、俺はな、此處から左へそれなくちやなんねへだから、お前様等二人して其草とかを、取つてきさつしやれ、だがのー、もしなくとも早く歸らつしやれよ、最う日がなくなつてしまつたゞから、俺一緒にいつてやつてもいゝんだけんど……」
「有難う、けどもいゝのよ、二人してとりますから、日が暮れても月の光でわかります、こわくも思はない

のよ、御父様の御無事の御顔がみたいから」
ヅボンひらめかして可愛頭を靜に下ると、頰かむりぐいととり、慌てゝ老爺も禮を返した。
「ぢや早く戻らつしやれよ」
二三歩前へ進んだが猶も後へ心が殘るか、行きがてにしてまた立止まつた。
「ようがすか、早く歸らつしやれよ、そして御前樣等どこから來なすつたじ」
と呼びとむれば、振返つて、
「有難う、家は眞瀨の松田つてへの、早く歸つてよ」
とばかり行き過ぎた。
「エッ、松田、眞瀨の……」
懐の一通堅く握りしめて、大理石の如く、老爺はそこに立すくんだ。
月は細く、星は斑に、風に寒げの後影、じつとばかり見送る眼は怪しく曇つて、老爺はいつ迄も〳〵佇んでゐる。

畔道〔賞外〕　武藏　平本喜代子



評　此作も優に群を拔いて居る、田舎言葉は少し怪しいけれど能く其人間が浮動して居る、處々に挿んだ叙景の筆もわざとらしくない、蓋し小説投稿家中の上手の一人と認める

## ○磯邊傳ひ

麻布　五藤よし子

風穏に天朗なる小春日、海は一面に凪ぎ渡りて名にし負ふ鎌倉の濱、江の島は近く蜿然と海に横はり遥かに白帆二つ三つ見ゆ。
折しも長谷の方より下り來りし二人の男女、こゝ磯邊づたいに、徐かに歩を運びて睦まじげに語り合へり。
男は年紀二十三四の身材高く、身に海軍少尉の軍服、

着け、筋骨たくましく天晴の武者振り、やがて戰場に高き功勳の程思ひやらる女は十八九の蕾ける如き花の顏、夏瘦の末だいえぬにや、清楚更に人を動かす、黑目勝の眼は濕み聲も顫へ、

「妾嫌よ〳〵よどうしてもいやよ、今更貴郞と別れて………」

「でもよく考へて御覽なさい、僕はこれでも帝國軍人の一人ですよ、軍人たるものが一度出征したなら再び生還は期すべきでない、若し僕が討死したらば貴女は如何する？獨身生活。然しそれはいけない、貴女は加藤家の一人娘でせう、そうすれば加藤家の相續人だ、なに僕が相續人、うむ、それは養子たる資格で來たのです、けれど未だ式を擧げた別ではないぢやありませんか？……」

女は只頭を振りて泣くのみ。

「チー美代さん貴女が他に養子をとらなければ僕は實に困まるですよ、何故つて僕はあとに心が殘つて十分に國に盡す事が出來ん。チー美代さん僕が願ふのだから、」

士官は頭を低れて足の向ふまゝに汀を進みしが猶言葉をつがんとして顧みれば、美代は側にあらずして四五間後の波打際に泣けるなり。士官もさすがにその心情を哀れと思ひ、少しく進寄りて、

「美代さん、もし美代さん何故泣くの？僕は美代さんを憎いと思ふて云ふのぢや無いのですよ、エ美代さん僕は貴女より愛する人は他にないのだ、美代さんの身を思ふから云ふので、決して惡く取つては困りますよチー美代さん分つたでせう。」

美代は始めて士官の心情を解せり、あゝ君は妾を思ふて他に養子をとれと勸め給ふか、眞に嬉し忝けなし、然れど君は未だ妾が心を知り給はず、その有難き御言葉こそ我身にとりては反つて仇なるに非ずや。漸うやうに取亂したる泣顏を振擧げて重き瞼の露を拂へり。

「武夫さん貴郞は未だ妾の心が御分りになりませんか妾の躰軀は己に貴郞に捧げたもの、若しやの事があつて貴郞が御討死でもなすつたなら、貴郞の御名譽：：チ妾だつてどんなに嬉しいか知れませんそれに今、貴郞が妾を御見捨なさる：：：あゝ恨めしゆう御座います、」

更に落つる淚を拭ひつゝ

「丁度世の中の貧しい人が急に金持になりて、昨日までの親しい人達を遠ざけることゝ同じではありますま

いか、」

士官はいたく美人の心に感じけん、胸せまりて答なきこと霎時、松風の音、耳に立つ。

「これ程迄に申しても御聞入がないのならよろしう御座います、妾も戰地に參り國の爲めに幾分かの御力にもなりませう、して若しや貴郎が御討死なされた其時は、妾もその御側で……。」

士官は今更驚きて美代を見かへる、美代は顏を掩ひて俯けり。武夫―士官は美代が風吹かば倒れ失せぬべき姿なるを見て何か深く心に決する處ある如く聲も明かに且つたしかに、

「あゝ僕が惡かつた、ヨ美代さん實に僕が惡かつた、美代さんの心は淸い淸い、眞に惡かつた、僕あ僕は決して美代さんを見捨てはしない、美代さんは僕の〳〵最愛の妻だ、玉椿千代に八千代に……ヨ美代さん。」

美代はこの言葉に甦へりたる心地して急に面を上げ顫へ聲に、

「エほんとう、武夫さん、オゝ嬉しい。」

評　達者に書かれてある、殊にお美代が士官を怨むあたり、對話と云ひ地の文と云ひ紅葉の金色夜叉中、熱海海濱の場の筆致をまなんだものらしいと見たは僻目か。

## ○見はてぬ夢

愛媛縣　加藤秋月女史

ちやうどお節句であるからお朋友などは皆それお花見のそれ汐干のと、お支度に大騒ぎをして居るのである自分は獨り、此樂しい日、やさしいお友人を後に其日正午前に朝川の里、住馴れし杉村家を出立し歸京の途についた、なぜなれば一男さんが歸京したといふ報に接したからであつた。美しい山、川、谷間、野原を窓外にながめつゝ、雜踏して居る幾多の停車場を經て、何時しか夢の間に新橋へ着いた急いで車を走らし、麻布區材木町のなつかしい我家の門前にとゞまつた、まだ下車ぬ内になつかしいお母さまや戀しい妹や弟が走せて來た、其嬉しい笑顏に迎へられておぼろ〳〵に家内に入つたが、早自分は昔戀しい庭園に向ふた居間に妹の美ちやんと相對して座つて居つた。河合の兄さんは米國からお歸京になつて折々は被入るかいと美ちやんに尋ねると、美ちやんは愛らしげな口を開ひて、はあ！二三度ばかり。昨日ね、兄さんも今度理科大學へ御出勤になるやうになつたとかで上野の精養軒で招待會とかゞありましたとかでお歸途に一寸立寄りましたよ、姉さんはまだ歸京ぬかと尋ねて被入ました、

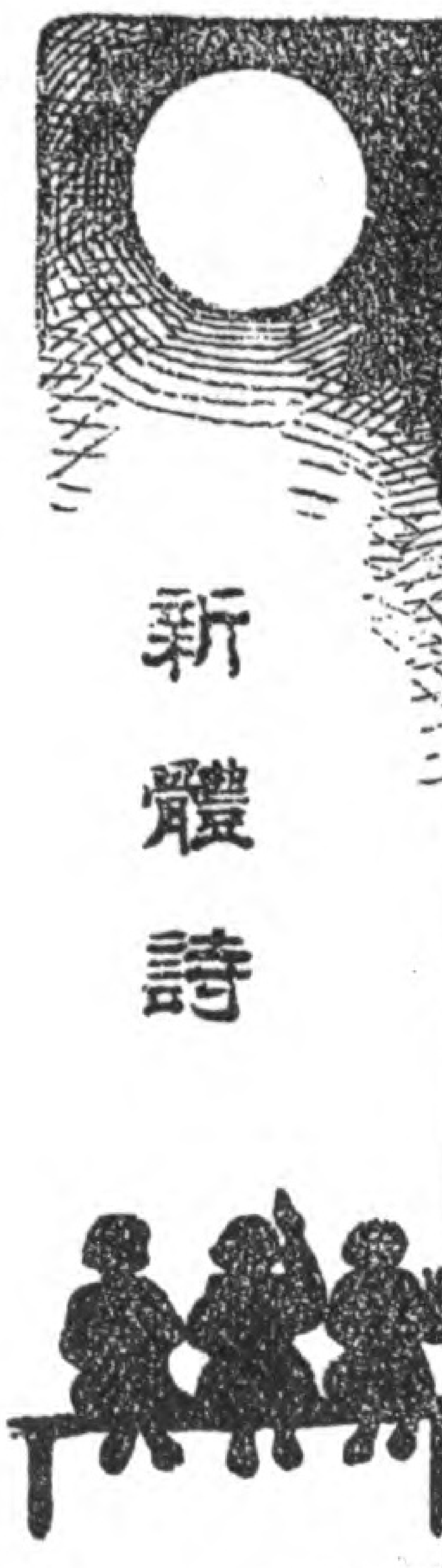
姉さんと一段聲をひく、思ひ入つた樣な顏をして、兄さんはお近ひ内に數美さんをお嫁樣にお貰ひなさるかも知れないのですッて、私數美さんは、兄さんの樣なお優しいお方の奥樣になられたらどれ程おうれしい事であらうかと思つてよ。と斯く無邪氣にわれに語るのであつた、嗚呼妹はわが心の秘密を知らぬのであらう。それを聞き終つたわれは早胸はドキ〳〵と早鐘でもつく樣に動悸が打つて止まぬのであつた、然しまだ半信半疑で有つたから聲を慄はせながら、美ちやん、それは眞實？と問ふた。眞實ですとも、此間兄さんが横濱からお歸りになつた日被入つてお座敷でお母さんとお話をして被入ましたよ、又何か澄ちやん〳〵と姉さんのお名もよんで居られましたが其時は私お次の間で春雄ちやんと畫報など見て居ましたからよくは聞かなかつたのです。と答へた、最早其時は悲しさ、くやしさに胸がせまつて、涙がほろり〳〵と膝の上にこぼれた。胸はせまる、上氣する、座に堪へられなくなつて立つた、庭に降りた、庭下駄を引かけて飛石づたひあなた此方と庭をめぐつて中島の吾妻屋に至り、そこの椽に腰を掛けた、其れから唯前後も、知らず深き思案に沈んだのであつた、久しく見なかつた庭の狀形は昔に變らねど、時も時とて、彼方の櫻、此方の梅の花、さては池の中島にある桃の花、芝生の菫、いづれも色香を競ふて咲いて居る、然し其方には一向心もうつらずたゞ築山の間の小さい谷間をシャブ〳〵と流れて居る水が如何にも悲しげに聞えて、しみ〳〵と心は悲歎の淵に沈むのみである。まあ數美さん!!!嗚命、とわれはつぶやいた、數美さんは私の親友、從姉、其れに、一男さんのお嫁さまに……何しても信じられないわと、獨語に、嗚呼、今に忘れぬ三年前、一男さんは大學御卒業になつた年、自分は築地の女學校を卒業する前の年、夏休みの事であつた、あの大磯の別莊へ避暑に行つた時、烈日の夕方、あの濱邊へ出てガジ〳〵と眞砂地を歩むで居たがあまり足がだるくなつたから彼の岩の樣な石に腰を掛けて、さも面白さうな波打際、そこに小さい杙に繫がれて、漂ふて居る小舟が波に打たれてはかへり又さられして居る樣などを一心にながめて居た、するど突然後からポンと肩を敲かれたのでびつくりふり向ひて見るとニコ〳〵笑みを含んで一男さんが立つて居られた。あら兄さん何時の間にと問ふた、すると先程の列車で來たが御散歩と聞ひたからのそのそやつて來たのだ、と云はれた、其れからすぐと歸つ

たが一時間ばかりの後御自分の別莊へ御歸り遊ばした。後で只一人何だか急に心細ひ樣な感じがしたから雜誌でも見やうと其處に一男さんが見て居られたばかりの『心の姿』を取上るとバッタリ小さい紙包が落ちた、何であらうと恐る〳〵取上て見ると、其前年お父さんが此世に居らつしやる時兩人に同時に買つて下さつた、一男さんのは河といふ字が入れてある、あゝ此指鐶であつたのだどうした事かと思はず其紙を見ると美しい水莖のあと、僕が米國から歸國迄此大切なる伯父さまの遺品あゝ此指鐶を預ける必ず僕と思ふて共に成功を祈つて待つて居てくれよとの文意が書きこめられてあつた。其時は自分の心は何處如何なる道にさまやうて居たのであらうかわが身ながらも明らなかつたが、お父さんのあの時のお心が止まつて居るのであらうか？か丶る時にとて買つて下さつたのであらうか？と獨り指鐶を抱いて泣いた。其れから二十日間ばかりの後共に歸京したがお互にもう何も云ひ出さなかつた只一入一男さんを戀しい慕はしいと云ふ念が一時もわが胸裡を去らぬのである、一男さんも一層愛して呉た互に慕ひ慕はれて何時しか其夏も過ぎ秋の末つかた米國へ向け渡航せられたがお袂別の時にも米國からのお手紙にも何時も同じ事が繰返されてあつた、今日迄も自分は堅く其お言葉を守つて居たのだ、他所から幾多の緣談を申込まれたが一一無氣に拒むだ、最其うるさひ事を聞くのがいやさにあの片田舍朝川の里へ身を避けたのであつた、嗚呼三年の間只ひた待に待つて、やうやく御歸國の報に接し、樂んで〳〵歸京したが、まだ戀しい一男さんに會はぬ內から此悔しい〳〵事を聞く嗚呼、是れがまことであらうか、一男さんに限り其樣な事はあるまい。と獨過こし方を思ひめぐらした、全く半信半疑のちまたに苦しんだ。突然!!!姊さんはお庭にと母家の方に妹の聲がした、誰れか步んで行るらしいふと見ると早一男さんは自分の前に立つて居られた何時か我手はにぎられて居つた只嬉しいやら悲しいやらで何も云はずに泣けるだけ泣いた。

はつと氣が付いて見ると、こはそも如何に身は朝川の里、うら丶かな春の日、ブックにもたれ全く机上の一夢であつた。

評　如何にも女らしい筆つき、筋のわざとらしいのに引かへ情は能く達してゐる、






## 尾上柴舟先生選

地

### ○水仙花

大阪曾根崎中一　田中貞子

運命におちて憂ひ子が、　寂しとのみの冬枯れを、
神のいぶきゝ精を得て、　甦りたる水仙花。
戀の子おぞや紫を、　我世の色と慕ひては、
白きいなむと水仙の、　やさしき笑はくみかね。
濃綠の葉のさゆらぎに、　潮とせまる夕やみを、
白う染めぬく花びらや、　こぼさば露も星と匂はん。

揮灑自在、拘束せらるゝ處なし。結末ことに妙。

人

### ○夕のにほひ

越後栃尾町　ないと

まどひの友よしばしたて　音なき露に心あり
聲なき星にさとしあり　つらきが中の慰藉なれ
げに悲しみのなんだこそ　なほ歡樂のひそむなる
もだえあればぞ人の世は　立ちて夕べの空を見よ
まどひの友よしばし立て

いまだ全く所思をつくさゞるが如しといへども聲調穩愜、着想また清新。

秀逸

### ○拜賀

橫濱市　小林かつ子

梅木の老木は苔蒸して、　木の芽もはるの惠みなく、
若宮廣路春立ちぬ、　遊子たゝずむ太鼓橋。
敗荷の池は涸るれども、　漣に浮ぶ星の影、
松につらなる杉木立、　薄靄鎖す朱宮殿。
一呼四海を叱咤すれば、　聲威は壓す大八洲、
將士前後に扈從して、　昇位を謝する拜賀式。
坤軸くづれ山はさけ、　海はあせなむ世なりとせ、
二心を抱く我ならじ、　祖先の御靈見そなはせ。
縹いろなす空高く、　天つ柱か大銀杏、
枝をならさぬ汝が影に、　隱れし人はそも誰ぞや。
波は不斷の由井ヶ濱、　今も昔を松の風、

榮花傳ふ三代の、
雄圖は止んぬ七百年。

◎露

月の都を立出て、
兄の白露聲あげて、
我白菊に身を濳て、
かゞやく面美しく、
我身下界に降りなば、
戀にやむ胸なぐさめん。

静岡縣　名倉貞子

露は下界に降りゆく、
たのしからずや妹よ、
詩人の詩をば誘はむ、
妹の露答ふらく、
やさしし少女の袖により、

◎沈吟

過ぎこし方をいふ勿れ、
とてもかくても宇宙の、
いかに久しく永くとも、
神がかくせる秘め事も、
手に持つ筆は細くとも、
もえて血走る双の眼に、
思ひの驥にむちうてば、
天雲ふかききはまでを、
あゝ此宏きあめつちに、
終焉まつまつのひと時を、

三膓松翠女史

又行くすゑをとふ勿れ、
盡くべき時は來るなり。
限ある世と知るものを、
つひには闢く期なからむ。
管の小窓に身を倚せて、
人の世のみを見る勿れ。
星の花園數多こえて、
わが世とこそは云可れ。
人の姿とうまれきて、
唯煩悶にすごす哉。

◎「銀鈴」をよみて

月、萬罪を審判して、
突如、空より遠鳴りの、
秋、凋落の藝苑に、
詩にからまりし、玉の緒の、

大阪　岡千代子

天地、靜に眠る時、
潮の動搖みの來る如、
轟きたりな、君が聲。
響、もの憂のこの頃の、

雨雲、奇しき夕暮を、
森の灯影を見つる如、
白き、紫、紅の、
長き短き圓かなる、
整ひたりな、み光の、
あゝ、銀鈴よ、曉の鐘、
森をふまへて、立つ塔の、
番へて放つ金箭や、
人、やぶさかの世なれども、
生、知るものは集ひ寄る。
あゝ、銀鈴は、花の蜜、
朝の霧降る海の面、
愁ひに沈む人の子を、
今、夕暮の水の窓、
絃無き弓の一と節の、

廣野に迷ふ旅の子が、
神よと、口はおのづから。
花はづかしき絹の綵、
雪冴えかへる鳩の頸、
神馬、空ゆく響にて。
一の響に雲を生み、
囊は光るいつくしく、
大いなるもの招せむに、
野分に似たる羽響に、
光を孕む森の色、
大絃、小絃、限りなき、
樂しき國に導くよ。
敬慕の面をうつしては、
音なき歌を奉る。

◎冬の思ひ

筒井にかゝる釣瓶もて、
汲まれぬものは只獨り、
東にのぼる日の影に、
解けぬは獨りかの君の、
霜を送りて吹く風に、
枯れぬは獨り我胸の、
雪を降らして大神は、
掩はぬものは我胸の、

岐阜縣　傍島成子

炊ぎの水は汲みうべし、
君が秘めたるみ情か。
池の氷は解けぬべし、
心にむす氷かな。
野山の草は枯れしかど、
内に萌えたる戀草よ。
此の世の塵を掩へども、
中に籠れる穢れのみ。

◎新征衣

三河國　都筑静子

閨もる風はいやさむし、　海のあなたに兄上が、
手にとる銃の上につむ、　夜半のみ雪や如何ならむ。
はさみの鈴の音も細く、　心をとめてたちぬへる、
いくさ衣ようみ越えて、　み肌にふれん日はいつぞ。
衣重ぬれどかくばかり、　さむき今宵もこの夜半も、
霜ふみ散らし雪蹴たて、　いくさやすらしあに上は。
燈火かゝげよもすがら、　心せきたてたちぬへど、
思ひもいとゞしら糸の、　もつるゝ胸に針重し。

○摘　草　　日本橋　佐久間靜子

待ちまさん母を思ひて　別れたつ夕ぐれの野遊
蝶も共に家に歸るか　籠を持つ右手に戯れ
妹をひく左手に戯る　土筆あり嫁菜數あり
まゐらせん母君にはた姉君に。

○芙蓉花　　德島縣　久保串子

草にかくれし飛石を　たつひ來れば築山や
數奇をつくせし東屋は　藤の落葉に埋りぬ。
昔主のほこらひし　庭の一木の大松は
病みたる人の髪の如　亂れしまゝに老いに鳧。
池には芥流れより　蛙何喚ぶ濁り水
燈籠殘る中島に　渡せる橋も朽ちにけり。
かの大岩の蔭にして　雄々しき色に咲き誇る
昔ながらの白芙蓉　語れよ何の零落ぞ。
夕日の前に愁ひつゝ　昔を想ふ折からに
秋風さつと吹き立てば　花はゆすれてこぼれ鳧。

○神の子なるか罪の子か　　鳥取市　上山千重子

農夫が血汐　いくとせか
搾りて吸ひて　村長の
やがて建てゝし　此御との
ゑんまが堂と　人よびぬ
斧音いまだ　堪へなくに
早も書たり　里の子の
へのへのもへは　白堊に
かぶきの門は　ひとの顔
さはれ書きにし　童らは
神の子なるか　罪の子か

○千曲江頭に立ちて　　長野市　安孫子美子

見よ大江の五十餘里　銀蛇の眠り靜かにて
無象の炎をさめては　浪鞺鞳の音もなし、
嗟偉なる哉曲水の　浩々の流れいつ盡きむ
其一雫掬び見て　詩人の思想極まらず、
嗟此流れ曲水の　末、黄海に連なれる
其一雫掬び見て　佳人の感慨極まらず、
聖曩の詩人眉閉ぢて　地の壯嚴を思ふ時
薄命の佳人浪に俯して　身と逝く水の末おもふ、
聞け其叫び其恨み　讃美と懊恨のある所
今天かける想像の　つばさは暗を掩ひ行く、

○深山の溪流　　千葉縣　翠蹊女史

ほそき調を谷あへの、　靜けき空に殘しつゝ
流れ〳〵て幾かへり、　巖にむせび岸に泣く。

ふかき思ひと溢れては、
遠きのぞみと流れては、
春はさくらの花をうけ、
とはの調をうたひゆく、
そこに盡きせぬ憂あり、
しづかに聞かば永刧の、
朝ふる雨は音もほそく、
あゝ奥山の旦暮に、

早瀬とくだけ瀧とおち、
林にまよひ野べに呼ぶ。
秋は紅葉の色野うつす、
谷のながれを掬ひみよ。
そこに乾かぬ涙あり、
神のみこゝろも宿るらむ。
夜半ふく風は山さわぐ、
誰かきくらむ水の聲。

○園生の淸水

園生の淸水ながれては、
花のすがたの寫るやと、
中の柴がきひまあらみ、
せめて一夜は身を換て、

愛知縣　平野俊子

君がみ池におつるとき、
にごしもやらぬわが心。
流れてくぐる眞淸水に、
君と相見むすべもがな。

○野菊

きせ綿もなく、
　霜にも恐れず、
　　寂しくわらふ、
　　　足ることとを知る、
とびくる蝴蝶の、
　人の子妄りに、
　　恨りもあらず、
　　　足る事を知る
秋もくれゆく、
　自然に咲きて、
　　一本野菊の、

信濃　北原一松子

篠竹なくも、
　露に恐れず、
　　ひともと野菊、
　　　花のこころか、
羽袖も重げ、
　むしりて行けど、
　　妬もあらず、
　　　花の心か、
野末の小道、
　自然にみだる、
　　匂よいろよ、

面壁座禪の、
　沐猴の冠、
　　なほ眞善、
　　　人の世誰か、

聖者は知らず、
　いたゞきながら、
　　美ありと誇る、
　　　此花に似る、

○清けき星

そゞろありきの夕まぐれ
流るゝ水にかげやどす
豐かに笑まふ花うばら
はなのうてなに置き餘る
すゞしき風のふきわたり
岸のみつ枝にてりそへる
流るゝ水にかげやどし
あるは瑞枝にてりそへる

麴町　榊原千重子

名も知ら川の橋のうへ
ほしの光をたれか知る。
名も白つゆのたまのやど
星のひかりをたれか知る。
なつしら波のよせかへる
ほしの光をたれかしる。
花のうてなにおきあまり
星の光をたれかしる、

○秋の野邊を送る

花をしたひて飛ぶ蝶に
エデンの園もかくやとて
實にや胡蝶は舞姫か
さはさり乍ら美しき
舞ふも歌ふも束の間や
運命は終に盡きにけり
靈は再び返るべく
又來む秋を开處に

群馬縣　渡邊不美子

露を慕ひて鳴く蟲に
ミューズの神も下りたゝん
蟲の歌ふは樂の音か
ものは脆しのたとへにて
あはれサタンの妬みしか
されども神の聖旨にて
天つみ國に招かれて
待つらむ

○忍び戀

ふり分け髮の昔より、
今は別れて西東、
風の便にそよとだに、
折ふし忍び出ろなる、

河内　大崎雅子

かたみに戀せし君と我、
何處に君は在すらむ。
問ふ術とても非ざるか、
我が赤心を君知るや。

○雲

ほの〳〵白らむ曉の、
いろどる翠麗しさ、

木二鄕　鵜澤花月

明星の影殘るとき、
五彩の雲を眺むれば、

心は空になりはてゝ、　雲路をたどる我か思、
紫金の色にわき立てる、　かの夕映を眺めつゝ、
遠く床しき大空に、　たふとき光つきせざる、
御國やあると思ゆれば、　何かえ堪へば我が思、

○春聲　　横濱　大島照子

櫻御殿

櫻の御宴開かれて、　御簾捲かれし高殿や、
平安ふりの樂の音に、　舞姫かろき足拍子。
金扇さッとおし開き、　胡蝶の舞の嫻雅かに、
反す紅、袖、裳裾、　花の吹雪に似たる哉。

○女詩人

家まばらなる田舎路、　畔に沿ふたる菜畑や、
垣に緋桃の花咲すに、　詩集に挾みし色紙とり、
何ぞしるして結び往く。

○いさゝ川　　磐城國　絹引しろ子

かばかり濁る世の中に　浮世の塵をよそに見て
水の流れの絶まなく　幽けき歌を唄ひつゝ
人里遠き村はづれ　流れも清きさゝ川や、
畠に花の香を浮べ　夕に朧の月をのせ
淀みもあらで流れゆく、
水のこしかた行末の　火にも似たる身なればか
汀に立てばそぞろにも　長き憂のわれにあり

○いさら川　　和歌山縣　小山敏子

春の野末に日もすがら　摘み來りたるこの花を、
いさら小川にすつるをば、　何故なると問ふなかれ。
松原走るこの川の、　流れ〳〵て末遂に、
我がなつかしき彼の君の、　いほりの前を行けばなり。

○鄙少女　　京橋　田中秋子

金絲きらめく晴衣をば、　求むるなかれ鄙少女、
母が手織りの木綿衣、　あつき情のこもらずや。
珮玉かゞやく髮飾り、　羨むなかれ鄙少女、
神の刻みし野の花に、　くしき香のひそまずや。
裳裾とらぬ身なりとも、　つらしと云ふな鄙少女、
朝軒端の松のかぜ、　とこに微妙のひゞきあり。

○東大寺の晩鐘　　奈良縣　島田ならいと

朱のほそ殿色あせて、　緑蘚着なれし苔衣、
いく世あらしにみ佛の、　ふりし靈香高き東大寺。
金色ながす夕靄は、　深淵にふかく沈みゆき、
誰がほそ眉かゆふ月の、　夜神の黒裳の袖もれて。
闇の氣まぜる暮の色、　巨人の息吹か天地の、
靜謐やぶりて人の世に、　餘韻ただよふ晩鐘や。
色即是空懺無常、　寂滅爲樂のぬびきかや、
まどへる子等に啓示の、　崇き聲と胸にきけ。
白衣の袖ふくゆふ風は、　そぞろに寒く若き御僧
後姿淋しくわびしらに、　鐘樓しづかに降りゆく。

○冬の夕　　札幌　小山かく子

炬燵圍みしはらからが、　今日の寒さをかこちつゝ、
冴えたる月に冬をほめ、　積りし雪に月をほむ。
晴れて靜けき銀世界、　我は想ひぬその夕、
今宵御空に神の世の　聖者ら集ひ給ふやと。

○谷間のすみれ　　伊勢　俊香

葦ほの暗き谷あひの、　苔のしとれに生ひ出でゝ、
未だうら若きひともとの、　笑うつくしき花すみれ、
曠野の春は知られど、　戀しき蝶や來まはれど、
浮世の浪のよせ來れば、　こゝに樂しきかげはあり。

○隣の桃　　愛知縣　平野樂峯

吹けや春風そよそよと　桃の花びら散らぬほど
花にはつらき風ながら　我にゆかしき香を送る
手折りて活けむ術もなき　隣のにはのもゝのはな
せめては後の思ひ出に　かをりを衣に止めなむ
吹けや春風そよそよと　桃の花びら散らぬほど

○散り行く花　　名古屋市　ちよ子

造化のかみのたまはりし、
今ぞかへらん木のもとに、
やさしき聲音きゝつゝも、
涙に富めるみやびをは、
さのみ惜むなかれなくば、
いさぎよしとの名を得べき、
なさけに厚きうたびとは、
さのみ恨むなかれなくば、
ひときははやく匂ふべき、
あしうたびとよみやびをよ、
しづかにあふげ一ひらの、
はろの詩情のこもれるを、
世界はひろしくにおほし、
造化のかみのたまはりし、
時のこゝろを知るやたれ。

○勝　軍

去年の二月初八日
靈のねむりを驚かし
強き翼を折りてより
名譽は武きますらをの
安けく國にあるものは
つたへ〳〵ていやましに
御國のためにいけにへと
まみゆる事のなるべきぞ
ひたすら稚兒をおひたてゝ
月日と共に限りなく

○老　松

峯の枯嵐身にうけて
葉はみどりの色深く
いく年月かうた人の
檜にあやしのこゑ一つ

榮ある務なし終へて、
惜しみて歌ふもろびとの、
あらしをいたく罵しれど、
我等さくらもいかてかは、
雨をはいたくうらめども、
我等きくらもいかてかは、
流るゝ涙おしぬぐひ、
散り行く花にいと深き、
あゝさりながら我とちの、
務はたして根にかへる、

富山縣　齋　藤　女

仁川港に集ひにし
たつすべきへもなきまでに
海路に隧に揭げたる
ちしほにかへしものなれは
千代萬代の末までも
磐れあぐるにつとめずは
なりませる君に如何にして
銃とる事の叶はぬ身
今日戰勝の名譽をば
世を照させんとこしへに

宮城縣　桂　島　富　子

自然の琴をかなでつゝ
夜はさやけき月のやど
心なやめし老松の
仰げば大空に雲もなく
黑き影のみ地にゆらぐ

* * * * * * * * * * * * * * *

自然のまゝに生ひ立ちし、
濱邊の草を打しきて、
寄せては返し返しては、
奇しくをかしく美しく、
狂ひ怒りしその時は、
打ちて碎きて散らすまで、
靜に笑ふ其時は、
節おもしろく歌うたふ、
寄せくる波をよく見れば、
濱邊に向ひ寄せくれば、
怒りし波をたとふれば、
多くの人を動かして、
はかなき海の波までも、
波に心のあらむには、
波よ狂ひて怒りつゝ、
汚れたる彼の靈國をば、
天と地とに塵なく、
面わも笑めるさゞ波よ。

○臨終の夕

もゆる燈はとび亂れ、
終りの床に迷ひきて、
あはれはかなき運命かな、
今は艶なく力なく、

○夕　暮

鎭守の森にからすなき、
かけも霞につゝまれて、
夕映早やもむらさきの
黑きとはりは高城の
本明川のせゝらぎも

越中　田　中　き　よ　子

松に奏づる音のきく、
海の面を眺むれば。
又も寄せくる女男の波、
趣きあるは波にこそ。
千鬼の岩もひとのみに、
凄きばかりの力あり。
濱の眞砂にさゞめきて、
それにも似たる調あり。
初めに一つ波立ちて、
よろづの波は起るなり。
げに恐むべき惡漢の、
世をは亂すに異ならず。
浮世のすがたまれるなり、
あゝ波きけや我願ひ。
その凄まじき力もて、
洗ひつくせよ殘なく。
洗ひつくせしその後を、
太平の世をば歌うたへ。

丹　後　志　樂　わ　い　子

生命の岸をうつ波の、
潮に落ちて影きえぬ、
花と香ひし黑髮も、
枕吹く風冷やかに、

長崎縣　嬉　野　益　子

馬ひき歸る童子の、
草笛ほそくひゞくとき、
雲に包まれ夜の神の
やまの面わにうちたれて
おとしづかなる夕まぐれ、

やみをやぶりて入相の
筑紫の海に流れ行く、
くしき光を放ちつゝ、
神のいませる樂園に、

○亡き父

月さやかなる大空の、
咲く寒梅のそれなるか、
文打ちおふひいたずらに、
なき父君の面影よ、
たのしきにつけうきにつけ、
今宵はいとゞ身にしみて、
たどるともなくたどられて、
うら〱霞む春の野に、
優しき脳きみ心に、
しろがれ砕く冬の日に、
深き心に行末を、
はかなきものは世の中の、
まだうらわかき撫し子の、
いかてこの世を去りにしか、
秋とし云へば照る月に、
月おほろなる庭前の
此の世の春に醉ひたるは、
父なき後は母君の、
昨日と過し今日と過ぎ、
その一ふしもなしとげて、

○羊の夢

牧場に笛の音はたえて
今月影のすみわたり
甘き乳房をふくみつつ
野の遊びを夢に見て

○夢

鐘のひらきは尾を曳きて
折しも空に星一つ、
罪にさすらふ塵の子を、
導く如くかゞやきぬ。』

長野縣　紅　涙　女　史

今宵は風も靜まりて、
ゆかしく匂ふ文机に、
忍ぶともなく忍ばるゝ、
忍ぶる事の澤なれど、
ありし昔のひたすらに、
あかぬ思ひにふけるかな、
すみれ花咲く野辺の如、
數なき身をば愛でられき、
つもるみ雪のそれのごと、
たのみて身をば愛でられき、
常とは知れど我が父は、
生ひさき長く見のこして、
春とし云へば咲く花に、
はかなき想亂るゝを、
櫻がかげに打ら集ひ、
早やも十とせの夢のあと、
慈みの露に同胞が、
年うつれどもあらましゝ、
むなじく深山に朽ちるかな。

大　坂　山　田　い　な

羊の群も歸りたり。
千草に露の玉しげし。
小屋に眠れる小羊は。
草葉の香をや慕ふらん。

山口縣　ち　る　花

❋❋❋❋❋❋❋❋❋❋❋❋❋❋

靜かに寄する闇の手を
影をしたひてすゝき原
やみにもしるき人影の
瞳を定むればこはいかに
からきうき世のしがらみに
我昼は囚かりき
木枯らし袖をふきはらひ

○蝴　蝶

深山の雪もむら消えて、
いづこよりかは來りけむ、
ひるは微風におくられて、
夜はさくらの下かげに、
さはれ榮枯はよの習ひ、
いつしか夢とすぎされば、
花の園生はあとたえて、
あはれ果敢なきなれが身は、

○蕾の花

其梢ともわかざりし
綻びそめし花瓣は
將又花の心にや
面ばゆげなる心地して
總ての物は事ごとに
見ゆるも怪し我が思ひ
衣縫はんと手にとりて
如何にや我れはなしつらん
石よりかたく立ちて居る
はじめてものを思ふ身の
現と見れば現なり
などかく人の慕はしき
戀てふものゝ世にあらば
戀する身ぞと悟りては

もれてまたゝく明星の
葉末の露を分け行けば
我が目の前にたゝずめり、
年月したふいとしの君!!
たま〱逢ひはあひながら
君の眼は地に落ちき。
西と東に分れけり。

阿　波　潮　あ　き　子

かすみのどけき春の日に、
姿やさしき雌雄の蝴蝶。
花より花にあくがれつ、
夢を結ぶやうるはしの。
ときはとたのむ春の日も、
思ひやいかに彼れ蝴蝶。
昔のうてな今いづこ、
いづくに春を慕ふらむ。

福岡縣　副　枝　か　を　る

櫻は花にあらはれて
そも春風の誘ひしか
恥らふ事を知りてより
床かしき人の面かげと
針をはこびし中にしも
片手に衣とりしまゝ
我れから心怪しまれ
などかく人の慕はしさ
戀する身とはなりにけん
人の心もしりそめて

物のあはれも身にぞしむ
君よ見てしかあさ霞
吹くも長閑き春風の
花の心の濃き色を

○菫の蝶

春のみ神のかざしなる
若草交り一本の
圓かなる戀語りつゝ
心しあらば此處のみは

○里の秋

汗と膩を流したる
豐けく聽く吹く風に
鎮守の森に村の童か
いとし孫子の手を携りて

○哀れのわれ

父に別れしひとり子を、
在ますとききし許りにて、
その後他家にとつがれて、
人のさはさきゝつれど、
積る月日ともろともに、
やどり尋れて相見れば、
音信もなき親と子が、
あはれ積れるわが思、
かたるおもひは戀れども、
さらばといひて分ちたる、

○秋の野

淋しき秋の野に立ちて、
時雨こぬまと順禮の、
秋風寒く日は暮れて、

○詩の神

歌に讀まんかゑがかんか、

残るかたなくたなびきて
心のまゝに咲き染むる

石見國　千代延俊子

玉や溶れて生ひにけむ
葉にやすむ白き蝶
楽しき夢や結ふらん
よきてをふけよ野辺の夕風

赤　坂　河村董秋子

田の面に秋の色みちて
黄金浪よる夕まぐれ
打つや大皷の音のどか
老若つどふ豊年祭

岐阜縣　寺倉龍子

残して去にしたらちねの、
たえて音信なかりけり、
いとどまづしく在せりと、
たえて音信なかりけり、
戀ふる心はいよよまし。
やつれたまひし姿や、
逃ふは夢なる心地かな、
何れを先に云ひ出てむ、
さだめあるよをいかにせむ、
袂に秋の露おもし、

岡山市　立岡尾野

何とはなしに眺むれば、
急ぎておゆむ、あれの原、
鳴きゆく雁の聲細し。

静岡　理宇子

されど吾には其の枝なし、

二つの眼うち開き、
かづの山々踏まへつゝ、
過つる年のことかとよ、
近江のほとりの一砂を、
駿河の一隅に運しより、
東の山ぞ山の精、
西の湖ぞ水の華、
雄々しき富士ぞ夫の神、
かくて生まれし姫君ぞ、
鏡の水面に波立て、
幾百千の御使を、
神のひめごとささやきて、
峯の老松訪へば、
後には男の神女の神の、
已がもろてをとり給ふ。

○故里の春

東風ふく毎に馥郁と
庭の紅梅さかりとの
朝夕なれて彼のわたり
春うたふらし鶯の

○旅順陥落

殷々轟々すさまじく、
二龍山頭雲裂けて、
よどめき渡る旅順口、
磯壁今や陥りて、
黄金山上月明に、

○哀れ少女

薬も呑まで父は死に
たくらむ香も無き夕
少女の身こそ哀れなれ

○薔薇の園

恍と眺むる富士の峯、
凛と立つたる其の姿。
世にめづらしき仙人の
聖手に捧げ傍の、
はじめて此の世に詩神あり、
千度珍しき富士の峯、
幾世變らぬ琵琶の湖、
やさしき琵琶ぞ妻の神、
不老不滅の詩の神よ。
さつと吹き來る冬の風、
ともなひ來て我が胸に、
やがて彼方の荒城の、
ごーごー遠く轟きつ、
御影氣高う立ちまして、

わが袖馨る昨日けふ
妹の玉章なつかしや。
谷の戸出て新らしき
主なき窓に唯ひとり。

静岡市　毛利賀子

響くは何ぞ凱歌、
修羅の巷を喊聲の、
難攻不落を謳はれし、
勝ちに勇める皇軍の、
歌ふは何ぞ捷軍譜。

徳島縣　みさを女史

其の枕辺に泣く母の
涙押へて薬をうつ

日向國　霞洲女史

神田區　太田照子

夕日に醉ひ　紫雲にあき
かくて葡萄は熟しぬ
房々たる果實は　惠みの母の乳房の如く
不幸の子に與へんとす
房とる女にか　翠嵐の音にか
倚せむ詩人年若し

〇朝の歌　廣島縣　中村しののめ

朝の鐘に窓押して、東の方を眺むれば、
あや錦かもあけぼのゝ、横雲やゝに亂れては、
次第に星の游れ行く、春のあしたの靜けさや。
紅雲分けて日は出でゝ、白帆の繋く四東、
此所に詩情は動けども、うつさんよしもあらずして、
むなしく東風にうそぶけば、海原千里波もなし。

〇孤兒　常陸　かつら女史

愛深かかりし父母は、何處の土にれむるや、
運命幸なき孤兒の、神のめぐみに洩れし身を、
人のなさけに救はれて、育ちぬ何處孤兒院に、
おゆびも凍る霜のあさ、勝どき高くきこゆるよ、
人の子さめよ起きつやと、知らせて急く號外を、
配るかよわきをさな子が、幸なき運命あはれなり、

〇春の歌　神奈川縣　小野雪枝女史

柳のまゆはひらけつゝ、みどりの影は池の面に、
董の花はうすく濃く、堤のうへに咲き初めぬ、
見よ愛らしき蝶二つ、芝生の上を飛びかふよ、
こゝろ長閑けき春風に、少さき翼をうごかして。

〇亡き友を思ふ　越中　遠藤菊榮

萩の上風音絶えて　桐の葉おつる夕まぐれ
亡き友忍ぶおち方に　すぎゆく雁の聲かなし

〇案山子　美濃　臼井安子

雪降り寒むき冬の日も　もゆるが如き夏の日も
身に古びたる衣服着け　田中畑中いといなし
人の休める夜の間も　たゞつゝたちていねもせず
あしたとくより夕べまで　かはる事なき余が務め
見る人さぞや笑ふらむ　聞く者さぞやあざけらむ
されど變らぬ我が心　主への務め勵むなり

〇柳　羽前國　清流女

そよ吹く風に誘はれて　すなほにゆらぐ青柳の
花こそなけれ深みどり　かゝれる姿いとやさし
昨日雨にうるほされ　今日の朝日の照らされて
いとゞ操のますかゞみ　うつして見よや其心
ならひて見よや其すがた

〇衣服　靜岡縣　かん子

にしきを着るも衣服なり、襤褸をまとふも衣服なり、
衣服に差異はありとても、いかで心に別あらん、
されはをなみは謹みて、心ににしきまとふこそ、
眞のにしきと云ふべけれ、

〇雲雀によす　長野市　飯塚ぎん子

たにまをいでし鶯の、たくみの音色なけれども、
なれがうたへる其歌は、春のめがみのさゝやきか、
あゝ其聲のひゞくとき、あまつつかひの人の世に、
くだすみかみのつけ事か、そゞろ樂しき天國の、
エデンの園忍ばるゝ。

〇弔魂歌　越中國　房園女史

吹く風あらきもろこしの　雨にさらされ雪にふし
銃をまくらの、かりの夢　さめし朝やいかならむ
立つ浪たかきこまの海　あらしの音に寢覺して
細にながむる月のかげ　冴たる夜半はいかならむ
君のみことを畏みて　海に陸にますらをが
命をすてゝ身をすてゝ　國につくしゝ其いさを
立てしいさをは同じきを　戰にかちてかへいり來る
數にはもれし其人の　はかなき魂ぞ哀れなる。

# はがき文

## 天

### ○米搗男

三河碧海郡大濱町　都筑桔梗女史

二十歳の春に、あの圓いお月さまを花嫁に貰うてやるとすかされて、今年四十の秋までも、それを頼に阿房六は、米を搗いて暮して居る。玄米は幾度も白くなつたが、お月さまは何日、嫁に來るてあらう。

四行の小說

## 地

### ○寒からう

筑前　ひさ子

今朝お庭の梅の木で初めて鶯がないた、ア丶長閑な日曜……ソットお庭をのぞいて見ると、泉水で陶器の人形を洗ひながら、寒からう、寒からうと言つて居る聲がする、其は五ッになる弟の健ちやんてあつた。

着物は姉さんが着せてあげるてせう

## 人

### ○美ちやん

紀伊東牟婁郡北口村大字西　木村牛女

ちよろ／＼流れの小川の水に、美ちやんは青菜を洗つて居たが、何を思つたのか一心に水の面を見つめて居る。小川は如何なることを彼女に告げて居るのであらう、春寒うして野は淋しい。

想ふに言葉でなく小川の歌でせう

## 秀逸

### ○梅花

兵庫　山本菊子

昔さる博士の住はせられし家とかや、今は軒くち壁落ちて、たゞ敗殘の瓦二つ三つ、白き梅の花、夕風寒く散り落ちて、その上にかさなりぬ。

古意新韻

### ○雪ふり

近江　たまを

綾子樣、綾子樣、早く入らつしやいよ、雪ふりてすよ

雪ふりですよ、まあ、庭先のきれいなこと、有明の月かげがさして、きらきらと、きれいですよ、早く入らつしやいよ、綾子様。

文字に表はされたる審音器、平凡の如くにして其實は妙

○春夕　牛込たなか

春の夕、弦月は西の空にほのめきて、黄がゝりし野邊は、おぼろに、狂ひつかれし蝶も暗のうちに迷ひ、銀なす水のさゝやく畔、優しき草花、小さき目を閉じて、流れに、うなだるゝ。

景は油絵の如く、想は西詩に似たり

○風車　三河都筑靜子

花の下に老も若きもあこがれて、暮るゝ日を惜しむ中に、是も浮世や、髪はおどろ衣はつゞれ、風車買ひてよと、賣り歩るく幼き女あり。

落花頻りにして風車動くこと早し

○お由の橋　遠江大石よし子

いつ來ても涙が先立つお由の橋。こゝは去年の夏露子さんと手を引いて水を掬んだところ今そこに下りて見れば水の流はもとのまゝである。あゝ露ちやんが安く眠つてゐる源に行つて見よう。

源の一字あつて全篇活躍す　廣島安澄眞子

○肩掛

今年の梅の花は二十日も早く開けりされど巷行く女子は一層進步したる肩掛に包まれてあり。あゝ沙河の軍、雪深き事三尺なりと云ふに。

羽衣ショール？九重ショール？

○蠶　遠江小川光子

朗の春に生れ、隙間の風も厭ひ、蠶樣大切と愛られて若葉をあげよ、參ぜよと、優しき言の葉に育れ四度の、眠起も暫に過て、繭を結べば、未來は如何にと氣遣ふうち、絲に引かれて、眞肌を包む、あゝ美しき蠶よ。

養蠶國の女子、此の詩境なかるべからず

○嗚呼父上　佐賀井手靜子

妾は高等小學校も級一番で卒業した母上も兄上も姉上も非常に喜ばれたが嗚呼。父上が今生きて居られるとどんなに喜ばれるか知れないのに。

稚氣却つて愛すべし

○烟と響　牛込吉弘のぶ子

あゝ世人は既に千載一遇の大戰爭に飽きぬ今や一葉の號外に數錢を投ずる者稀なり。然れども親よ、黒き烟休む間なく天を覆ひ槌の音絶えまなく耳を聾する砲兵工廠の今を。

一種の感慨

○鐘樓の落花　千葉溪流女史

今し、平和の懸鐘を一村に傳へ終りて、鐘樓下りくる黒衣の老僧、肩に、脊に、櫻の花瓣の三つ二つ花散つて鐘鳴るか、鐘鳴つて花散るか

詩眼、凡ならず

○勇ちやん　靜岡隆子

勇ちやんを見るとほんとに泣せられるよ、とおとなりの姉さんがいふがどうも僕にはわけがわからぬ。

母さんにきくといやな顔をなされて、坊も大きくなつたらお父さんのやうにおなりなさい、とおつしやる。

餘韻深し、

### ○耻かしかつた

名古屋 獅子海なか

牛蒡を買ふて歸路に、男學生四五人に遇ふ、知らず妾牛蒡一本を道に落したと、注意されたが、何やら冷笑はるゝ如く、罵らるゝ如くて、後振り向いても見なかつた。

をかし

### ○善き友

遠江 芳村うめ子

善き友よ君は僅か学の上にも祓せ得らるべき身をもて世界の萬有を其の內に羅み幾千年の後に生れて幾千年の前を數へ愚なる身を古今の聖賢に交はらしめ吾等を導く、嗚呼君の如き善き友は又とある事なし、我善き友は即ち書籍の君なり。

### ○文子

信濃 恩田苑子

今年四ツになる姪の文子をつれて御墓詣に行のが私の毎朝の業、人が文樣何處へ?と聞ば母樣の所へと答ふ小さき手には菓など母なき稚子は斯くも優しきものか。

### ○春日和

山口 田村遊喜枝女史

春の日の暖かきまゝ南の椽に老婆二人、孫を遊ばせつゝ語るも、いくさの話し、はては一人と賴む息子のあえなく逝きし悲しさに、唯南無阿彌陀佛、……あはれ遺族。

### ○故鄉の山

群馬 津久井孤軍

我が故鄉の南に屹立す赤城の峯、海拔六千餘尺、顧すれば榛名、妙義、淺間の諸山は白く雲を拔けり、其途切れたる處に關東の廣野渺たり

### ○朝の齋

神奈川縣 伊藤芳枝

下弦の月は、富士の頂きより、一丈ばかり。紅暾は、東の空に、海をぬく事、二丈。

月は爲に白う、雪は、照りかへされて、白玲瓏、白雲細く、一筋、左より山の半腹にかゝる、麓には連山、小波の如く、伏して秀麗なる富士を仰ぐ。

---

### ○春の夢

常陸 かつら女史

萬都の詩人、錦を拔き、綾を重れ、日れもす、柳櫻にあくがるゝの時、妾は春風に袖吹かせて春姫が、薄衣の懷に入る妾は黃金の波間に、胡蝶と共に華胥の國に遊べるなり。

### ○獨り言

麹町 小原雪江子

あの時、此家を出たら今頃は、どんなだつたらう。こんな可愛〳〵はつ子を抱く事は出來なかつたので、オヤ眠つてるの、マア何と云ふ罪のない顏だらう。

### ○一つ沼

磐城 石井かをる

枥葉色の萱茲に被はれてある一つ沼、氷の上を渡つてくる冷たい風に吹かれて萱茲の枯葉打そよいで岸に小波を寄せると、其度に薄氷の破れる響がカリ〳〵、カリ〳〵と聞える。

### ○春の夕暮

赤坂 高瀬入霞

駒の尻を追ひて喘ぎ〳〵山道登る馬子、法衣を春風に吹かせて山を下る若僧、あゝ春の夕暮、詩材、畫材、鐘の響は遠霞の底に消えてゆく、櫻散つて夕暮遲し。

### ○夢

德島 良月

何とも正體の知られぬ恐ろし者が追ひかけてくる、逃やうとしても足が、足が動かぬ、又叫ばうにも聲が出ぬ、後から追ふ〳〵ます〳〵急、動かれぬ、アゝ何うしたら、と思うと眼が覺めた、初めて旅した曉。

### ○白梅

大阪 千鳥

あはれ麗はしの白梅よ、今年は汝が最愛の主は遠く胡地のいくさにあり。淋しからむ、其美しの姿を我雁の玉章に封じ込めて送らむに、吾に一ひら許せ、あはれ麗はしの白梅よ。

### ○留守の宿

上毛 今井八百子

母樣は今戰地から來たお父樣の手紙を讀んでいらつしやる、正ちやんはお父樣の寫眞を持つて、鏡の前に座り、自分の影とみくらべて居る。外は號外賣の鈴の聲、家の中は極めて靜かである。

# 短歌

## 佐々木信綱先生選

**天**

折にふれて　群馬縣碓氷郡磯部村登城書學館　吉田まき子

花さきぬ鳥もうたひぬしかはあれど
君まさぬ春はたのしくもあらず

**地**

深山の夜半　越後國新發田町立賓町十　登坂よし子

巖を洩る清水に月のかげ更けて
飢ゑたる熊の聲寒きかな

**人**

○　新潟縣古志郡栃尾町　内藤みゆき

将軍のほまれたかうて花は薫ず
今たけなはの美し國の春

**秀逸**

○　麹町　高橋ゆかり子

銀屛や御殿の奥の八雲琴
調べに醉ふか梅の花ちる

○　越後　佐藤美佐雄子

譽れある手傷負ひける若き身の
やがて癒えなむ櫻咲く頃

冬夜雜吟　豐後　工藤鈴子

冬の夜のかんてら暗き蓬の上に
ひく破れ琴のふし哀れなり

春川　ゆき江子

いさゝ川花の白波おし分けて
水のまに〳〵笹舟のゆく

○　三河　都筑靜子

浪にぬれ風になびきていそ崎の
松はみながら神さびにけり

○
にひづまの若き笑まひにわれも笑みぬ
　京へは三里春雨のやど
春の夕
京都　張田ひて子

藻鹽燒くけふりの末に月見えて
　友呼ぶ雁の消えて行くかな
札幌　白鳥りう子

○
江を渡る月夜雁の一聲に
　船の灯しらみ寺の鐘なる
茨城　矢口豊子

○
かくはしき春のいぶきの彩なれや
　幸をさゝやく蝶よすみれよ
越後　内藤みゆき

○
み情の言葉ぞ今は恨みなる
　我世はとくに思ひたちしを
石見　青柳秀子

○
うらうらと春風うけて歸り來る
　白帆かくれぬ夕霞の中に
大阪　板橋薫子

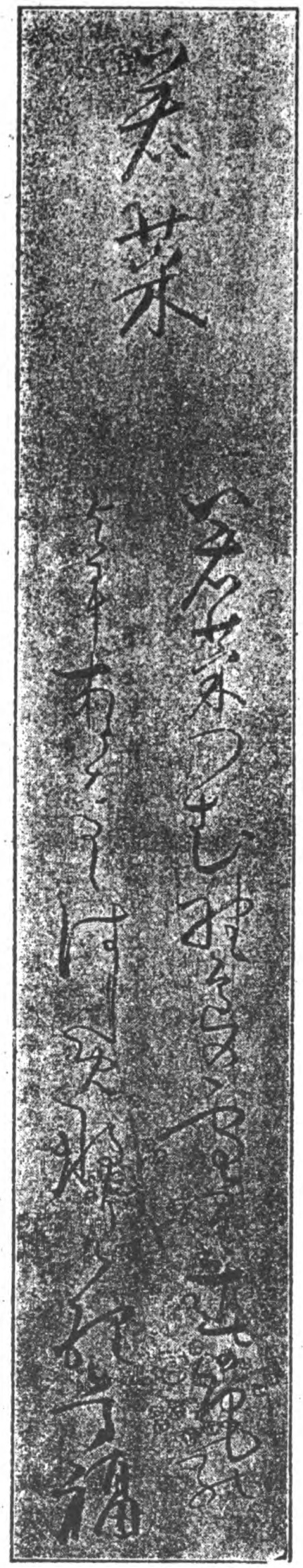
○
島かげに眠るが如き白帆見えて
　雨にくれゆく春の海原
石見　千代延俊子

○
おぼろなる川ぞひ三里たそがれて
　烟るがごとく春のあめふる
常陸　西[illegible]野[illegible]春[illegible]女

若草
此所よりや春の心も湧き出でむ
　芹萌そむる野路のさゝ川
長野縣　宮澤浪子

別れ
脊の君よさらば別れむ心して大和つるぎのほまれけがすな
阿波　潮あき子

出征の兄を思ふ
さいざよひ月ほの白う肌さむし出征にし兄や如何にあるらむ
越後　矢部みさ


千家尊福君筆

○

初陣の男士怒りて劍とれば櫻はら／＼頬をかすむる　福岡 桐山圭枝

○

詩にもうみぬ笛たづさへていざ出てん軒よりつゞく花の下道　神田 太田照子

○

母君が病いたはるこの夕べ淋しき庭の梅の花ちる　北總 渓流女史

○

沙河のほとり立つ哨兵のひけしろく雲間をもるゝ冬の夜の月　大坂 宮崎よし子

○

打寄りて羽子よ鞠よの少女子に交らぬ身とは何時なりにけん　周防 大田蝶子

夢

かへりしと思ふは旅の夢まくらさめての後ぞ悲しかりける　周防 雑賀文子

思ひ出

我が身こそよくも似てけりおそ咲きの梅は櫻におくれけるかな　下總國 中島春水

梅

背の君が好みて植ゑし紅梅も今は手向けの花となりけり　京都府 磯野みき子

雨後の月

雨はれて川邊に立てる青柳の梢に宿る月の影かな　長崎 池島くに

○

黑髮のむすぼれとけぬ一すぢは思亂るゝはじめなるらむ　海津 寺倉たつ子

○

水仙の生けし花瓶に梅そへし床を斜に小春日さしぬ　巣鴨 田中舞月子

蝶

少女子の折り行く花を名殘とてあと追ふ蝶のあはれなりけり　本郷 古川文子

病の君へ

いかばかり侘びしかるらんいたつきの夜半なる雨のしづく／＼に　大阪 今出渓花

○

思ひかれ戀の宿をばおとづれぬ小雨そぼふる秋の夕べに　常陸 酒葉霞峰

○

潮さわぐ大わたつみも今のみは波路やすけく御代祝ふなり　富山縣 嘗薇女

我軍大に勝ぬときゝて

日の本のますら武雄のいさほしは外國までも輝きに鳧　越中國 治佐木竹子

---

春の占領山

占領の山の御旗の其のあたり陽炎十里春日長閑けき　遠江 坂田はま

春晴

雲の光り胸のとばりに入ると見て擊破れたり春の晴　名古屋 永田加賀惠

秋雨

軒の端に柿の實落る音はして秋の夕べを村雨そゝぐ　上野國 三木香園

懷故鄉

ふるさとのたよりまどほになりにけり老いしちゝはゝいかにますらむ　岡山縣 勝野琴子

春氷

散る花を二ひら三ひらとちこめてしばしとたえぬ庭の遣水　女子大學 杉浦喜代

折ふれて

なき母をしのぶたまとふ春の夜の月もおぼろに宿りけるかな　長野市 飯塚ぎを子

○

媼ひとり子の征く方をつく／＼と消え行く煙怨めしき哉　越中 鈴木俊子

○

追分の唄に栗毛の男ましく馬子の菅笠に櫻花散る　下谷 加藤瀧月子

○

やせ菊に野分の風のふきそめて紅葉の秋はやゝにくれゆく　神戸 神山園子

○

霞たつ雲雀囀る春の野邊入江の彼方に日はおちんとす　美濃國 碓井茂子

○

勝軍祝ふにつけていさゝかもいさほなさゞりし吾れぞ恥しき　筑前 花田信子

○

酒買ひて小女子歸る畷みち柳そよかぜ風ゆろうふく　越後國 內藤晨子

折にふれて

丈夫の櫻の花と散るとても匂ひは世々に傳ふなるらむ　美濃國 日比舒子

○

軍營する天幕低く月落ちて焚く篝火に霜さやかなり　德島縣 久保串子

○

頬ずりて花にゑむ子よあえかなりひぼたんかをる晴の庭　越後 內藤ゆり子

○
美しう朝の日榮えて破れ垣に昔ゆかしき白梅の花　新潟縣　春野花子

○
笑みて人の夜毎を解きし京紅のかけし小皿に鳴くきりぎりす　長野市　安孫子美子

雪中の梅
薫らずばいつれを花とわかたまし雪の下なる梅のはつ花　群馬縣　中村かつ子

○
君まさば訪はんよすがもあるものを奈良の三月櫻花さく　姫路市　毛呂正子

○
美しき春のすがたをうかべては森のきし水河とさゝやく　長門國　倉岡月代子

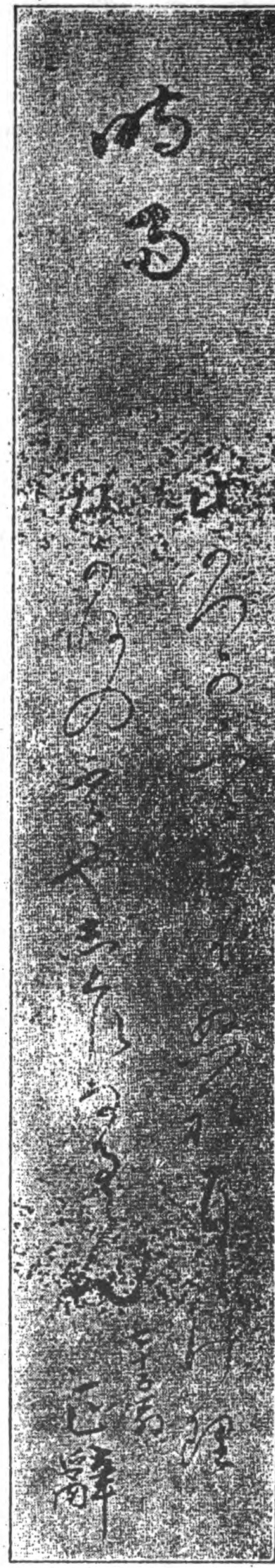
歸雁
わかれかと思へはつらし夕まくれ古里さして歸る雁かれ　宇都宮　金澤保子

○
みどり子は何をゆめ見てゑむならん父なき身をと知るや知らずや　牛込　杉本藤

秋の七草
去年の秋亡き父上のみ手づから植ゑし七草花さきにけり　越中　遠藤菊榮子

○
年老いし尼僧守る辻堂に木魚聞えず春の日くるゝ　伊勢　白汀女史

○
流れゆく花の姿や絲川くれゆく春の行へとはゞや　熊本　松本しげ


木村正辭君筆

○
戀やなに人はなかなの夢しらで森のふせ屋に春風ぞふく　上毛　樋口かれ子

若菜
少女子がころもふきまく春風にたもとよりちる初若菜かな　愛知縣　平野樂子

稚子
花をもて膝に眠れる稚子のほゝ笑む顏をほゝゑみて見る　岐阜縣　傍島成子

寒梅
我宿の梅のはつ花咲きにけりうくひす來なけ春をさそひて　鹿兒島　雪枝

○
丈夫が赤き心や染めてもみぢちりしくからの山々　群馬縣　渡邉ふみ子

○
我たてば磯に夕日のはかなさの運命にそゝろ泣きにけるかも　横濱　藍・間秀影女

紅葉
秋もはや中ば過ぎしと知られけり木々の紅葉もいろ〳〵にして　下總　伊佐岡澄子

春の歌の中に
のどかにと小鳥むれとぶ影見えて櫻かつ散る御社の庭　兵庫　柳田のぶ子

用水の傍に立ち
粟だに深き思ひのこもる哉此一流れ君使へます水　長野縣　手塚とも子

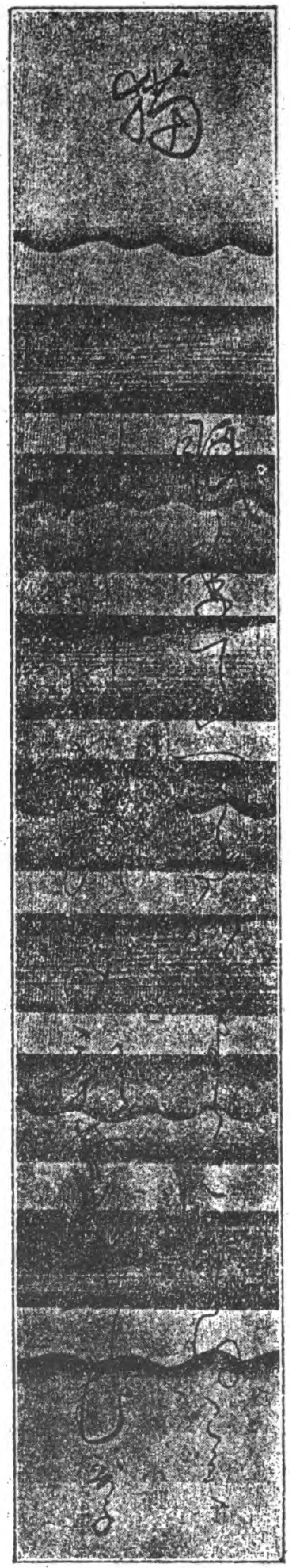
○
春の野の細き流にいま散りしすみれの花に蝶のくろへる　越後　五十嵐富美子

百合
奥山の緑のかけのさゆり花あかぬいろかをたれかしるらむ　麹町　榊原千重子

○
我が送る品の數々少なくも赤き心を受けよもののふ　上毛　渡邊すみれ

山家雪　紀伊　木村秀子
降る雪は幾重も庭に積れかしさらでも人の來べき宿かな
○　名古屋　岩瀬波子
木曾川の渡しを越して松一里舟歌寒く霰たばしる
有明月　山口縣　ちろ花
君にあひし夢のゆくへにあくがれて出でし霜夜の有明の月
○　京都　長谷川笑津子
君おはす舟は霞める島にかくれ東に白し片われの月
○　神奈川縣　見上ひさへ
美しう小金井一里櫻さきて霞とも見ゆ雲かとも見ゆ
○　山口縣　阿伊子
朝ぼらけかすみたなびく海のへに白き白帆の二つ三つ四つ
○　神奈川縣　大久保伊智子
去年の今日共にめでつゝ生けし梅今はさびしく君のみたまに
○　牛込　かほろ
狂ひ女の夜な〱出てゝ子を慕ふ叫も懐し荒磯の濱
○　越後　佐藤英子
スタイルを鏡にうつす人若し白桃匂ふ春の夕ぐれ
○　相模　小磯うた
わがせこはいかに彼の地におはすらんけなげにつくせ君がみために
○　三州　都筑靜子
水枯れておく霜しろき砂川のさゆる汀に千鳥なくなり
○　埼玉縣　心外子
戰艦乘せたるみいくさ艦は影失せて磯邊のどかに庭鳥のなく
慰問袋に入れて　上野　安藤たゞを子
ものゝふに送る此品うすくともたゞ受け給へ赤き心を
○　磐城國　綿引白子
出征にし夫を思ふこの宵や空只ならぬ星ひくう飛ぶ
夜雨　熊本　和歌子
さほ鹿のなく音きこゆる山里は今宵の雨をいかにきくらん
新年の山　宮城縣　桂島とみ子
明け行く御世を富岳のいたゞきに君が八千代を仰ぐ今朝かな
○　越後　松永ゑげ子
なつかしき友におくらむよし茂か那にほひゆかしきしらうめの花
○　澎湖島　山門わかば
若菜摘む里の少女の優しくて我初戀の昔偲ばるゝ
露營の夢　北海道　森野きよ
なつかしき君の姿はふとさめて露營に淋し十六夜の月
野梅　廣島縣　藤本藤枝
春の野の霞のなかに見えわかぬかばかり匂ふ梅の一本
雪の夜に　福岡縣　中村春香
雪あられ心してふれ雲のあなたわが父います滿州の空
紅梅　千葉縣　栗原よし子
さし昇る朝日に雪のとけそめて藁屋の奥にかをる紅梅
○　本郷區　靏子
緋桃咲く鐘樓のわたり月かすか父忍ぶ身の思出多き
○　大坂　山田みゑ
馬士一人手綱ゆるめて歸り行く馬士唄細しおぼろ夜の月
新年の山　群馬縣　村岡笑江子
今日こそは雪ある上に春がすみかされて高しふじの神山
○　浦和　蹊　薫子
鶯の去りし小枝に梅散りて春長閑なり妹の毬うた
○　能登　池野いさみ子
鎧武者只一騎淡く霞みけり山櫻散る琵琶の夕暮
○　埼玉縣　伊東祥子
白梅に星かげ淡く夜は明けて拍手高きうぶすなの森
○　盛岡　山崎こずゑ
君と見し庭の櫻は散りにけり殘る若葉を形見とはして
○　越後國　清水登志
馬道通ふ小姓の袖に花散りて空たきものゝ香りみだるゝ
村の夕　陸中國　河野華子
鐘なりて鎮守の森に烏去りて夕べ淋しき山もとの村

折にふれて　宮城縣　小檜山　玉子
ろをかこみ戰話しに夜は更けて歸る門邊に春雨のふる
桃　千葉縣　平川　遊幾子
妹うとに乞はれて寄れど桃の花歌思ふ身は折りかぬるなり
冬の夜　美濃　內藤　みさ子
木の葉吹く嵐を寒みぬる夜半の片山里になく狐かな
冬の月　千葉町　石原　華女
むら時雨晴れゆく雲の絕え間よりもる影寒し冬の夜の月
○　福岡市　廣瀨　みえ女
春神の秘めうた細きさゝ川のうねり／＼て野に入りにけり


下田歌子女史筆

アメリカにてうせ給ひし師の君の追弔會にのぞみて
日本橋　佐久間　靜子
まてど／＼幾年まてど師の君はあゝ師の君は返らずなりぬ
○　長崎　村田　滋枝
なに神の社ぞ今は荒れはてゝ昔のかたみ梅の一本
折にふれて　和歌山縣　小川　とし子
吉野山花の匂にひさかたの月のかつらもかすむごろかな
○　山口縣　田村　遊喜枝
行きくれしひい野のゆふべ風さむみうらぶれはてし身をなげくかな
出征の夫に櫻を送りて　長崎縣　吉田　しげ子
いさきよく此の花の如散ませと送りし後どむれさわぐなり
○　麻布　五藤　よし子

大君に捧げし命ながらへて思はぬ年を迎へつるかな
○　赤阪　高瀨　やへ子
男ましき父が門出の酒盛にサアベル取りて太郎次郎まふ
亡友と共に寫しゝ寫眞見て　本郷　古川　文子
思ひきや共に寫しゝおもかげを永き形見となして見んとは
○　福島　田中　とく
ねもやらでちゞにおもひもふくるときつまどをたゝく木枯の音
○　上毛　江原　勝子
うすものに包める玉と見るまでも朧にかすむ春の夜の月
春の野　磐城郡　橫山　八重子

大空にうたふ雲雀を耳にして花ながめつゝ遊ぶのどけさ
○　彦根　勝山　柳子
雪わけて冬菜あされる少女子のほつれし髮に朝かぜのふく
餘寒　本郷　鵜澤　花月
冬の日やまた中空に殘るらむ霞みながらも雪は降つゝ
○　岩代　服部　てい子
召しませと御茶たてまつる塗盃に父の笑顏のさながらうつる
折にふれて　千葉縣　平山　みつ子
しと／＼と降る春雨に思ふかな綻ぶ梅に鶯も來ず
山寺の鐘　盛岡　山田　繁子
たそがれに歸る馬子の聲たえて木がらし寒し山寺のかね
○　赤阪　河村　菫子

ふりしきる霰やゝ止みし江の月夜小窓なゝめに千鳥なき行く
○ 青森縣 汀 蘭 女 史

白たすき劍かざして砲壘のたまのあられと消えしわがせや
○ 上野國 三 木 た ま 子

月になく大路の犬の聲さえておく霜白し板橋の上に
長野縣 神 田 せ ん

磯千鳥

夜もすがら磯うつ波に寐もやらで闇のふすまに磯千鳥聞く
○ 志 摩 村 田 か ほ る

子もり子が歌ふ鄙歌たそがれて麥畑一里春風ぞ吹く
○ 埼玉縣 横 山 むらさき

木の間よりほのかに見ゆる塔の鐘夕ぐれさむく衣うつなり
濟 枝 子

冬夜

久々に訪ひきし友と語らひてうづみ火白く夜を更しけり
○ 伊 勢 白 汀 女 史

賣り賣りて殘りし太刀の一振をとりて吾が背は今出征す
○ 南多摩 小 島 濵 子

都へど上りし人が信りなうてこころ亂るる桃の下風
○ 埼玉縣 山 下 芳 葉

丈夫の靈まつれる靖國の梅ほころびて神風かをる
○ 板橋町 田 中 拾 葉

人とはぬ山の木蔭にいほりしてすみれに人の世を呪はばや
○ 越 後 高 橋 む ら 子

庵室の讀經の聲の今しやみて椿こぼるゝ朧夜の月
○ 攝 津 深 山 葉 子

舟つなぐ河そひ柳打生えてかすみにうかぶおちの一村
○ 攝津國 五 月 花 子

春きても尚寒ければ山里の松の白雪きえんともせす
○ 下 總 小 島 芳 子

波白き遥か彼方を眺むれば故郷なつかし春の夜の月
越 路 ゆ か り

月前花

色ふかき花に光をゆづりけんくもなき空に月ぞかすめる
○ 三河國 丹 羽 品 子

苔むせる將軍塚のそがもとにあはれやつれて白百合の咲く
岡 山 立 岡 房 子

落葉

時雨かと窓押しあけて眺むればとぼそたゝくは落葉なりけり
和歌山縣 竹 中 つ れ 子

雲

あしたには晴れにし空も夕には曇るうき世の人心かな
○ 神奈川縣 鈴 野 辰 久 子

皇國の日の旗風に滿州の露と消え行く野邊のしこ草
○ 茨城縣 萩 野 露子女史

よみかきを共に學びし集ひしてうきに別れし人ぞ戀しき
京 都 花 葉 子

戰死者を弔ひて

吉野山花は嵐に散りぬ共匂ひばかりは世々にかをらむ
○ 遠 江 大 石 よ し 子

おもしろき贊美の曲の香にゑひてゆくか詩人の朧月影
新潟縣 五 井 香 子

戀

風消し梅の香ほりて東より松の緑りの千代古山
○ 神奈川縣 小野 雪枝女史

春雨にぬるゝもうれし草枕蘆の床をしむるよな〳〵
○ 奈良縣 島 田 ならいと

抱きよれば春雨ほそし筑紫琴も中る緋ぶさに白梅のちる
越 後 伊 淵 子

春海

舟つなぐ入江の里の音しづかかすみこめたり春の海づら
○ 上 毛 今 井 八 百 子

鐘樓に六ッの鐘撞く雛僧の衣の袖に花ちりかゝる
山口縣 大 谷 ま つ 子

覺悟

かくなれば君がかたみのうなゐ子を人として世に立たしまうさん
○ 千葉縣 原 田 清 子

ふとみやる眼にうつる稻荷宮とふ人なくて春雨のふる
○ 下總國 中 村 由

夢さめて深き思ひに沈み行けば鎭守の森に神鈴高う鳴る
○ 美 濃 野 村 [illegible] 芋

若菜摘む春ともなれは古里の三年の昔戀くしそ思ふ
徳島縣 花園舍 みさを

厚氷
庭のあつき氷を朝風に破のたゝく音のさやけき
京都 白方露子

○
去年君と遊びし此庭に來て見れば山水變らず君今在さず
常陸國 嚴洲女子

荒庭の梅
月朧ろ牛ひきかへる童に二ひら三ひら花ちりかゝる
越後國 內藤ゆき子

○
夕烏のかけは落ちけり消えにけり思ひぞさむき雲のけはひや
岡山縣 小山松枝

春の歌の中に
ものゝふは屍をふみて進めるを花のしたかけたれか夢みる
信濃國 武井けん

春草
春ごとに神のなさけにうるほひてよみがへりゆく野べの小草や
茨城縣 栗原龍子

○
うら〳〵と霞める野邊に鳴く雲雀何の秘密を天に告ぐらん
備前 松本もと女

○
梅の下に語りつくして君行きてかくて一年春めぐりきぬ
京橋 田中あき子

○
森の中の山門いたく秋ふけてまばらに咲けり鷄頭の花
山梨縣 小野初子

惜花
白桃の花さく宿に導きゝて春の日永に乳母か家問ふ
上總 土屋露子

○
さなきだに花は七日と限れるを心もなげに風ぞ吹きぬる
上毛 今井房子

○
春日影うらゝに受けて獨一人機織る椽に梅の花ちる
大阪 山田いな

○
花の上にねむる胡蝶の夢にだに小さきうれひのあるぞ悲しき
攝津 和久薫子

○
なつかしき友と別れてひとりゆく荻原三里只虫のこゑ
伊勢 加藤倭文子

梅の花
いろこそはさくらにおとれ梅の花ならぶにほひはあらじとぞ思ふ
牛込 渡邊まき子

***

○
君のいます汽車は霞につゝまれてのころ野花の露うつくしき
福岡縣 豐村節子

登校の際
行きがてにあやめもわかぬ雪吹雪心は遠くわだつみの君
青森縣 工藤靜江

○
ソヨ〳〵と東風暖く吹きぬれば園の白梅花咲き揃ふ
北多摩 小寺都女子

○
菫咲き菜の花咲ける道のべを行きつ戻りつ日は暮にけり
麻布區 高橋桂水子

○
見るからに嬉しき友の言葉かな優しき筆の跡ぞ戀しき
越後國 齋藤周子

鬪てふ題にて
ものゝふの劍をれやとし銃まくらもすふゆめみな戰のゆめ
山口縣 愛子

○
テニス終へてやがて家路に辿けはおぼろに霞む月は出にけり
北多摩 兒寺花子

○
藪かげの庵もいたくあれはてゝ笑めるもさびし白梅の花
奈良縣 山田みれ子

○
氏神にものうる家のさかえ來て宮の祠はとかすのまされり
鳥取 上山千重子

○
梅が枝に鳴く鶯の木陰れて花の屛壁たてつかも
滋賀縣 藤居えい子

冬の月
青ぞらに見おろす松に霜かたく星をわけ行く有明の月
東京 近藤愛香

筏上落花
蛙なく細谷川を下り行く筏の上に散る櫻かな
廣島縣 中村しのゝめ

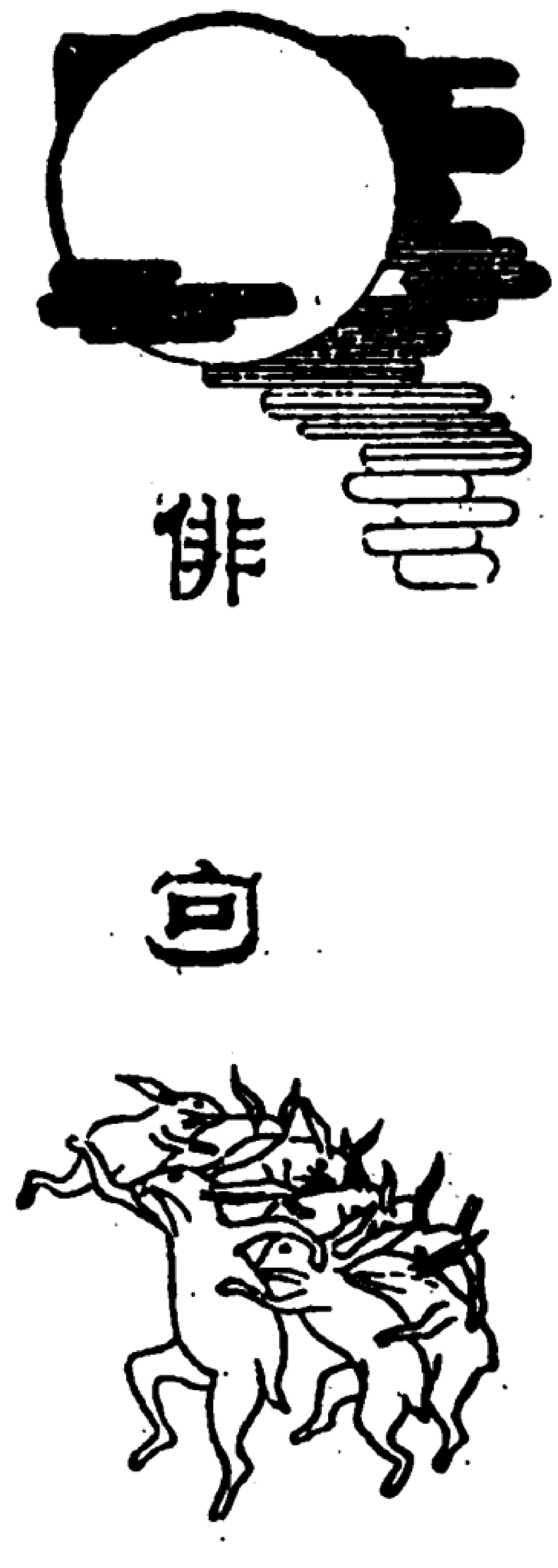
○
東より西へ消え行く按摩笛親思ふ身の胸にしみける
紀伊 樋口はつ子

暮春月
花は皆散りし梢に有月の月のみ霞む春の暮哉
紀伊 はくらき

落花
脊の君か手植のさくら散り初めて思ひ出多き夕暮の窓
越中 田中きよ子

時鳥

黄昏に五月雨はれて時鳥虹ますあたり聲の聞ゆる
楽しきもの　福島　杉原たか
一年の學ひの窓の業卒へて親しき友と董つむ日は　大阪　田中常子
○
櫻ちる萱が軒端に日はてりて心ちよげにも猫のねむれる　小石川　馬島みつ江
○
月淡し花影ゆらぐおはしまに思出すみし姉の顔反古
春の雨　靜岡縣　靜枝
柳多き川添一里日は暮れて草あたゝかに春の雨降る　丹後國　志樂わい子
○
朝こちは吹き渡るらん池のべの柳の糸はゆらぎそめつゝ
若菜　廣島　鐵村壽芽
春の野に若菜つまんとたゝつめは我れにさきたつ里の乙女子
夏山家　三州　松子
山里は夏こそよけれ風かよふ木かけの清水軒の月かけ
折にふれて　長崎縣　嬉野益子
人めなき木の下陰にひれ伏して祈るは君の幸多かれと
○　兵庫縣　北村房子
白梅はまだつぼみなる別莊にかゝるたに興の若き聲もる
○　遠江　坂田はま
菜のとぎれ〳〵の蜑敷多野原一面菫花咲く
渓梅　備後國　桑原智惠子
問ふ人もまれなるたにの梅か枝にやとなしめたる鶯のこゑ
逝きし友を懐ひて　福島　今村きよ
共に見し櫻咲きけりなき君も此の世の春の花や戀ふらん
渓梅　備後國　桑原八重子
谷川の流れの末もかをるなり岸邊のうめやさかり成らん
○　遠江　小川みつえ
幼子の遊びし後か畦道に蒲公英二つ三つ四つ
折りにふれて　丹波國　波多野繁子
歸り來る馬子の鄙歌たそがれて鎮守の森に月浮び出ぬ




## 巖谷小波先生選

**天**

奥庭に白山茶花や晝の月　奈良縣山邊郡朝和村字永原　島田ならいと

**地**

羽衣の松半分を霞みけり　美濃國山縣郡谷合村　内藤みち子

**人**

堤行く人うつりけり春の水　大阪西區立賣堀北通三ノ十七　山田武子

**秀逸**

畑打の汽車の煙に巻れけり　美濃　日比舒子
夜櫻や院の館に打つつゞみ　遠州　芳村うめ子
梅ありて茶店賑ふ稲荷かな　埼玉　山下芳子
靜けさの餘る柳や朧月　長崎　林田滋枝
春雨や君が琴聞く木槿垣　西備　池田仙翠子
南窓の櫻北窓の柳かな　兵庫　[illegible]

鳶一つ霞から出て霞みけり　新潟　内藤雪子
雉子雪雀なくや百歩の杖の内　上野　木暮きん子
如月やほろ／＼落つる松の皮　三河　都筑靜子

よしや日は暮れても花の木蔭かな　佐賀　武島ひで子
春の雨女もすなる日記かな　武藏　伊藤梅花子
雲雀なきテニスコートに夕日さす　長野　讃岐女史
二つ三つ風のまたゝくや湖の上　札幌　林佐登子
見に行けば蝶も來て居る牡丹哉　越後　五井香子
春の野や霞に入りし輕氣球　上野　安藤たゞ子
梅に月しんかんとして水烟る　京都　長谷川みつ子
京柳五百羅漢を包みけり　東京　松村柳子
戀戀の拗捩て別れし春の宵　橫濱　大島照子
官長の社長が軒や初櫻　名古屋　岩瀨波子
山吹や家の主は未亡人　陸奥　鈴木ひで子
朧夜の御高祖頭巾や小提灯　麹町　高橋ゆかり女
春の雁離れ／＼に行きにけり　美濃　臼井安子
一日を蝶とあそんだ花野哉　豐後　豐岡初子
陽炎や乳取る小屋の小屋の口　越中　向川ます子
朧夜を祈る人あり御社に　相模　苅谷靜子
すみれ野口ハイチの詩集忘れけり　加賀　西川登代子
梅が香や音なき雨の降る夕　信濃　武井けん子
春の野の菫をすみれの花に候　信濃　恩田苑子
梅の花二軒ならんで貸家あり　牛込　渡邊まき子
春の夜や五山の家のねむけなる　石見　千代延靜子
春雨や鎭守の森の深みとり　大阪　板橋薫子
孤や摘草しつゝ墓の前　遠江　阪田はま子
雉子鳴てつゝじの風牛歩淡し　赤阪　高瀨八重子
海山に人ふきよせて春の風　東京　鶴澤良子
人と花ゆかりの多き彌生哉　上毛　阪本まど子

初雷や緣雨ぬくき風呂戻り　筑前　芳野梅子
雀子や椽に子供のまゝ事す　澎湖島　山門若葉
相合傘花見歸りの小雨哉　紀伊　高池はくらむ
今拾てし窓に蝶や春の川　奈良　竹田久子
白桃や月によろしき里小路　遠江　大石よし子
れた牛を井んで寢たり草の蝶　阿波　すみれ子
花盛り文がらばかりたまりけり　攝津　藤原俊子
春の夜の湖畔の亭や人の影　東京　近野榮子
おぼろ夜や障子にうつる花の影　美濃　臼井茂子
蝶とぶや兒等に追はれて水の上　丹後　志樂わい子
白酒にいさゝか醉ひし娘哉　美濃　篠井邦子
童等が戰遊びす春野哉　越中　松尾靜子
雨晴れし月の野道や梨の花　淡路　岡田良子
梅ヶ枝を烏帽子に添へし小檬かな　伊豆　內田三千枝
鶯に繪師が硯の乾きけり　大分　矢野靜子
將軍の笛の秘曲や春の月　越中　小山かめ子
牛の聲彼處の野邊や夕霞　播磨　藤原久榮
春の雨花の雫とかはりけり　盤城　錦引しろ子
山里の花を案内の小蝶哉　周防　島津いち子
夕風や柳の糸のゆらぎけり　越後　星野紅華子
囀や人なれ顔の籠の鳥　美濃　田中たづ子
ほかの木に吹かぬ風あり糸柳　千葉　美佐子女史
また松の音や二月の嵐山　尾張　木橋錦子
魚河岸にぬれ鍵よむや春の月　群馬　吉田きみ子



改定

# 毎號懸賞募集項目

○論文(半紙又は美濃紙廿四字二十行以内)
日本女子大學校教授文學士鹽井雨江先生選

○抒情文(全上)

○叙事文(全上)

○消息文(半紙又は美濃紙廿四字二十行以内)
女子文壇社編輯局選

○ハガキ文(はがき振假名付廿四字四行限)
廣津柳浪先生選

○短篇小説 讀切(總ふりがな付廿四字六十行内)
東京女子高等師範學校講師文學士尾上柴舟先生選

○新體詩(半紙一枚十句以内)
竹柏園主佐々木信綱先生選

○短歌(半紙又は美濃紙二ツ切一首限)
巖谷小波先生選

○新舊俳句(官私はがき一枚一句限)

▲以上各欄共一人新作一章宛寄稿之事
山中古洞先生選

○圖畫(二寸五分の三寸判風俗景色五枚以内 雁皮紙(着色無用))

▲此外女子文藝又は家庭教育に關する事項其他の通信妨なし

**投稿締切** は毎月十五日に繰上げ申候

但編輯局選に係るハガキ文又は誌友倶樂部其他讀者通信は勉めて編輯上差支なき限りのものは間際まで採用するとあるべし

## 毎號奬學 賞與品 規定

▲小説▲論文▲消息文▲抒情文▲叙事文▲圖畫の賞品左の如し

○天賞：金壹圓五拾錢
○地賞：金壹圓
○人賞：金五拾錢
(總て相當價格の物品を贈呈すべし)

▲新體詩▲ハガキ文▲短歌作句の賞品左の如し

○天賞：本誌三ヶ月分
○地賞：同二ヶ月分
○人賞：同一ヶ月分
(總て逐號贈呈す)

賞品は總て掲載披露後五十日を經過の後美麗の證書を添へ贈呈すべし

天地人賞に當撰者は可成次號發行期日の廿日前に「寫眞」一送付あれ美術寫眞版にて印刷紹介すべし

## ▲嚴守すべき 投稿規定 必一讀を要す

○投書は各欄とも決して政治的時事論に渉るべからざること、○用紙は規定の紙に限る○投書は一行廿四字詰一枚廿一行に認むべし但し句點も一字に數ふべし○投書には題の下には必らず本誌に倣ひ住所姓名を明記し、書體は楷書にて假名は平假名を用ひ明瞭なるを要す○各種の投書は必ず別に認むべし○封筒には『女子文壇原稿』の文字を記すべし○投書の中には他の用事の文句を記すべからず○投書には各自句點を施すべし、圏點は一切施すを禁ず○投書は他人の作物を剽竊するを禁ず之を犯したる當選文は無效たるべし○投書は一切返附せず○此規定に背く原稿は一切沒收す○投書は不足、未納税は一切受取らざるべし○投書丈け取纏郵送するときは開封にして差出せば卅匁迄二錢にて事足れり

▲寫眞寄贈=各地女學校舍及校長教頭を始め卒業生又は教育上參考となる寫眞寄贈あれ寫眞版に印刷して紹介すべし

▲其他の事項は毎號の「編輯だより」欄に就て知らるべし

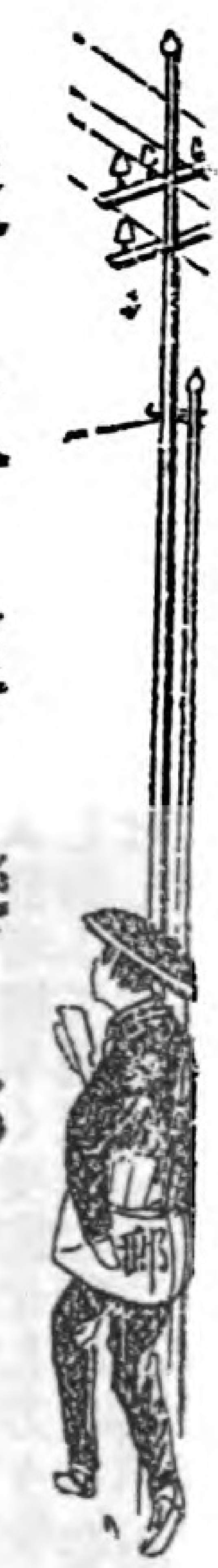
## 投稿家へ謹告

▲投稿者は執筆前に近刊の分に掲出しある投稿項目規定を熟覽ありたし

▲熱心なる諸姉の投稿は勉めて校閲の上順次掲載必ず規定を守り佳作を投ぜられんとを希望す

▲愛讀者、投稿家、諸姉が紙上の交際を計らんため寫眞を集めて折々口繪に挿入す此好機會に撮影して奮て寄贈あれ

# 誌友倶樂部



## ○剽窃詩文の注意

▲千葉縣上總國山武郡成東町、吉原靜江は前科つきの曲著なり、文壇の大泥棒なり、曩に剽窃小說「動員令」を投じ記者及び選者の眼を瞞着したり而して尙飽き足らずまた今回第三號に於ても新體詩内裡雛を投じて吾が女子文壇の神聖を蹂躙しぬ、該篇は彼の無弦弓の著者河井醉茗氏の作にしてかつて雜誌「文庫」に掲載されしものなり他人の苦心せし作物を剽窃し圖々／＼しくもこれを吾が女子文壇に投ずる大膽なる陋劣なる行爲に至つては寧ろ憫然に堪へざるものあり斷乎たる處置をとらるべし敢て記者に言ふ、(大阪、あきらう生) ▲こんな立派な雜誌に剽窃文を投稿する人あるんですもの、妾にくらしくつて／＼、御覽なさい、第一號新體詩秀逸「野の小川」は、萩谷ちよさんの作とは思はれません。だつて中學世界第六卷十三號の新體詩第二賞、西川霞川兄の「いさゝ川」と所々文字は異つてゐますが、其想は同なじなんですもの。それから第二號の新體詩岡田刈萱さんの「胡蝶の賦」も、中學世界(たしか)の胡蝶といふ文をつゞめたのぢやなくつて？、岡田さん、妾さう思ひます。(福島信夫の里、靜子) ▲過日妹の購讀いたし居候女子文壇一讀仕候處またしても木暮某なる者拙詠『黄金の鈴しろ金の鈴振るかごと春の譜もらす駒鳥のらゑ』て嘗て萬朝報に投ぜしものを一字一句も違へず住所まで麗々しく掲載に相成居候か、る敗德者は以後見せしめの爲制裁は嚴にせられんこと願はしう御座候(弘前富田新丁平山淸陵) ▲記者さん本誌一卷三號で新體詩天賞當選者吉原靜枝作の内裡雛は秀才文壇四卷三號天賞の藤山と云ふ人のを盜んだのです、そして藤山と云ふ人も亦文庫から盜んだのです、(埼玉伊東れう子) ▲本誌第三號短歌天賞、上野の木暮とよ子孃よ試みに明治三十七年四月十二日發行の萬朝報第一面五段の下段を見よ其處にある新派和歌の中弘前の平山淸陵氏の作歌は實に貴孃のと等しくある貴孃以て剽竊と爲さざるか又名古屋の紫雨女史の小說「黑髮」は妾嘗て昨年十月發行軍國文壇秋の卷にありし樣に思ふなり孃等よ過を改むるに憚る事勿れ(相模綾瀨濱子) ▲本誌第二號新體詩「露歌」は恐らく瀧川きよ子の作でありますまい曾て中學世界第三卷二號で乾賞を得られた某三君のお作「露の歌」と少しも違ひません(美濃、うもれ木女史) ▲女子文壇記者閣下、妾の原稿は、必ず掲載せらるゝものと信じて居たのに落膽しました、最も拙劣だから沒收なさいましのならば止むを得ません、然れど、連錢蘆毛、動員令、斷絃、野調、追分節、星等の樣な剽窃文ではムいません、記者先生よチト察して下さいな(越中、宮田伊惠智子) ▲拜啓貴文壇第三號俳句地賞の春の池緋鯉鼠鯉の戀もあらんの句は青年議會少年衆議員第八期第五號俳句天賞の柴舟の作と同一句に有之候右柴舟なる人は富山縣福岡町江尻方なる淸野はる子君にして青年議會の議員に有之候哉否や存じ不申候へ共御參考にまで拜陳仕候(石見、山崎春江) ▲越後國長岡千手町武藤枝子君、君が本誌第二號短歌の部で人賞を御とりになつた、「亡き姉が形見の指輪ゆるうなりて思ひ出多き春の夕ぐれ」と云ふ歌はれ、秀才文壇四卷八號の折にふれて、と題し人賞を得た栃木縣栃木町湊町牛久方木村つゆ子さんの作を盜だのではありませんか、斯云ふ歌なんですよ、「亡き君が形見の指輪ゆるうなりて思ひ出多し春の夕ぐれ」(陸前幽蘭子) ▲越後武藤枝子さん、あなたは寫字が、お上手ですね!、本誌第二號人賞の和歌、は「中學世界」第七卷第六號栃木木村靜江さんのを、お寫しになつたのでしよふ(澎湖島下町和似子) ▲筑前の花田います樣の一讀を願ます貴女が投じ給へる本誌第三號の短歌「益良夫が駒に水こう柳かげ柳にをころ春の夕風」はよもや貴女の作ではありますまい此歌はある軍人の方が作られたのですよ私はたしかに拜見してまだ忘れずに居ます我が親愛なる女子文壇の誌友にかゝる人があるとは私らはほんとに口惜しい事に思ひます此後はきつと御つゝしみなさいよ(備中小田郡、愛讀女) ▲前號に既にアベキ出されたる千葉縣吉原靜江女史は第二號の小說の動員令は正しく剽窃して出されたが今又第三號美文落椿(地賞)は彼の秀才文壇四卷第三號美文人賞の岐阜縣加茂郡伊深村柴田春風の落椿に一字一句の差なし、又君の同號の新體詩天賞内裡雛は秀才文壇第四卷三號新體詩天賞の藤山紫軒氏の者と一字一句の差なしだ、此の藤山なるものは文庫二十二卷の六號に出て居た河井醉名子の作を剽窃せしを女史が又々之れを剽窃したのだ夫れから三號新體詩「放島」作家京橋區銀座二丁目十五河村紫香の投ぜし者はこれも秀才文壇第四卷九號岐阜市の山住白虹氏の投書せし者と一字一句の差異なし殊に吉原女史は殆んと何んな人なるか秀才文壇にて曾て千葉縣は剽窃兒の巣屈なりと云はれたが實にさうである(ギフ、無名氏) ▲記者樣無念でたまりません。天の星地の花と淸らに美しう咲き出てた此の女子文壇に、剽窃者が毎號の誌上に現るゝとは。第三號美文地賞落椿も「中學世界」から窃取したもの又同號新體詩「あはれ將軍マカロフ」も、「中學世界」第七卷第七號の山口縣防府町種田湖人君のを窃んだものです。(常陸、孤芳) ▲皆樣、私は小村に住で居ります一少女で御座いますが剽窃文の多いのには私かなしう御座います三號の小說名古屋の紫雨女史の「黑髮」私一字一句もちがはないのを一月發刊の秀才文壇でたしかに見ましたかやうなことをなさる御方の奥心の程なんと卑怯ではありませんか(群馬縣郡久居得子) ▲第三號の美文欄で天賞「春風」(作者千葉山城郡千代

村岩山内田小三郎方翠蹊女史）は「女學世界」第一巻第三號で丙賞を得た下野宇都宮山里ユキ子のと同文であります以後改心遊ばせよ一寸御忠告致します（岡山蹊、月女史）▲一巻二號に出て居ました「しづやかに：…：…の和歌は女學世界に似た歌があるのです それを先月は妾が家に居りませんでした爲 弟が妾の和歌筆記から投書しましたのです 誌友諸孃幸に諒せられよ忠告をうけぬうち妾より御わびいたします（内藤すいむ）▲神奈川縣の中村美津枝子樣、貴女は、何んたる敗德の行爲を敢てなさる御方で御座いませう？本紙第三號の新體詩欄に投書なすつた「雲」と云ふ一篇は御自分の作ては御ざゐますまい！速かにミューズの神にお謝しなさい（鐵槌女史）▲女子文壇第三號新躰詩人賞「我が歌」は「中學世界」第三巻十三號甲賞野村董雨君の作と少しも違はぬ、筑前の花田翠子と名乘る女は思想界の賊なり（東北の秋月女史）▲一寸申上ます詩文の剽窃者たる東京ゆかり女千葉吉原靜江及び小高せい瀧川きよ山田雪子等何の面目あつて本紙へ再び顔出しが出來ると思はれるか、記者閣下及び本誌愛讀者に罪を謝して眞人間となりたまへ（群馬縣下、田舍の一女）

記者曰く、此外信濃女史、麹町小島仁子、石川縣松原美津惠、愛讀者の一人、下總榎本すみれ女史、下谷加藤瀧月其外、某々數多の諸孃より、剽窃詩文に就いて懇篤なる忠告がありました、記者は諸孃が「女子文壇」を見られる事の親切なるを謝し且其忠告を厚く拜謝す、吉原靜江以下數名の剽窃家には無論賞品の發送を見合せました、發表後苟くも疑はしい處のある懸賞作物に對しては斷然賞品を送りませんから諸孃も其お積りで潔白、天地に愧ぢざてん心の底から出た御作を寄せたまへ。

## ○諸孃の交際

▲皆樣私しは友人から女子文壇が宜しいとき〻まして一號から愛讀して居るのですそれかられ私編物（しぼり）編でますが十人限り差し上げますから拙ないのでも宜ろしければ御申込みなさいすぐ送ります（北海道膽振國早來市街地本郷なはえ）▲敬愛なる文壇の諸友諸君、繪はがきの交換を致したうございますから、めづらしいのを一枚づゝ御自筆で、お送り下さいよ、妾も返事をいたしますから。（千葉縣東葛飾郡八木第一小學校內、榎本すみれ）▲神戸神山園子樣に申上候第三號女子文壇にて繪端書交換致し度由承り候まゝ早速御贈り申上候ところ二三日過ぎて戻り候（栃木、金澤保）▲神戸の神山園子樣どうか繪端出の交換を願ひます、岡山の秀芳女史樣御處をしらせて頂戴、學校の名も御序に（岡山葦芳女史）▲愛知縣下壇友諸孃に一言を呈す、愛知縣下諸孃よ奮勵一番嚴酷なる文陣を張り鋭利なる筆鋒を磨き活潑なる思想を詖して本文壇紙上に光輝を放たれん事を祈る（愛知縣三河國碧海郡大濱町苦梗、都筑靜子）▲私、鳥取縣の方がこの誌上に起つて靈妙の詩情を吐露なさらないのを誠に殘念に思ひます私は五年前から東都の客となつて未だ一度も歸らないのですよ此の誌上に故園の方がのつているとほんとうに嬉しい、何となく國の方に逢ふた樣な氣がしまして（渡邊まき子）▲皆樣と繪端書交換を致しませんか送つて下されば私も上げます（下谷中根岸四、宮地方加藤瀧月）▲妾眞誠なる御方と交際したいわどうか薄學な妾でも御見捨てなく御愛顧の程を切に、（神戸市楠町六丁目壹六五妹尾方青山文子）

記者曰く、本欄を以て諸孃が交際の御紹介やら問答やら書籍、繪ハカキ編物等の交換の知らせやら、成る可く廣く且確實に健全に交際の渠としたいと存じます、本欄に投書なさる場合には住所本名ともハッキリ御書きにならぬと不都合だらうと存じます、念の爲に申します。

## ○讀者と記者

▲記者樣早く受賞せし方々の寫眞版を口繪になし給ふて喝望禁じ能はざる妾等にその風采に接せしめたまへ（府下小野路、小島はま子）（記者曰く皆樣が未だお送りならないので遺憾です次號から載せる運びに至りませう」▲記者樣に伺ますか小說の投稿は用紙何でありますか半紙なら二枚も三枚も綴て宜しいのでしか、又宛名は表に書いて宜しいか六號に御答を（絹縮、くん月）（記者曰く、仰の通りでよろしい用紙は半紙又は罫紙原稿紙に限る）▲記者さんに御問申ます妾は日々學校で學んで居るリーダーから趣味ある御話を譯して投書しようと思ふのですもし價値があれば御伽噺みた樣なものでも揭げてくれろてせうか（紀伊、秀子）（記者曰く、リーダーは多く譯されて居るやうです、外に優しい咄がありますならば拜見の上、揭げます）▲幾萬の讀者友の君より一口噺を御募りに相成而して女子文壇に御揭げ下される樣記者に深く懇願す皆樣も御贊成を（志津敏子）（記者曰く、考へて置きませう）▲皆樣私も三號より愛讀者になりましたから不束者ですけれど御交際下さいませ私何より天女の如き女子文壇か出來たので嬉しくてしかたがないわ記者樣御願ひですから俳句を三首までにして下さいな（伯嗜酒林智子）記者曰く、好いのを一首選んでお出しなさい）▲小波先生に俳句へ御評を願つて下さいな記者樣（武藏の一女）（記者曰く、願つて見ませう）▲御尋ね致しますハがキ文文ハがキへチヤンと廿四字詰にかくんですか乃至は九十六字以內ならどうかいても宜しいのですか（阿鍋さん）（記者曰く、何う書いても宜しいが、能く分るやうに書いて下さい）▲建樹先生の歌の糸口を可成早く御記載の程をねがひます（加納美子伊東やよゑ外拾名より）（記者曰く、御覽の通り本號から出ました）▲記者樣妾は女子文壇と丁度同じ妹を持つて居ります本誌が月月に改良されて段々と理想の雜誌に近かづいて行くのがまあほんとに妹が育つて行くのと同じであります（府下小島登美子）（記者曰く、あなたのお妹御さんのお成長遊はすと同じ樣に本紙も健全に美しく育て上げたいと存じて居ります）▲拙ない文を出すなんて眞實に恥かしいのですけれどもはじめての事ですから宜敷樣御指導くだされい（澄子）▲記者樣始め誌友諸姉私も今度仲間入をしましたから何卒よろしく

願ます（群馬縣利根郡利南村津久井女史）▲記者樣一寸御伺ひ致しますが投書は半紙の罫を引いてあるのぢやいけませめか最も原稿紙ですが是非御答を（京都菊子）〔宜敷う御座います〕▲記者さんは我々に必用な書籍や雜誌の評を載せてくださる由ほんとにうれしいですよ、また京都の御方は少し投書なされては加何ですかどの雜誌にも京都の方の勢力がないのは殘念でありませんか（同人）▲記者樣、御初にお目に掛ります、今年は御地では度々雪が降りましたそうですがさぞお寒いことでせう、私は投稿に金澤のたま子と書きましたふつゝかもので御座いますがこれから記者樣の御厄介になりますからどうぞよろしく願ひます、私はいつかな理想の雜誌が早く發刊せらるればよいと思つて居りましたが此度御社から其名まて女子文壇といふのが出たので誠にうれしく思ひます、私は下手ながらも投書して記者始め皆樣の御敎を受けたいので御座いますそうして此雜誌の長へに榮えんことを希望するであります、私は自分の名を知らるゝのが恥かしいのですからとうか本名を出さずに下さい、それとも是非共出さなければならないのですか御手數ながら當欄て御敎示下さい（環子）〔本誌に對する厚き同情社中同人深く感謝いたします、御姓名は必ず投稿に雅號、本名共明記して下さいそれてないと御入選の折賞品を呈送することが出來ませんてすから、最も世間に發表するなと云ふ事なら紙上へは匿名て出してもかまひませんが、記者迄には是非御本名を知らして頂きたい〕



## 口繪活人畫說明

口繪に掲げた活人畫は本年二月二十二、三兩日間、東京虎門內東京女學館同窓會が、恤兵の爲めにとて種々の演技を催した中の一つて、筋組は大槻如電翁の案に成りたるもの、名題は「月雪花顔色」て三齣に仕組まれたのである、

圖の右面は雪の見立て香爐峯と云ふ、枕草紙より取つたもので、雪の日に淸少納言文才を示す型、即ち

一段　少納言ひざまづき簾を內より半分卷く

二段　少納言たちて簾まきあげ鉤を懸ける生昌簾外に坐し其才智を感ずる體

三段　少納言坐して雪景を指示す生昌高欄によりて雪景を見る

中央面は月の見立て紫式部望の夜石山寺に通夜して須磨、明石の兩卷を書き留むる型、即ち

一段　式部旅裝にて石山寺へ參詣の所

二段　式部旅裝を解き打掛姿にて中央に坐し見經函を持來る

三段　式部文臺を前にして經卷を開き筆を執り月をながむ

左面は花の見立て紀內侍勅選歌に應ずるてふ筋、鶯宿梅と云ふ、型は即ち

一段　內侍檜扇に懷紙のせ梅に別を告ぐ

二段　藏人惟正上手に立ち內侍下手にしさりて敬禮す、女童懷紙を扇のまゝ藏人にさゝぐ

三段　藏人懷紙とりあげ讀み內侍再び中央に立ち扇にて顔を蔽び女童下手に中腰となり兩手をさげる

# 編輯たより



▲體裁と實質の改良　我女子文壇は本號から表紙を一變すると共に内容にも改良刷新する處がある、但し吾人は際立つて改良を吹聽する事を好まぬ、只だ熱心なる讀者諸孃が細心周密に本誌を讀まれたならば必ず本誌が毎號着々として歩一歩を進めつゝ編輯に工夫を凝らして居る事がお分りになるでせう。

▲記者の立脚地　記者は只一意投稿家諸孃に親切ならんことを思ふので、一枚のハガキの文、一片の詩稿と雖もこれ皆諸孃が熱注苦吟の餘になるのであるから選者たる名家諸氏に向つても及ぶべきだけ親切叮嚀に是を選拔し添削せらんことを請ふてあるので、選者諸氏も其意を諒とせられ諸孃の投稿に對しては決して不親切の扱ひは爲さないのである。

▲文壇の汚賊　財を盜む者をのみ賊と云はず、人の頭惱を絞りて文字となりたる思想、文章を其まゝ盜む者も惡德許すべからざる文壇の賊である。神聖なるべき本誌の投稿家中にも斯る不德なる女史の現はれ記者は誠に嘆嗟の極と云はねばならぬ、千葉縣の中島靜江と名乘る人の如き其何者なるかは知らぬが屢々他の詩文を剽竊して選評者を瞞着しやうとする、其罪や實に惜むべきである。如何に名家の選評とは云へ天下の作物を悉くそらんじて後ち選拔すると云ふ事は稍困難の事業である選拔する以前に心附きたるは好けれど僥倖にして選に入り誌上に現はるゝ事あつても、我十萬の誌友は直ちに其剽竊なる事を知らせ來る、到底隱蔽し果すべき事でないのに其愚や實に嗤ふべきものである、此白日の罪人、思想界の汚賊、爾後萬一現はれる事があつたら其宿所姓名を詳細に天下に告白して再び文壇に顏を出す事を許さぬ事としやう。

▲月香　久保先生の支那小說翻譯「月香」は本月で完結する筈でしけが紙面の都合で來月に廻しました、其代りに大和田先生の「歌の糸口」續稿を載せましたから愛讀諸孃の諒察を乞ふ。

▲筑前ひさ子孃　本號のハガキ文地に當選せられたが本姓住所ともハガキに洩れて居ました、何うか本社へ宛てゝ知らせて下さい、賞品を送ります。

▲懸賞正誤　第三號懸賞繪畫「天」「地」「人」とあるは記者の誤解で前號の編輯だよりにも古洞氏の書簡にある如く「地」と「人」とである、依つて「天」を「地」と「地」を「人」と改む。

## 定價

女子文壇（每號三宅氏水彩畫寫眞口繪數葉挿入）　毎月一日發行

| 冊數 | 前金 | 定價郵税共 |
| --- | --- | --- |
| 一冊（大判百二十頁） | 前金拾錢 | 定價郵税共一冊金拾壹錢 |
| 六冊 | 前金五拾七錢 | 定價郵税共六冊金六拾三錢 |
| 十二冊 | 前金壹圓八錢 | 定價郵税共十二冊金壹圓廿錢 |

外國行郵税共拾四錢

### 愛讀者の再讀を乞ふ

○（愛讀は男女を問はず）○本誌は前金の外送本不致候○御申込の前金相切れ候節は無斷送本停止仕候○代金過不足のなき樣注意被下度候○領收書は一切差出さず着本にて領收と見做被下度候○御注文毎に何號より何册及御住所氏名等は明瞭に御認め可被下候○御郵券代用は必す定價の壹割增（可成壹錢券）に願上候○御狀の未納税は一切受取不申發信の際御注意可被下候○御問合は返信料添ひ願上候

## 廣告揭載料

| 種別 | 一頁（二十四字六十四行） | 半頁（二十四字三十二行） | 一行（五號字二十四字） |
| --- | --- | --- | --- |
| 普通 | 金九圓六十錢 | 金四圓八十錢 | 金拾五錢 |
| 特別（表紙二面四面） | 金十二圓五十錢 | 半頁以下は御斷申上候 | ○ |

〆切　發行前十五日

▲廣告特別取扱

神田區千代田町二番地　博報堂
今區末廣町三十八番地　富士原秀穗
京橋區南佐柄木町　日本廣告株式會社
京橋區南大工町九番地　一星社


明治三十八年三月廿九日印刷
明治三十八年四月一日發行

不許轉載

定價金拾錢

東京市京橋區大鋸町十一番地
編輯兼發行者　野口竹次郎
東京市京橋區西紺屋町二十六七番地
印刷者　石川金太郎
東京市京橋區西紺屋町二十六七番地
印刷所　株式會社秀英舍

發兌元　東京京橋區大鋸町十一番地　電話本局六〇七番
女子文壇社

直接特約大賣捌所
東京市神田區表神保町三番地　東京堂書店
東京市京橋區尾張町二丁目卅　東海堂
東京市京橋區鎗屋町十三番地　北隆館合資會社
東京市神田區裏神保町一番地　上田屋書店
東京市京橋區鎗屋町九番地　良明堂
新潟縣長岡町字表一之町　酒井屋書店

た。

"This is," she went on, "the first day of vacation. I want to forget every thing in connection with looks and schools, knowledge and wisdom. Please let my poor brain have a rest."

又言葉を續ぎ,
「今は御休みの第一日目で,私は本籍や學校だの,智慧や智識等に關する事は一切忘れたいので御座います.どうぞ此哀な腦髓を少し休まさして遣て下さい。」

Again they laughed gaily.

又兩人は聲たからかに一笑いたしました。

"Very well. I shall not say any more," answered the guest, "now is your turn to speak. I shall be a ready listener. Do sing something for me, please."

「畏りました。モー申しません,今度はあなたの御咄しの番で御座います.私は喜んで聽きます.どうぞ何か御歌ひ下さい。」

"What shall I sing? Let me see," Fujiko turned her head a little.

「何を歌ひましよう? サー,」と云ひて藤子は頸を傾け,

"Yes I know a piece."

「ソーソー,一ツ知て居ります。」

The two girls sat side by side on the edge of the veranda, and thus sang Fujiko:—

二人とも椽側の縁に腰打掛くれば藤子はかく歌ひました:—

"Face of April, fair its gleam
As the young year's waking dream;—
Spring's glad smile on earth and sky,—
Silver mist and golden ray,—
Shower and sunshine slipping by:
Spring is here to-day!"

「卯月の顏　うるはしゝ
歳のはじめの　夢に似て.
春はゑむなり　天地に,
白かね霞　黄金てり,
雨も旱も　過ぎさりて,
春はきにけり　今こゝに。」

am sorry to take your pretty flowers away from you. Aren't they dear? How ragrant they are Thank you, Fujiko San."

御花を戴いて行きますのは何だか大そう御氣の毒に思ひます. マーア可愛らしいではありませんか. 何て好い香でしよう！藤子さん難有う。」

"Quite welcome. I am glad you like it. Really I love my garden. I can study here undisturbed. But how nice it is to have a vacation after the terrible examinations!"

「どう致しまして. 御氣に入つて嬉しう御座います. ほんとに私は自分の庭が好て, こゝならば妨げられずに勉强が出來ます. 併し恐しい試驗の後で休みのあるのは實によいものでは御座いませんか。」

"Certainly it is. However, don't you like examinations even if we must worry and work hard for them?"

「實際そうで御座います. それでもあなた試驗が御好ではありませんの? それは隨分心配もし, 勉强もそのために致しますが。」

"It is no pleasure for me to be tormented by them." Here both laughed merrily.

試驗で苦しめられますは私に取ては嬉しい事ではありません。」兩人共一度に面白そうに笑ひました。」

"True enough," began Hanako, "and yet somehow, I can not absolutely hate them. I rather enjoy the excitement which goes with them. A vacation would mean less to us if not for examinations; no victory without a fi—."

「御最です. けれども私は絕對的に試驗を嫌いません. どうかと申しますと, 試驗に伴ひます騷動が面白い方で御座います. 試驗がなければ休みの樂みも減ります. 勝利も若し戰爭と一。」

"No more lecture, if you please," interrupted the other.

「演說はも一全く御免蒙ります,」と藤子ははなしを妨げまし

Fujiko, and looking about she exclaimed:—

"What a charming place you have! I see your plum-blossoms are still blooming. Ours are gone two weeks ago."

"Do you see the buds in the cherry-tree next to the old pine?" asked Fujiko, pointing to the tree whose branches were spreading way over to the neighbor's lot.

"They will be out very soon, won't they?"

"Within a week, I suppose."

"How splendid to have them so early. I am envious of your garden."

"Too small, though," replied the hostess, who putting on her garden *geta* went to a small bed of violets and pansies, and picked the flowers from it. She made a tiny bouquet of them and presented it to her friend, saying:—

"A greeting to you from my garden."

"To me, this bouquet?" said Haruko in surprise. "But I

て，あたりを見廻し，

「何と好い所にあなたは入らつしやるではありませんか！あなたの梅はまだ咲て居りますが私とこのは二週間前に散りました。」

「古い松の樹の隣の櫻に蕾が出ましたがお見えになつて？」と藤子は隣家の屋敷に迄ズット枝を伸して居る樹を指示しつゝ尋ねました。

「モー直に咲きましようネー。」

「多分一週間中でしよう。」

「そんなに早く咲きまして實によう御座います事．あなたの御庭が御沛山しう御座います。」

「併し小さ過ぎて，」と主人は答へながら庭下駄を穿いて菫と小蝶花との小な花檀に行きそこから花を摘んで可愛らしい花束とし春子に進めて：—

「私の庭園からあなたへの御見舞。」

「此花束を私へ？」と春は驚いて云ひました．「あなたの綺麗な

# 英　文

津田梅子閲　　河井道子述

## After the Examinations.

In a cozy six-mat room, which opens to a well-kept garden of moderate size, sat Fujiko basking in the sun. The door to the next room was thrown open, and in came her class-mate with a beaming smile.

"So glad to see you, Haruko San. I have been waiting for you all the morning," greeted the hostess getting up. "Do sit in the sun. It is so comfortable here."

"Thank you. Never mind a cushion. It is warm enough without any. I could have come earlier had I not been detained by an early caller."

The guest seated herself next to

## 試　驗　後

手入の行屆いた，可なり廣い庭園を前にした陽氣な六疊に藤子は曝背をして居りますと隣室に通じた戸がヅーとあいて同級生の一人が莞爾として這入つてきました。

「春子さん，ほんとーに嬉い事．朝中お待ち致しましたの,」と藤子の主婦は座を立ちて客を迎へ,「日向にお座りなして．爰は大そう氣色がようございます。

「難有う．座布團などおかまひなく．何も布きませんでも結構にあたゝかふ御座います．早くから來客がありませんでしたら，モット早く參られましたのですけれど」

客の春子は藤子の傍に座をしめ